

独立行政法人国立病院機構

大阪医療センター 臨床研究センター

研究業績年報

2024年

Institute for Clinical Research

Osaka National Hospital

独立行政法人
国立病院機構

大阪医療センター 臨床研究センター

臨床研究センター研究業績 ＜目 次＞

「各研究室の概要と業績・報告」

臨床研究センター	1
幹細胞医療研究室	25
再生医療研究室	27
分子医療研究室	30
エイズ先端医療開発室	34
HIV 感染制御研究室	40
臨床疫学研究室	43
がん療法研究開発室	54
高度医療技術開発室	70
医療情報研究室	79
災害医療研究室	81
臨床研究推進室	86
レギュラトリーサイエンス研究室	88

「令和 6 年度 研究助成一覧」	91
------------------------	----

「臨床研究センターの研究業績の区分分類と業績件数の総括表」	93
-------------------------------------	----

—各研究室の概要と業績・報告—

臨床研究センター

臨床研究センター長 金村米博

当臨床研究センターは、前身の旧国立大阪病院臨床研究部として昭和 54 年（1979 年）4 月に設置され、本年度で設置後 44 年目、平成 20 年（2008 年）の臨床研究センター昇格後、17 年目を迎えた。現在の体制は、4 部（先進医療研究開発部、エイズ先端医療研究部、EBM 研究開発部、臨床研究推進部）12 室で構成され、専任職員 9 名（臨床研究センター長 1 名、部長 1 名、室長 3 名、室員 4 名）に加え、院内で臨床研究に関わる医師・コメディカルスタッフが併任職員として所属する。令和 6 年度は、平尾が EBM 研究開発部・部長、阪森が臨床疫学研究室・室長、上田が高度医療技術開発室・室長、松村が医療情報研究室・室長として新たに着任した。

令和 6 年度の研究活動としては、先進医療研究開発部においては、iPS 細胞等を用いた幹細胞・再生医療研究、ゲノム医療等の分子医療研究、エイズ先端医療研究部では、リーディング分野として HIV/AIDS 研究、EBM 研究開発部では、臨床疫学研究、がん療法研究、高度医療技術開発研究、医療情報研究、災害医療研究の分野で、各々精力的な研究を展開した。また、臨床研究推進部では、企業等からの依頼を受けて GCP（Good Clinical Practice）に則って行われる「治験」、並びに国が定める倫理指針等を遵守して各研究者が独自に行う「臨床研究」の支援業務、並びにレギュラトリーサイエンスに関わる研究を実施した。各分野において、臨床研究および治験等の実施で多数の優れた研究成果を発信したことに加えて、特許取得、競争的研究費の獲得、論文著書発表、国内外での学会発表等で数多くの実績を上げ、国立病院機構本部が令和 6 年度に実施したこれら研究活動の総合力評価において、国立病院機構運営病院に設置された全ての臨床研究センター/臨床研究部の中で、第 2 位となるトップクラスの高い評価を獲得した。

（沿革）

昭和 54 年（1979 年）4 月：前身の国立大阪病院時代に臨床研究部として設置

平成 20 年（2008 年）4 月：臨床研究センターに昇格、1 部 5 室から 2 部 9 室へ改組

病院内組織であった治験管理センターを、新たに臨床研究も含めた支援を行う臨床研究推進室として臨床研究センターに編入

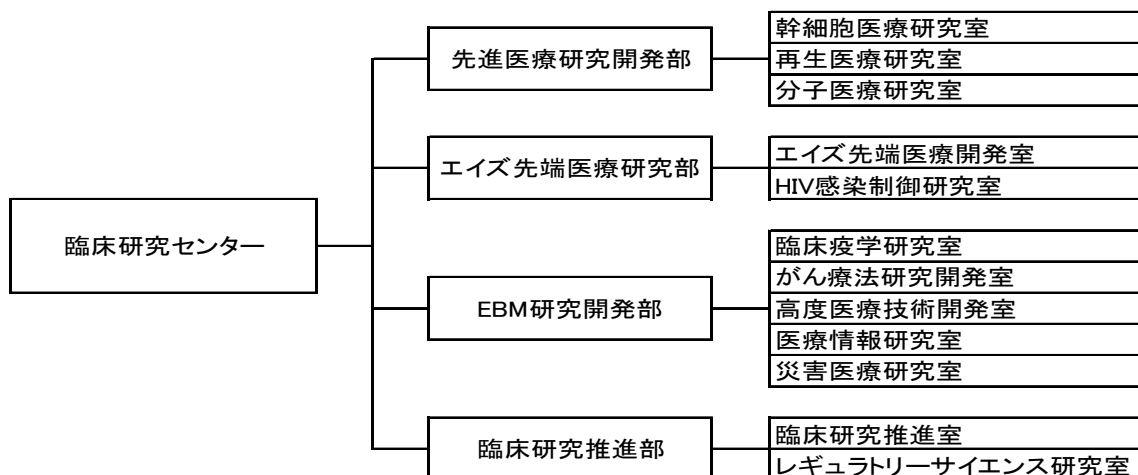
平成 23 年（2011 年）4 月：3 部 11 室へ改組

高度医療技術開発室、レギュラトリーサイエンス研究室設置

平成 25 年（2013 年）4 月：DMAT 西日本拠点に指定されたのに伴い、災害医療研究室設置

4 部 12 室へ改組（現体制）

令和 6 年度（2024 年度）組織図



臨床研究センター長 金村米博（専任）

臨床研究センターは以下の部門により構成される。

I 先進医療研究開発部

部長：金村米博（兼任）

医師に加えて、各種コメディカル部門を含む、医療を担う多種多様な全医療職が参加して、全医療職の有する専門的医学知識を医療機器の技術評価に活用し、全医療職/全医療現場が持つ医療機器に対する大小様々なニーズ/シーズの発掘を可能にする Bi-AMPS 拠点を運営し、医療機器・ヘルスケア関連製品開発とその産業振興を担う人材育成を実施する。

① 幹細胞医療研究室

室長：正札智子（専任）

幹細胞医療研究室では、再生医療研究室と共同で、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）より、神経幹細胞（自己複製と、神経系細胞を供給する能力を持つ細胞）への分化誘導技術と、細胞品質評価法の開発をメインテーマとして研究を行っている。

更に、分子医療研究室が実施している脳腫瘍の分類と治療法の判断に必須となる遺伝子の解析（分子診断）で得られた知見を元に、ヒト iPS 細胞及び由来細胞の腫瘍化に関与するマーカー遺伝子の探索を実施している。

② 再生医療研究室

室長：金村米博（兼任）

各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を実施し

ている。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施している。

③分子医療研究室

室長：金村米博（併任）

各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施している。

II エイズ先端医療研究部

部長：渡邊 大（専任）

①エイズ先端医療開発室

室長：渡邊 大（併任）

大阪医療センターは薬害 HIV 裁判の和解に基づく恒久対策の一環として、1997年にエイズ診療における近畿ブロックのブロック拠点病院に選定され、診療、研究、教育・研修、情報発信の機能が求められている。その中で、当研究室は、HIV 感染制御研究室および院内設置の感染症内科や HIV/AIDS 先端医療開発センターと連携し、HIV 感染症の診療におけるさまざまな問題に対して研究を行っている。

②HIV 感染制御研究室

室長：矢倉裕輝（専任）

HIV 感染制御研究室では、HIV 感染症に対する臨床における諸問題に対する研究を行っている。近年では、殆どの症例でウイルス抑制が得られるようになったが、現在の抗 HIV 薬では潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、ほぼ一生の薬物治療が必要となる。そのため、長期にわたる薬物治療の成功を見据えた、治療レジメンの個別化の実現をメインテーマとして研究を行っている。

これまでに、HIV インテグラーゼ阻害剤の薬物動態の相違と代謝酵素の遺伝子多型の関連（J Infect Chemother. 2015, BMC Infect Dis. 2017）、非核酸系逆転写酵素阻害剤であるドラビリンの透析による薬物動態への影響（J Infect Chemother. 2023）、核酸系逆転写酵素阻害剤であるテノホビル製剤の投与初期血漿トラフ濃度が腎機能に及ぼす影響（J Pharm Health Care Sci.2024）等について研究報告を行った。

III EBM 研究開発部

部長：平尾素宏（併任）

①臨床疫学研究室

室長：阪森亮太郎（併任）

臨床疫学研究室は主に臨床情報を用いて主に消化器疾患の病態を検証し、最適な診療方針や治療方法を検討している。

②がん療法研究開発室

室長：平尾素宏（兼任）

最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しいがん治療法の開発を目的として、基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究を行っている。

③高度医療技術開発室

室長：上田恭敬（兼任）

本研究室は、循環器領域における最先端の診断技術を探求し、臨床現場への応用を目指している。特に心エコー画像を中心とした非侵襲的評価法に注力しており、従来の検査技師によるマニュアル評価に加え、AI解析による心エコー画像の自動計測、レポート作成を積極的に導入している。これにより、多くの計測項目を短時間で取得することが可能となる。

また、こうした医療技術の革新は、医師のみならず、超音波検査技師の業務効率化や教育にも大きな意味を持つ。AIを用いた心エコー画像の自動計測は、日常診療における心エコー計測の負担を軽減し、検査の再現性を高めると同時に、働き方改革の観点からも有用であると考えている。限られた時間の中で多くの症例を評価する必要がある現場において、検査精度を維持しながら作業を効率化することは、重要な課題であり、本研究室はその解決に向けた研究を推進する。

さらに、本研究室は心エコー検査から臨床アウトカムに直結させることも重視している。たとえば、心不全の早期診断と治療である、運動負荷心エコー検査によって、息切れの原因検索や無症候性にBNPが上昇した場合の病態診断は運動負荷心エコー検査の得意とするところである。これらはAI解析を融合することによって、腫瘍循環器領域、アミロイドーシスの早期診断などにも応用が可能と考えている。

AI解析や運動負荷心エコー検査による新たな画像指標が早期診断、予後予測、治療反応評価にどのように役立つかを明らかにすることで、患者ごとの個別化医療の実現も目標としている。

本研究室では、心エコーを中心とした画像診断とAIによる画像解析技術を融合させ、働き方改革につながる新しい医療技術の臨床応用の基盤を構築していくと同時に実際に運用することによってアウトカムを追求する。

④医療情報研究室

室長：松村泰志（兼任）

医療情報研究室では、効果的な医療情報システムのあり方について研究を行っている。実臨床で使えるものを目指すため、現在の病院情報システムと密接に関わるシステムとなる。まず、病院職員の業務負担を減らすためのシステムの在り方について研究を行っている。スマートフォンを活用し、輸液ポンプ、生体モニター、ナースコールのアラームを看護師が持つスマートフォンに表示させること、バイタル等の測定機器からの出力をスマートフォンで取り込み、ベッドサイドで看護記録が入力できるようにすることを目指している。また、機密性を守った上

での適切な臨床現場での AI 利用のあり方について検討する。電子カルテに記載されたデータの研究等への利用をより促進するための研究を行っている。多施設で機密性の高いテレビ会議を設置し、施設を超えた臨床カンファレンスを可能にする仕組みに取り組んでいる。

⑤災害医療研究室

室長：大西光雄（併任）

災害医療研究室では主として下記 8 カテゴリーの研究を行っている。

- ・ 院内災害対応研究
 - ・ BCP を軸とした院内の災害対応システムの研究
- ・ 医療圏における災害対応研究
 - ・ 大阪市中心部の特性を組み込んだ、医療・福祉・行政の連携を重視した災害対応の研究
- ・ 災害医療教育に関する研究
 - ・ 全日本病院医療支援班の講習内容の作成と実施
 - ・ 災害時要配慮者に関する研究
 - ・ 災害時に留意すべき疾病に関する研究
 - ・ 災害時の感染制御に関する研究
- ・ マスギャザリング医療対応に関する研究
 - ・ 大阪・関西万博における医療救護のあり方
 - ・ 人為的な多数傷病者事案に関する研究
- ・ 事態対処医療に関する研究
 - ・ 事態対処救護に関する訓練・コース開発
 - ・ 大阪府警との連携システムの構築
 - ・ 救急止血法の訓練モデルの開発
- ・ 病院前救護活動に関する教育
 - ・ プレホスピタル人員に対する動物を使った外傷対応教育
 - ・ 事故災害現場での多職種での救助活動を理解する教育資料の開発
- ・ CBRNE と呼ばれる特殊災害対応に関する研究
 - ・ 化学テロ危機管理に関する研究
 - ・ 爆傷の病態解明と医療対応に関する研究
 - ・ ローンオフエンダーへの医療対応の研究
- ・ Health Security に関する研究

IV 臨床研究推進部

部長：金村米博（併任）

①臨床研究推進室

室長：森下典子（併任）

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理、支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中に「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が、治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

②レギュラトリーサイエンス研究室

室長：松村泰志（併任）

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づく的確な予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成23年4月に設立された。

先進医療研究開発部

部長：金村米博（併任）

スタッフ：高田愛（診療情報管理士）、渡部耕治（流動研究員、Bi-AMPS 研究コーディネーター）、松田由香子

令和 6 年度の活動実績：

AMED『優れた医療機器の創出に係る産業振興拠点強化事業』の事業活動として、Bi-AMPS 拠点を基礎として、「全医療職/全医療部門が参画する先進的医療製品・システム開発を担う人材育成リスクリング拠点(Bi-AMPS^{BASE})」を設置して、以下を実施した。

拠点事業実施体制構築として、拠点長の下、医師及びコメディカル部門代表の 2 名の副拠点長を配置し、医師に加えて、看護部、薬剤部、臨床検査科、放射線科、リハビリテーション科、臨床工学室からコメディカル 6 部門代表者から構成される Bi-AMPS^{BASE} ワーキンググループ組織構築の完了、医療現場の実情に精通した 6 名の専門職で構成される Digital works Bi-AMPS 体制強化の完了、3 名の専門職を配置した製品開発支援部組織構築の完了を行った。拠点事業として、①人材育成研修事業：Bi-AMPS レクチャー・プログラム（10 回：オンライン講義）、Bi-AMPS メディカル・カンファレンス（座学講習と医療現場見学会をハイブリットさせた教育事業、1 コース 3 回開催、2024 年度テーマ：手術、滅菌材料、人工透析）、②ユーザビリティ評価事業：個別製品技術評価会（対面形式のグループミーティング：9 回開催、9 製品技術の評価）、③医療現場発ニーズ/シーズマッチング事業：医療現場発ニーズ/シーズマッチング交流フォーラム（2 回開催、第 78 回国立病院総合医学会および医工連携マッチング例会）で 11 件のニーズ/シーズ提案、を開催・実施した。広報活動として、Bi-AMPS ホームページの充実、拠点事業参加者の相談窓口開設の完了、外部フォーラム/展示会での拠点活動紹介（2 回：第 78 回国立病院総合医学会、メディカルクリエーションふくしま 2024）を実施した。拠点外機関との連携体制構築として、大阪商工会議所並びに国立病院機構所属病院（11 施設）、医療機器開発連携推進ネットワーク「和（やわらぎ）」（北海道大学、東京女子医大、京都大学、神戸大学、岡山大学、広島大学、鳥取大学、大分大学）との連携関係を構築強化し、AMED 地域連携拠点自立化推進事業拠点（ふくしま医療機器開発支援センター、九州オープンイノベーションセンター）との協力関係を構築した。

今後の活動方針：

国立病院機構ネットワークを活用して、医療機器、ヘルスケア製品等の開発を支援するための Bi-AMPS 拠点を活動を更に充実させていきたいと考える。

①幹細胞医療研究室

スタッフ：正札智子（室長）、福角勇人（室員）、山本篤世（流動研究員）

令和 6 年度の活動実績：

1．ヒト iPS 細胞由来神経系細胞を用いた再生医療、及び神経毒性評価系の構築を目的とした、細胞分化誘導法と品質評価法技術の改良

ヒト iPS 細胞を用いて、再生医療応用や神経毒性評価系の構築を目指し、使用目的に応じた、安全性と有効性が担保された神経系細胞への分化誘導技術と、分子生物学的な手法を用いた細胞品質評価法の探索を実施した。

2．神経疾患細胞の変異解析と特性解析

神経疾患患者由来の細胞試料を用い、疾患を起因する原因遺伝子の変異解析と、細胞形質の特性を、分子生物学と細胞生物学的解析を進めている。更に、患者由来 iPS 細胞を用いた解析のため、神経科学的解析が可能な十分に成熟した神経細胞の誘導技術の開発を行った。

3．脳腫瘍の分子診断精度の向上に寄与する解析技術の開発と、ヒト iPS 細胞を用いた再生医療の安全性に関わるマーカーの探索

分子医療研究室で実施している脳腫瘍組織の分子診断の向上を目指し、予後との関連が示唆されている遺伝子の解析を行った。また医療応用を目指す iPS 細胞由来神経細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索を実施した。

今後の活動方針：

AMED 再生医療等実用化研究事業「慢性期脳梗塞に対する iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療開発」において、細胞品質評価業務を遂行する。また、再生医療事業で培われた細胞特性解析の知見を、創薬や神経疾患、及び脳腫瘍の各分野に活用して解析を進める。

②再生医療研究室

スタッフ：金村米博（室長）、隅田美穂（室員）、半田有佳子（流動研究員）、勝間亜沙子（流動研究員）、

令和 6 年度の活動実績：

1. iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療開発

AMED 再生医療等実用化研究事業「慢性期脳梗塞に対する iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療開発」において、HLA3 座ホモ iPS 細胞（京都大学 iPS 細胞研究財団から分与）から作製した iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた慢性期脳梗塞に対する再生医療の臨床研究を開始するための準備を行う研究を実施した。また、AMED 再生・細胞医療・遺伝子治療実現加速化プログラム「遺伝子導入神経幹細胞を用いた脊髄機能再生に関する基礎研究」において、最適な移植細胞を作製するための遺伝子組換えヒト iPS 細胞作製技術開発を実施し、脊髄損傷治療用新規 iPS 細胞由来神経前駆細胞の製造法開発を実施した。

2. 新規共培養系を用いたヒト神経細胞シナプス成熟法の開発

ヒトグリア系細胞との共培養により、iPS 細胞由来神経前駆細胞から成熟シナプスを有するヒト神経細胞を分化誘導させるロバストな新規共培養系を用いたヒト神経細胞シナプス成熟法開発を更に進め、より安定的な培養系開発を実施した。

今後の活動方針：

iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた脳梗塞の再生医療開発に関しては、その臨床応用実現に向けてさらに研究を加速させていくと同時に、脊髄損傷治療用の新規 iPS 細胞由来神経前駆細胞の早期実用化を目指し、遺伝子組換えヒト iPS 細胞作製技術開発を進めていく予定である。また、開発済の新規共培養系に関しては、医薬品等の安全性評価試験への応用を目指し、更なる技術改良を実施していく計画である。

③分子医療研究室

スタッフ：金村米博（室長）、兼松大介（室員）、松山裕美（室員、遺伝カウンセラー）、吉岡絵麻（臨床検査技師）、鈴木美里（臨床検査技師）

令和 6 年度の活動実績：

悪性脳腫瘍の分子遺伝学的解析として、前年度に継続して、悪性グリオーマを対象として、関西地域を中心とした 80 以上の医療機関で構成される「関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク」を主宰し、脳腫瘍検体レジストリーを行い、WHO 脳腫瘍分類に基づく中央遺伝子診断の実施と、大規模症例を用いた悪性グリオーマの分子遺伝学的特性解析を実施した。また、小児悪性脳腫瘍の中で最も頻度の高い腫瘍の一つである髄芽腫に関して、「日本小児がん研究グループ（JCCG）」が実施する「小児固形腫瘍観察研究」と特定臨床研究「小児髄芽腫に対し新規リスク分類を導入したチオテパ／メルファラン大量化学療法併用放射線減量治療の有効性と安全性を検討する第 II 相試験」（jRCTs051200021）において、全国レベルで収集された髄芽腫標本の中央分子診断を実施した。

今後の活動方針：

悪性脳腫瘍の分子診断実施体制に関しては、今後も引き続き関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク並びに JCCG での活動を継続して実施していく予定である。また、関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークでの脳腫瘍検体レジストリーに関しては、その実施体制を更に充実させていきたいと考える。

エイズ先端医療研究開発部

部長：渡邊 大（専任）

①エイズ先端医療研究開発室

スタッフ名：渡邊 大、安尾利彦

令和 6 年度の活動実績：

臨床研究では厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業（令和 6 年度は「HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究」（研究代表者 渡邊 大））などを実施し、主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療、メンタルヘルスなどに関する研究に取り組んだ。教育・研修では院外ならびに院内を対象とし、看護部・医療相談室・臨床心理室等と共に職員研修部と協働で実施し、多くの参加者を得ました。これらの研究成果は学会あるいは論文として発表した。

今後の活動方針：

今後も、HIV/AIDS 先端医療開発センターの研究部門として HIV 感染症/AIDS に関する臨床研究、教育・研修、情報発信を進め、治癒を目指した治療に関する研究や抗 HIV 療法の最適化に関する研究を推進して行きたい。

②HIV 感染制御研究室

スタッフ：矢倉裕輝（室長）

令和 6 年度の活動実績：

HIV インテグラーゼ阻害剤であるビクテグラビルの血漿トラフ濃度と薬物代謝酵素の遺伝子多型との関連について検討、解析を行なった。また、HIV 感染症治療薬の投与による自覚症状の発現と関連する薬物トランスポーターの探索を行い、その遺伝子多型の影響について検討、解析を行なった。

今後の活動方針：

長期にわたる薬物治療の成功を見据えた、日本人 HIV 感染者に対する治療レジメンの個別化の実現をメインテーマとして、薬物治療が有効かつ安全に実施できるよう、Pharmacokinetics(PK)、Pharmacodynamics(PD)、Pharmacogenomics (PGx) および製剤学観点からアプローチしていく。

EBM 研究開発部

部長：平尾素宏（併任）

① 臨床疫学研究室

スタッフ：阪森亮太郎（室長）、榊原祐子、山本俊祐、長谷川裕子、南誠剛、安藤性實、岡田陽子、武山雅博、藤井順也、辻本豊

令和 6 年度の活動実績：

活動実績の主体は多施設共同研究である。消化管領域においては、早期消化管癌に対する内視鏡治療の工夫や AI を用いた大腸腫瘍の検出能、大腸憩室出血に対する造影 CT 検査の有用性について報告している。また炎症性腸疾患に対する薬剤選択における LRG の有用性や、難治性の潰瘍性大腸炎に対する使用薬剤の比較についての報告も行っている。

進行癌に対する薬物療法では、遺伝子変異を踏まえた大腸癌に対する薬物療法の効果についての成果を報告している。膵癌についても ctDNA プロファイルの有用性について報告している。

進行肝細胞癌については、レンバチニブ治療における支持療法としての HMB・L-アルギニン・L-グルタミン配合飲料とロコモーショントレーニングの有用性についての非盲検ランダム化比較試験に参加し、論文報告している。またアテゾリズマブ・ベバシズマブ併用療法の有効性に寄与する因子についても報告している。さらに本邦における進行肝細胞癌に対する全身薬物療法の一次治療の現状についても報告している。B 型肝炎では発癌に関与するバイオマーカーについて、C 型肝炎では肝硬変患者のウイルス排除後における食道胃静脈瘤関連イベントの発生率や発生に関与する因子について報告している。

また疾患啓発のためのショート動画コンテンツを作成し公開している。

今後の活動方針：

消化器疾患、呼吸器疾患、小児疾患、血液疾患を始め、幅広い領域の疾患について検証している。特に治療困難な難治性疾患は興味ある領域である。また、新しい疾患概念、たとえば MASH（metabolic dysfunction-associated steatohepatitis）などは国立病院機構ネットワーク研究など多施設でのデータ収集と解析を行っている。

② がん療法研究開発室

スタッフ：平尾素宏（室長）、高見康二、加藤健志、巽啓司、吉龍澄子、小澤健太郎、西村健作、田中英一、眞能正幸、廣瀬由美子、森清、飛梅孝子、鹿野学、松本久宣、竹野淳、柴山浩彦、八十島宏行、酒井健司、濱直樹、相木佐代、伴建二、数藤孝雄、吉本仁

令和 6 年度の活動実績：

がんが日本人の死因のトップとなって久しい。国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、2021 年の年間がん罹患数は 98 万人を超え、2023 年のがんによる死亡者数は約 38 万 2 千人と報告されている。この 10 年でがん免疫治療法が臨床の場において使用され、その評価が明らかになってきたが、すべてのがんに効果があるわけではなく、がんに対する有効な治療法の開発の重要性は依然変わっていない。

免疫治療を含め従来の多くのがん治療法の有効性は、症例ごと、施設ごとの経験から得られたものであり、複数施設における大規模な臨床試験による治療効果の検証が必須となっている。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められている。さらに、発がん、増殖、転移といったがん自体やそれに伴う病態に関わる遺伝子や蛋白、糖鎖といった数多くの分子の異常が報告され、これらの分子の特徴や機能が新しいがんの診断法や治療に応用され、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。実際、2019 年よりがん遺伝子パネル検査が保険診療可能となった。

本研究室では、最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しいがん治療法の開発を目的として、基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究を行っている。

今後の活動方針：

今後も引き続き、多施設共同臨床研究や自主的臨床試験研究に参画し、がん診療の開発を目指していきたい。

③ 高度医療技術開発室

スタッフ：上田恭敬（室長）、安部晴彦、井上耕一、池岡邦泰、吉龍正雄、西宏之、齊藤哲也、渋谷博美、天野栄三、島川宜子、東将浩、井上敦夫、大鳥安正、松田理、辻野知栄子、田宮裕子、西村洋、加藤研、三木秀宣、青野博之、岩谷博次、藤中俊之、浅井克則、宮本智、上田真理

令和 6 年度の活動実績：

令和 6 年度は、昨年度に引き続き運動負荷心エコー検査に関する研究報告（2024 年日本心エコー図学会）で行い、多施設共同研究へのレジストリを進めた。また腫瘍循環器関連に関する報告（JC Cases 2024;31:57-60）を行いつつ、後半は、人工知能（AI）による心エコー画像自動解析システムによる検査業務の効率化、改善化に関する研究を開始した。

今後の活動方針：

情報処理や画像処理技術、AI 応用などの新技術を取り入れ、医療現場で技術的解決が求められるニーズを抽出し、こうしたニーズに対し技術的に解決させるためのアイデアをまとめる。具体的には、心エコー検査画像の AI 解析によるレポート自動作成支援である。心エコー検査室での現場で、実際に AI 解析・レポート作成を行い、検査技師の業務負担がどの程度軽減し、その結果として、検査件数がどの程度増えるのかについて検証を行う。

④ 医療情報研究室

スタッフ：松村泰志（室長）、間島行則、岡崎周平

令和 6 年度の活動実績：

これまで大阪大学との共同プロジェクトとして実施してきた、電子カルテテンプレート（eXChart）で入力したデータを ODM に変換して阪大のデータセンターに送信する仕組み、入力データと連携して画像を匿名化して送信する仕組みを継続的に運用し、脳神経内科で実施している臨床研究の支援を行った。

大阪大学との共同研究である多施設共通データウェアハウスの導入を進めた。これにより、各施設のデータを外部のプラットフォーム上に移すことなく、多施設データを共通するプログラムで収集することが可能となり、安全に効率的に多施設データの集計ができる。

令和 5 年度から継続してイーライリリーとの共同研究で、間質性肺疾患の発生をレセプトデータから推定するアルゴリズムの精度評価を行い、その結果を論文にまとめた。

令和 6 年度からニプロと共同研究を行い、輸液ポンプ、シリンジポンプに注射薬の組成を伝え、実施データを受けとり、アラームをスマートフォンで受け取るためのプラットフォームの必要条件について検討を行った。将来構想として、看護師がキャッチすべきアラームをスマートフォンに集約し、スマートフォンでバイタル測定機器データを取り込み、看護記録を入力できるようにするためのプラットフォームの開発を目指している。本研究開発に関わるニプロ以外の企業とも連携を取り、研究開発を進めるための体制整備を行った。

今後の活動方針：

システムによる業務効率化を推進するために、電子カルテシステムへのスマートフォンの活用の推進をテーマとしている。アラームをスマートフォンに集約すること、看護師がベッドサイドで記録が完結できることを目指したプラットフォーム開発を目指す。

問診、同意取得を患者持参のスマートフォン、病院貸与のタブレットを活用して、電子データとして入力を促し、このデータを活用することで記録の効率化を目指す。

AI を病院業務で活用するために、機密性を保ちつつ AI を活用するための情報基盤を構築し、その応用として患者説明の音声認識および文書整備を行い、説明内容の診療録への記録作成の効率化を目指す。それ以外の場面でのカルテ記載への音声認識の有効性や他の領域の AI 応用の可能性を追求する。

電子カルテデータの研究利用について、これまでの処方、注射、検体検査結果、病名、手術・処置等のデータに、画像レポートを加える。画像レポートはフリーテキストで記載されているが、これを、深層学習を含めた自然言語処理技術（大阪大学で開発）を利用して構造化データに変換し、検索処理を可能とする研究を進める。

大阪大学と共同して進めてきた電子カルテテンプレートを利用した前向き臨床研究のデータを収集するシステムを発展させ、臨床研究への活用を推進する。PACS と連動させて、画像データの研究利用を自動化する事業も推進する。

Personal Health Record を実現化させるための準備を行う。疾患毎に事前に定めたデータ項目の入力を促して FHIR 規格の構造化データに変換してプラットフォームに送信する機能を病院に組み入れ、病院から医療者の負担なく PHR 側にデータが送りだせる仕組みについて研究する。

⑤ 災害医療研究室

スタッフ：大西光雄（室長）、石田健一郎

令和 6 年度の活動実績：

主として下記 8 カテゴリーそれぞれの活動実績を報告する。

1. 院内災害対応研究

COVID-19 に対する対応が求められた際に病院機能を維持する観点からの対応を行なった。この感染症への対応における人的・物的・空間的な不足（需要と供給のアンバランス）がもたらす事態という意味においては“災害”と捉えることができる。しかし、一般的な自然災害とは違い、いつから災害と認識できるのか？、ライフラインは全く影響を受けていない、といった災害をイメージしにくい状況があることから、当院では事業継続計画（BCP）を軸にした対応をおこなっている。今後は、毎年、小改訂を可能とする取り組みを行なっていく予定である。

2. 医療圏における災害対応研究

医療・福祉・行政の連携を重視した平時から災害時を見据えた災害対応の研究を行なった。本研究は高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研 19K10532）として開始してきた。高齢者施設のみならず、在宅医療などさまざまな福祉に関して、行政と相談しながら大阪市中心部の特性を理解した災害対応のあり方を検討した。対象者は災害時に“災害時要配慮者”に分類されるが、災害時に医療機関に大きな負荷が発生しにくいように、各福祉施設における BCP の策定、自助や共助のあり方、医療機関との連携方法に関して検討を行なった。

3. 災害医療教育に関する研究

全日本病院医療支援班（AMAT：All Japan Hospital Medical Assistance Team）における災害医療講習の開発に関わってきた。特に、AMAT の講習会における講義のうち“災害時要配慮者”、“災害時に留意すべき疾病”、“感染制御”の項目の講義資料の作成を行っている。本年度も講義資料のマイナー改訂を行ない、講習会において指導を行なった。

4. マスギャザリング医療対応研究

大阪・関西万博における医療救護対応に関する研究を行なった。日本万国博覧会医療救護協議会の構成員として、2025 大阪・関西万博の医療救護のあり方に関して検討を行った。また、厚生労働行政推進事業の健康安全・危機管理対策総合研究事業における“大規模イベントに対する戦略的リスクアセスメント及びヘルスシステムの強化に向けた標準的枠組に関する研究（24LA2002）”での分担研究である“大阪・関西万博対策、医療救護・化学災害対策の検討”を行なった。人為的な多数傷病者事案の類型化を行い、大阪・関西万博の危機管理対策室に勤務する予定の統括医療責任者らに対する講義を行なった。

5. 事態対処医療に関する研究

法執行機関との医療連携に関して長年検討してきた。その一つに、臨床救急医学会の“法執行機関との医療連携のありかたに関する検討委員会”による事態対処救護ガイドブックの発行（2019 年）と、事態対処救護の講習会の開発

と開催であった。2024 年度は海上保安庁職員及び警察職員に対して合計 4 回のコース開催を行なった。また、大阪府警と連携した“立てこもり事案”での負傷者対応に関して、大阪府の DMAT が出動できるシステムを構築した。同システムは 2025 年 1 月 20 日より運用開始となった。

さらに、プレホスピタルでの止血帯を用いた止血処置は 2019 年より消防職員が、その後、警察や海上保安庁職員も可能となったが、効果的に訓練するための機器開発を開始した。これは“我が国初の本格的「救急止血法の訓練モデル」の開発”として成長型中小企業等研究開発支援事業（Go-Tech 事業）に採択された。

6. 病院前救護活動教育に関する研究

プレホスピタルとの連携を重視したイベント・教育資料開発を行なった。大阪市消防の有志とともに 20 年前より勉強会を合計 100 回程度開いてきたが、その一環として“ベーシックラリー”を 2024 年 6 月 22 日に開催した。さまざまなシナリオをもとに多職種からなる当院職員と、大阪市消防や警察、海上保安庁、自衛隊等の連携を図った。今後は当院が後援する形で、さらに救急隊などと連携していく。また、プレホスピタル分野における教育資料開発としては、事故災害現場でのさまざまな状況変化に応じた多職種の活動を学ぶためのボードゲームの開発を開始した。

7. 特殊災害対応研究

化学テロや爆傷などへの対応に関する国際的な動向の把握を行なった。これは厚生労働科学研究の健康安全・危機管理対策総合研究事業における“CBRNE テロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究（22LA1012）”での分担研究である“化学テロ危機管理に関する研究”である。本年度が最終年度であるが、これまでに、令和 4 年度は化学テロの覚知に関して、令和 5 年度は世界健康安全保障行動グループ（GHSAG : Global Health Security Action Group）の下部組織である化学イベントワーキンググループ（CEWG : Chemical Event Working Group）における各国の活動および連携（特にウクライナ対応での連携、緊急招集会合）、ローンオフエンダーによる化学テロの可能性の検討、令和 6 年度は過去の本邦および各国の化学物質が関連した事故や災害事例への対応及び、その際の公衆衛生や中毒情報センターの連携のあり方に関する検討を行なった。他に特殊災害の一つである爆発による生体への影響の研究は、“衝撃波（第一次爆傷）による長期脳損傷のメカニズムの解明と治療法の開発（21K09019）”として大阪大学で研究を行っている。

本分野では、救急科領域講習として第 38 回日本外傷学会においてオンデマンドで“爆傷事案から考える爆傷の実際と衝撃波外傷の性質”を講演、また外傷学会評議員セミナーとして 2024 年 4 月 25 日に“出血や外傷（衝撃波外傷を含む）に伴う循環動態の変化と中枢神経の役割”として講演、救急科領域講習として第 46 回日本中毒学会において 2024 年 7 月 24 日に“災害と中毒ー化学災害を中心にー”として講演した。また、東京大学大学院公共健康医学において 2024 年 5 月 13 日に“化学物質の対応・危機管理”の講義を関連省庁職員等に対するセミナーである NBC ネットワーク専門家会合において 2024 年 8 月 1 日に“化学テロに関する海外の解毒薬等の情報”を講義した。

8. Health Security に関する研究

第 48 回日本中毒学会総会を担当することとなり、Health Security をテーマに学会の準備を始めた。Health Security という用語自体は、健康危機管理を考える際にしばしば使われる用語であるが、定義ははっきりしていない。概ね、“原因が自然発生的であろうと人為的であろうと、健康に対するあらゆる脅威に対応するための予防・準備、覚知・分析、対応・復旧、事後検証などの一連の取り組み”、といった概念になる。この概念をテーマに取り上げ、中毒事案において Health Security という視点から考えてみることにした。

今後の活動方針：

1. 院内災害対応研究
 - 関連する各部門ごとに定期的に BCP の見直しを行い、災害対策委員会等で全体の整合性、追加可能な視点を検討していく。
2. 医療圏における災害対応研究
 - 福祉や行政がどのような課題を有しているのかの調査を進めていく。また、各事業所で行われる災害関連会議に臨席し、情報交換に努め、当院で開催する災害訓練に参加していただき、相互に理解を深め、平時からの連携を通して災害時に柔軟な対応ができるように検討を進めていく。
3. 災害医療教育に関する研究
 - 次年度は AMAT の災害講習を e-learning の形にしていく予定である。
4. マスギャザリング医療対応研究
 - 世界的にもマスギャザリングにおいて人為的な多数傷病者事案が発生しやすくなっており、今回の類型化を通じて効果的な医療対応の検討をさらに進める。また、化学物質が関連する際に特に発生しやすいと考えられる心理学的インパクトへの対応の検討を開始する。効果的なリスクコミュニケーションを意識した情報共有が求められるものと考えている。
5. 事態対処医療に関する研究
 - 2019 年に発刊された事態対処医療ガイドブックの改訂に着手する。現在のガイドブックに掲載されている内容と、実際に事態対処救護コースを開始してから得られた受講者からの意見や疑問をもとに改訂を考えていきたい。
 - 大阪府で 2024 年 1 月 20 日より日本で初め導入された DMAT と大阪府警の連携に関して、さらなる訓練を進める。当院が中心となって手順書作成を行っており、手順を完成させるとともに、より発展的な連携を構築する。
 - 医療者に対する、鋭的損傷への対応の講習を計画する。講義内容の策定に取り掛かる。
 - 「救急止血法の訓練モデル」の R&D としての完成と、2026 年度に上市するための事業化に関する課題を検討する。
6. 病院前救護活動教育に関する研究
 - ・ 救急隊と当院との連携をさらに高め、当院の研修医及び救急に関連する

職種が病院前救護の理解を深めるためにベーシックラリーの開催に関して当院が後援できるように調整する。

- ・ 事故災害現場での判断と連携を学習、あるいは教育するためのツールとして開発開始したボードゲームの 2026 年初頭の市販化を検討する。

7. 特殊災害対応研究

- ・ 厚生労働科学研究におけるこの分野は、今後も研究が継続されることが決まっており、化学物質による意図的な事案および爆発による生体への影響の研究を行っていく。マスギャザリングの項でも触れたが、特殊災害においては心理学的インパクトが大きい。場合によっては自らは影響を受けていないはずなのにも関わらず経験したと感じる集団ヒステリー（集団パニック）への対応が求められるため、それらへの対応を含めた研究を開始する予定である。
- ・ SNS などの分析を通じて化学災害（化学テロ）などを覚知する方法がないか、検討を行なっていく。

8. Health Security に関する研究

- ・ グローバルなハザード対策において使われることが多い概念であり、必ず多機関・多職種で対応する必要性がある。第 48 回日本中毒学会総会の準備を通して、中毒を考慮するような医療安全といったミクロな点から、公衆衛生との連携を念頭に置いた Public Health Security といった視点、化学物質が関連する災害・事故、薬物濫用や Medical Child Abuse など、中毒が関係するさまざまな事案に対して検討する予定である。

臨床研究推進部

部長：金村米博（併任）

① 臨床研究推進室

スタッフ名：森下典子（室長）、原田真里子、羽田かおる、小林恭子、松尾友香、辻本有希恵、柚本育世、三井知子、千賀明日香、福本妃可里、福岡利恵、名畑優保、池田佐知子、濱充代、阿久津さえ子、堀田千恵子、上崎頼子、大場美咲、千葉真弓、松田里美、信谷宗平、

令和 6 年度の活動実績：

臨床研究推進室は、CRC および治験事務局・受託研究審査委員会（IRB）事務局を配置し、治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している。

当院の IRB は独立した 2 つの IRB（第一委員会・第二委員会）から構成されており、第一委員会は主に治験等受託研究を、第二委員会は「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が適応となる自主研究を審査している。

審査件数では、第一委員会は月 1 回（計 12 回）開催し、新規課題 42 件、継続課題 91 件、迅速審査 27 件を含む 1573 件の審査を行った。第二委員会では本審査を 12 回、迅速審査を 24 回開催し、新規課題 10 件、継続課題 213 件、迅速審査 100 件を含む 484 件の審査を行った。

令和 6 年度の治験実績（受託研究費請求額）は、新規受託件数 23 件、総件数 107 件であり、研究請求金額総額は 2 億 5 千万円を越え、国立病院機構施設では全国 4 位の成績であった。

新規の治験受託件数を増やすため、治験依頼者や SMO（Site Management organization）と平素より積極的にコミュニケーションをとり、獲得に向けて努力している。

また第一委員会・第二委員会ともに治験、臨床研究に関連した文書の電磁化に取り組んでおり、第一委員会では令和 4 年度から、第二委員会では令和 5 年度から導入し、業務効率化を図るなど、絶え間なく質の高い倫理審査を行うための体制整備に取り組んでいる。

自主研究の支援については、基本的に先進医療 B または国立病院機構 EBM 研究の治療介入のある研究を支援している他、引き続き新型コロナワクチンコホート調査への支援や、令和 5 年度より一部の特定臨床研究においても支援を開始した。また、臨床研究法や倫理指針に基づいた質の高い臨床研究の実施を進めるために、研究機関の長が行う点検（自己点検）を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。

その他、地域治験ネットワークの活動では大阪府内の 16 医療機関で形成する「治験ネットおおさか」に参加し、他医療機関との意見交換を行った。

学術的活動および教育・啓発については、学会等でも積極的に発表を行い、国立病院機構本部主催初級者臨床研究コーディネーター養成研修や実務者臨床研究コーディネーター研修、近畿グループ主催臨床研究・治験研修、中国四国グループ主催治験・臨床研究研修会、がん CRC 学会で講師を務めたほか、「臨床研究推

進室ニュース」（毎月）の発行、「治験セミナー」、「臨床研究セミナー」を開催し職員等への啓発も実施した。

今後の活動方針：

- 1．受託研究費 2 億 1000 万円の維持
 - ・新規治験を獲得するためにホームページで実績をアピールする
 - ・エントリーアクションプランの効果的な活用方法を検討する
 - ・エントリーアクションプランの期間目標の達成を目指す
- 2．品質を維持した治験実施体制の強化
 - ・治験依頼者から選ばれる施設を目指す
 - ・治験業務の ICT の円滑な運用にむけた体制を整備する
- 3．治験エコシステム導入推進事業内容について情報収集し対応する

＜臨床試験支援部門＞

- 1．臨床研究の円滑な実施にむけた体制整備
 - ・ホームページの改訂
 - ・プライバシーポリシーの見直し
 - ・臨床研究セミナーの開催方法・内容の見直し
 - ・同意書電子保管の体制整備
- 2．臨床研究支援体制（ARO 機能）の強化
 - ・支援範囲と方向性の検討、体制の構築
 - ・インフォームドコンセントの実施体制の見直し
 - ・多機関共同研究用の研究計画書ひな形の改訂

②レギュラトリーサイエンス研究室

スタッフ：松村泰志（室長）

令和 6 年度の活動実績：

治験等の研究の進め方についてはある程度確立されてきている。一方、電子カルテデータを代表とする Real World Data を活用する研究については、世界的にみても、現在進行中であり、各国が競い合っている。Real World Data は、臨床の活動の中で自然に蓄積されるデータを活用する方向性と、治験と同様、予め決められたデータ項目のデータを前向きに埋めていき、効率的にデータ収集する方向性がある。当院では、そのどちらにも取り組んでいる。

前者については、大阪大学との共同研究で、多施設共通データウェアハウスを構築し、ここから共通するデータ抽出プログラムを利用して効率良くデータを収集する仕組みを導入している。また、NTT との共同研究で、秘密分散、秘密計算を使った方法にも取り組んできた。データを外部のプラットフォームに集積させると、個人情報保護法の観点で取り扱いが難しくなるが、共通データウェアハウスでデータベース自身を集約させない方式の場合は、この問題がクリアできる。また、秘密分散、秘密計算で集計する方式の場合、個人の識別性は完全に失われるので、問題解決の有力な方法の一つとなる。

ヨーロッパでも EHDS として電子カルテデータの新たな活用の仕組みができたが、日本でも公的データベースの利用のレギュレーションについて、安全性を保ちつつデータ利用を促進するために、新たなレギュレーションを作成する必要がある。こうした議論に参加して、次世代の基盤構築に貢献した。

電子カルテで予め決められた項目をテンプレートとして作成し、これに入力することで、診療録の作成と症例報告書の作成を同時に行う仕組みについて、大阪大学と共同して開発し、富士通電子カルテ病院を代表して実施している。画像データを匿名化し、被検者番号を付けてデータセンターに自動で送り出す仕組みも稼働させている。この仕組みを利用し、脳神経内科の臨床研究を支援した。

今後の活動方針：

引き続き、Real World Data を活用した臨床研究のレギュレーションのあり方について研究を行う。Real World Data を扱う場合、個人の識別性への対応が重要であり、プライバシー保護の観点で検討を行う必要がある。個人情報保護法の規定、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に従うことは当然として、セキュリティへの配慮等、考慮すべきポイントがある。これらを適切にコントロールしながら Real World Data を活用する方法について、引き続き検討を進める。

幹細胞医療研究室

室長 正札智子

幹細胞医療研究室では、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）より神経幹細胞（自己複製と、神経系細胞を供給する能力を持つ細胞）や、神経細胞への分化誘導技術の開発をメインテーマとして研究を行っています。その成果は、脳梗塞患者への移植治療や、ハイスループットの神経毒性評価試験の構築に役立てています。更にヒト iPS 細胞を用いて、神経疾患の発症メカニズムの研究を実施しています。また近年脳腫瘍の分類と治療法の判断に必須となる遺伝子異常の解析（分子診断）に応用可能な新規腫瘍マーカーの探索を、当センター脳神経外科及び分子医療研究室と共同で実施しています。

研究テーマ

1：ヒト iPS 細胞由来神経系細胞の作製と培養法の検討

ヒト iPS 細胞を用いた再生医療応用や神経毒性評価系の構築を目指し、使用目的に応じた神経系細胞への分化誘導技術の開発と、分子生物学的な手法を用いて細胞の評価を実施しています。

2：神経疾患に関連する遺伝子異常の解析

神経疾患に関連する遺伝子の作用機序を、iPS 細胞技術を用いて神経発達から成熟神経細胞の各段階の細胞形質を、分子生物学と細胞生物学的に解析を進めています。

3：新規腫瘍マーカーと iPS 由来細胞の腫瘍化リスクマーカーの探索

脳神経外科と分子医療研究室では、神経膠腫及び髄芽腫患者の摘出腫瘍組織の分子診断を、既知マーカーを用いて実施しています。幹細胞医療研究室では、発症原因や予後予測と関連する新規マーカーの探索を担当しています。更に医療応用を目指す iPS 由来神経系細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索も実施しています。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0（英文著述）

Kanemura Y, Yamamoto A, Katsuma A, Fukusumi H, Shofuda T, Kanematsu D, Handa Y, Sumida M, Yoshioka E, Mine Y, Yamaguchi R, Okada M, Igarashi M, Sekino Y, Shirao T, Nakamura M, Okano H: Human-Induced Pluripotent Stem Cell-Derived Neural Progenitor Cells Showed Neuronal Differentiation, Neurite Extension, and Formation of Synaptic Structures in Rodent Ischemic Stroke Brains. 「Cells」13(8)：671、2024 年 4 月

④研究助成実績

科学研究費助成事業：基盤研究(C)

「微小流路を連結した灌流培養系による α -シヌクレイン線維化条件の探索」

研究概要：パーキンソン病は中脳黒質のドーパミン神経細胞が選択的に変性・脱落する晩発性の神経変性疾患である。患者の脳には、 α -シヌクレインがリン酸化された凝集体（レビー小体）が現れるが、発症原因は依然として不明である。申請者は、パーキンソン病患者の iPS 細胞から誘導したドーパミン神経細胞であっても、 α -シヌクレインの凝集体はみられるものの、患者にみられるレビー小体とは別であることを確認している。レビー小体の生成には、線維化した α -シヌクレイン が必要であると考えられているが、 α -シヌクレインが細胞内で線維化するメカニズムは未解明であり、パーキンソン病の病態解明研究は進んでいない。本研究では、ドーパミン神経細胞を継続的にストレス状態に晒すために、微小流路を連結した灌流培養法を構築することで、 α -シヌクレインの線維化メカニズムを明らかにすることを目的とする。

老化細胞は、サイトカインやケモカインといった炎症や発がんを促す因子を分泌することが知られている。灌流培養系において、このような細胞老化随伴分泌現象を利用するために、今年度は微小流路内で老化細胞となり得るヒト胎児由来線維芽細胞の培養を実施した。ドーパミン神経細胞用の無血清培地を用いて、ヒト胎児由来線維芽細胞を微小流路内で3週間培養し、老化マーカーの1つである老化関連 β -ガラクトシダーゼ（SA- β -gal）の検出を行った結果、多くの細胞が SA- β -gal 陽性であることが確認された。したがって、ヒト胎児由来線維芽細胞は微小流路内で安定して培養可能であり、無血清培地を用いることで細胞老化を誘導可能であることが示唆された。

再生医療研究室

室長 金村米博

【概要】

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっています。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤安全性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 治療用ヒト細胞培養プロセスの開発

臨床研究センター棟 2 階に設置されている、治療に使用する各種ヒト細胞を培養・加工するヒト細胞培養専用施設（セルプロセッシングセンター）の管理・運用を担当し、セルプロセッシングセンター内でのヒト細胞の培養・加工プロセスの開発を行っています。また、細菌・真菌検査や遺伝子検査などを組み込んだ治療用ヒト細胞の品質検査法の開発などを行っています。

2. 医療用ヒト幹細胞の品質管理技術の開発

再生医療に使用する細胞として、組織幹細胞であるヒト神経幹細胞および間葉系幹細胞さらにヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞などを主な研究対象として、細胞増殖能、染色体構造、細胞表面マーカー発現様式、細胞分化能等を詳細に解析してこれら細胞の生物学的特性を明らかにし、医療応用するための細胞の品質管理に必要な項目の策定とその検査方法の開発を行っています。

3. iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた脳梗塞再生医療の開発

亜急性期脊髄損傷の再生医療の臨床研究で使用している HLA3 座ホモ iPS 細胞（京都大学 iPS 細胞研究財団から分与）から作製した iPS 細胞由来神経前駆細胞と同一規格の細胞を用いて、脳梗塞の再生医療を実現するためのトランスレーショナルリサーチを実施しています（AMED 再生医療実用化研究事業）。

4. ヒト幹細胞を応用した薬剤安全性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索

ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞、ヒト iPS 細胞由来神経細胞を主に使用して、各種薬剤の薬効および毒性評価を実施するためのハイスループットスクリーニングシステムの開発を行っています。また、ヒト神経前駆細胞やグリオーマ幹細胞を標的とする新規治療薬候補化合物の探索を実施しています。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Fujimi Y, Ozaki T, Izutsu N, Nakajima S, Kanemura Y, Kidani T, Kawamoto S, Nishizawa N, Kobayashi K, Fujinaka T: Fungal symptomatic intracranial aneurysm treated with a flow diverting stent : A case report. 「Surg Neurol Int」 15 : 58、2024 年 2 月

Kanemura Y, Yamamoto A, Katsuma A, Fukusumi H, Shofuda T, Kanematsu D, Handa Y, Sumida M, Yoshioka E, Mine Y, Yamaguchi R, Okada M, Igarashi M, Sekino Y, Shirao T, Nakamura M, Okano H: Human-Induced Pluripotent Stem Cell-Derived Neural Progenitor Cells Showed Neuronal Differentiation, Neurite Extension, and Formation of Synaptic Structures in Rodent Ischemic Stroke Brains. 「Cells」 13(8) : 671、2024 年 4 月

Izutsu N, Nishizawa N, Nakajima S, Kanemura Y, Ozaki T, Asai K, Kidani T, Kobayashi K, Fujimi Y, Fujinaka T: Extracranial internal carotid artery-dissecting aneurysm having a re-entry tear and causing lower cranial nerve palsies treated with flow-diverting stent : A case report. 「Surg Neurol Int」 15 : 126、2024 年 4 月

Nomoto M, Kidani T, Kida M, Kobayashi K, Fujimi Y, Kawamoto S, Izutsu N, Asai K, Kanemura Y, Nakajima S, Fujinaka T: Treatment Outcomes in Patients with Unruptured Anterior Choroidal Artery Aneurysms : A Single-Center Experience. 「J Neuroendovasc Ther」 18(8) : 219-223、2024 年 7 月

Kawamoto S, Ozaki T, Asai K, Kidani T, Izutsu N, Nakajima S, Kanemura Y, Nishizawa N, Kobayashi K, Fujimi Y, Fujinaka T: Treatment Outcomes of PED for Unruptured Aneurysms of Internal Carotid Artery : Comparison of PED-Flex and PED-Shield. 「Neurol Med Chir (Tokyo)」 64(8) : 316-322、2024 年 8 月

Nishizawa N, Kidani T, Nakajima S, Kanemura Y, Asai K, Izutsu N, Kawamoto S, Kobayashi K, Nomoto M, Fujimi Y, Kida M, Fujinaka T : Coil Embolization of a Ruptured Traumatic Pseudoaneurysm of the Middle Meningeal Artery : A Case Report. 「NMC Case Report Journal」 11 : 257-262、2024 年 11 月

B-1

Kanemura Y, Yamamoto A, Katsuma A, Fukusumi H, Shofuda T, Kanematsu D, Handa Y, Sumida M, Yoshioka E, Mine Y, Yamaguchi R, Okada M, Igarashi M, Sekino Y, Shirao T, Nakamura M, Okano H: Human leukocyte antigen-homozygous iPS cells-derived neural progenitor cells showed neuronal differentiation, neurites extension, and synaptic structure formation in rodent ischemic stroke brains. ISSCR 2024 Annual Meeting, Hamburg, Germany, 2024 年 7 月 10 日

B-3

藤見洋佑、浅井克則、井筒伸之、川端修平、黒田秀樹、宇野貴宏、小林弘治、金地真生、西嶋吉継、松本貴晶、渡邊 大、上平朝子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：HIV 感染に関連する脳内病変 単一施設における外科手術の経験 (Brain lesions associated with HIV infection: A single-center surgical experience)。第 78 回国立病院総合医学会、大阪市、2024 年 10 月 18 日

金村米博：全医療職/全医療現場が参加する医療機器・ヘルスケア関連製品開発拠点 (Bi-AMPS) の取り組み。第 78 回国立病院総合医学会、大阪市、2024 年 10 月 18 日

金村米博：iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた脳梗塞再生医療の開発。第 24 回日本再生医療学会総会、横浜市、2025 年 3 月 20 日

B-4

隅田美穂、吉岡絵麻、勝間亜沙子、兼松大介、山本篤世、福角勇人、半田有佳子、加藤依香、高田 愛、松田由香子、正札智子、金村米博：大阪医療センター臨床研究センターセルプロセッシングセンターの管理と運用について。第 78 回国立病院総合医学会、大阪市、2024 年 10 月 18 日

分子医療研究室

室長 金村米博

【概要】

分子医療研究室では各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 悪性脳腫瘍の分子遺伝学的解析

悪性グリオーマを対象として、関西地域を中心とした 80 以上の医療機関で構成される「関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク」を主宰し、脳腫瘍検体レジストリーを行い、WHO 脳腫瘍分類に基づく中央遺伝子診断を実施することに加えて、脳腫瘍検体の収集登録体制を構築し、大規模症例を用いた悪性グリオーマの分子遺伝学的特性を明らかにする研究を行っています。また、小児悪性脳腫瘍の中で最も頻度の高い腫瘍の一つである髄芽腫に関して、「日本小児がん研究グループ (JCCG)」に参加し、全国レベルで収集された髄芽腫標本の中央分子診断を実施すると同時に、多施設臨床試験の中央分子診断を担当しています。

2. 難治性脳形成障害症の分子遺伝学的解析

L1CAM 変異で発症する X 連鎖性遺伝性水頭症を中心に、各種難治性脳形成障害症患者の臨床情報、画像情報、患者由来生体試料（組織・細胞・DNA）を収集し、次世代シーケンサーを駆使した遺伝子解析研究を実施すると同時に、患者由来試料から分離した線維芽細胞、神経幹細胞、間葉系細胞（臍帯由来）、血液細胞の特性解析を行い、並行してそれら細胞から疾患 iPS 細胞の樹立を実施し、その特性解析を実施しています。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Sanada T, Kinoshita M, Sasaki T, Yamamoto S, Fujikawa S, Fukuyama S, Hayashi N, Fukai J, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Arita H, Mori K, Ishibashi K, Takano K, Nishida N, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Tanino M, Kodama Y, Mano M, Kanemura Y : Prediction of MGMT promotor methylation status in glioblastoma by contrast-enhanced T1-weighted intensity image. 「Neurooncol Adv」 6(1) : vdae016、2024 年 2 月

Kamimura S, Mitobe Y, Nakamura K, Matsuda K, Kanemura Y, Kanoto M, Futakuchi M, Sonoda Y : Association of ADC of hyperintense lesions on FLAIR images with TERT promoter mutation status in glioblastoma IDH wild type. 「Surg Neurol Int」 15 : 108、2024 年 3 月

Hayashi N, Fukai J, Nakatogawa H, Kawaji H, Yoshioka E, Kodama Y, Nakajo K, Uda T, Naito K, Kijima N, Okita Y, Kagawa N, Takahashi Y, Hashimoto N, Arita H, Takano K, Sakamoto D, Iida T, Arakawa Y, Kawauchi T, Sonoda Y, Mitobe Y, Ishibashi K, Matsuda M, Achiha T, Tomita T, Nonaka M, Hara K, Takebe N, Tsuzuki T, Nakajima Y, Ohue S, Nakajima N, Watanabe A, Inoue A, Umegaki M, Kanematsu D, Katsuma A, Sumida M, Shofuda T, Mano M, Kinoshita M, Mori K, Nakao N, Kanemura Y : Neuroradiological, genetic and clinical characteristics of histone H3 K27-mutant diffuse midline gliomas in the Kansai Molecular Diagnosis Network for CNS Tumors (Kansai Network): multicenter retrospective cohort. 「Acta Neuropathol Commun」 12(1) : 120、2024 年 7 月

Watanabe D, Okamoto N, Kobayashi Y, Suzuki H, Kato M, Saitoh S, Kanemura Y, Takenouchi T, Yamada M, Nakato D, Sato M, Tsunoda T, Kosaki K, Miya F : Biallelic structural variants in three patients with ERCC8-related Cockayne syndrome and a potential pitfall of copy number variation analysis. 「Sci Rep」 14(1) : 19741、2024 年 8 月

Chida D, Okita Y, Utsugi R, Kuroda H, Hirayama R, Kijima N, Arisawa A, Kagawa N, Kanemura Y, Yoshimura S, Tomiyama N, Kishima H : Dynamic susceptibility contrast-enhanced perfusion magnetic resonance imaging parameters for predicting MGMT promoter methylation and prognostic value in newly diagnosed patients with glioblastoma. 「Oncol Lett」 28(6) : 610、2024 年 10 月

A-2

金村米博 : 各論 36 Medulloblastoma, molecularly defined 「脳腫瘍臨床病理カラーアトラス 第 5 版」 日本脳腫瘍病理学会 編、P.103-106、株式会社医学書院、東京、2024 年 5 月 20 日

A-3

石毛良実、水戸部祐太、松田憲一朗、北岡 匠、大江倫太郎、二口 充、鈴木修平、吉岡孝志、金村米博、園田順彦 : ミスマッチ修復遺伝子異常を伴う膠芽腫に対してペムブロリズマブが奏効した 1 例「脳神経外科速報」 34(5): 624-625、2024 年 9 月

A-4

原田敦子、四本由郁、金村米博、玉置知子 : 先天性小児脳神経外科疾患の遺伝学的診断「脳神経外科ジャーナル」 33(5):331-338、2024 年 5 月

B-1

Richardson S, Hicks D, Gough M, Castle J, Crosier S, Garcia-Ariza M, Martín-Guerrero I, LA Plasschaert S, Bourdeaut F, Dufour C, Masliah-Planchon J, Buttarelli FR, Garre ML, Biassoni V, Massimino M, Kanemura Y, Ramaswamy V, Gajjar A, Northcott P, Robinson G, Korshunov A, Pfister SM, Mynarek M, Rutkowski S, Schwalbe EC, Bailey

S, Clifford SC: Molecular pathology, treatment and prognosis of infant sonic hedgehog medulloblastoma: A global multi-cohort study. ISPNO2024, Philadelphia, PA, USA, 2024 年 7 月 1 日

B-2

Go K, Katsuma A, Makino Y, Yamamoto A, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Terada Y, Sano N, Tanji M, Mineharu Y, Kodama Y, Mano M, Ichimura K, Sasaki A, Hirato J, Inoue T, Nishikawa R, Date I, Nonaka M, Nagane M, Arakawa Y, Kanemura Y: Clinical and Molecular Characteristics of Japanese Medulloblastoma, WNT-activated. ISPNO2024, Philadelphia, PA, USA, 2024 年 7 月 1 日

B-3

深井順也、中戸川裕一、林 宣秀、児玉良典、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、金村米博：ヒストン H3 K27M 変異グリオーマの臨床・病理学的解析 ミッドライン症例とノンミッドライン症例の比較検討。第 42 回日本脳腫瘍病理学会、呉市、2024 年 5 月 24 日

大谷理浩、藤井謙太郎、石田穰治、水田 亮、柳井広之、松下博和、里見介史、金村米博、市村幸一、田中將太：マルチモダリティを用いた WHO 新分類への対応と現状。第 42 回日本脳腫瘍病理学会、呉市、2024 年 5 月 24 日

有田英之、平井健太郎、萩岡起也、高野浩司、金村米博：MRI における皮質限局の脳回腫大所見は IDH 野生型グリオーマを示唆する。第 42 回日本脳腫瘍病理学会、呉市、2024 年 5 月 24 日

B-4

中村和貴、水戸部祐太、鈴木一司、二口 充、金村米博、園田順彦：後期高齢者膠芽腫における長期生存例についての検討。第 42 回日本脳腫瘍病理学会、呉市、2024 年 5 月 24 日

水戸部祐太、中村和貴、石毛良美、鈴木一司、二口 充、金村米博、園田順彦：梁下野 GBM の病理像および臨床像。第 42 回日本脳腫瘍病理学会、呉市、2024 年 5 月 24 日

松山裕美、松本久宣、赤澤 香、小椋恵利、藤上友輔、赤木佳奈、伴 健二、飛梅孝子、巽 啓司、金村米博、八十島宏行：Challenges Insighted from Risk-Reducing salpingo-oophorectomy (RRSO) in Women with HBOC。日本人類遺伝学会第 69 回大会、札幌市、2024 年 10 月 12 日

松山裕美、松本久宣、赤澤 香、小椋恵利、藤上友輔、赤木佳奈、伴 健二、飛梅孝子、巽 啓司、金村米博、八十島宏行：HBOC 女性におけるリスク低減卵管卵巣摘出術 (RRSO) の実施における課題。第 78 回国立病院総合医学会、大阪市、2024 年 10 月 18 日

勝間亜沙子、吉岡絵麻、兼松大介、木原実香、河合 健、眞能正幸、金村米博：次世代シーケンサーを用いた新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)のゲノム解析検査。第78回国立病院総合医学会、大阪市、2024年10月18日

兼松大介、勝間亜沙子、水野雄貴、西牧晃二、浦井 健、大里幸暉、渡部耕治、中村貴行、大西光雄、金村米博：次世代医療機器等開発事業支援デジタルコンテンツ制作ユニット「Digital works Bi-AMPS」の活動報告。第78回国立病院総合医学会、大阪市、2024年10月19日

馬場健太郎、福士亜美、Xiao Zhize、勝間亜沙子、川内大輔、金村米博、稲垣直之：グリオーマ細胞の浸潤および増殖機構の解明。第47回日本分子生物学会年会、福岡市、2024年11月28日

呉 浩一、勝間亜沙子、牧野恭秀、山本悦子、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、高田茂樹、佐野徳隆、丹治正大、峰晴陽平、児玉良典、眞能正幸、市村幸一、佐々木惇、平戸純子、井上 健、西川 亮、伊達 勲、埜中正博、永根基雄、荒川芳輝、金村米博：髄芽腫の分子診断:国内症例の特徴と WNT の診断方法。第42回日本脳腫瘍学会学術集会、志摩市、2024年12月1日

中戸川裕一、深井順也、川路博史、林 宣秀、木嶋教行、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、正札智子、森 鑑二、稲永親憲、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ半球性のグリオーマの臨床的特徴と予後。第42回日本脳腫瘍学会学術集会、志摩市、2024年12月1日

中村和貴、水戸部祐太、金村米博、園田順彦：再発膠芽腫に対する再摘出術と予後因子についての検討。第42回日本脳腫瘍学会学術集会、志摩市、2024年12月2日

西川真弘、井上明宏、大西丘倫、金村米博、日下部公資、大塚祥浩、末廣 諭、山下大介、渡邊英昭、國枝武治：CD44 は再発膠芽腫における Bevacizumab 効果予測因子となりうる。第42回日本脳腫瘍学会学術集会、志摩市、2024年12月2日

B-6

池町涼介、大谷理浩、石田穰治、藤井謙太郎、富田祐介、金村米博、柳井広之、田中將太：頭頂葉に発生した成人神経節細胞腫の1例。第97回日本脳神経外科学会 中国四国支部会、米子市、2024年4月7日

B-8

金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークのグリオーマ分子診断体制。第48回東海脳腫瘍病理検討会、名古屋市、2025年3月15日

当研究室は、HIV 診療のさまざまな問題に対して研究を行っております。この 10 年で HIV 感染の発生率は低下しましたが、CD4 数が低い状態で診断される患者も少なくはありません (J Epidemiol. 2023)。治療に関しては多くの症例でウイルス抑制が得られるようになり、近年に登場した新規抗 HIV 薬では長期の有効性や安全性が示されるようになりました (Jpn J Infect Dis. 2017, PLoS One. 2025, HIV Res Clin Pract. 2025)。しかし、国内では早期に抗 HIV 療法を開始することは困難 (J Infect Chemother. 2023) で、たとえ抗 HIV 療法を行っても免疫系は完全に回復しません。ウイルス抑制が得られた症例で血中インターフェロン γ が持続的に高値を示す症例 (Viral Immunol. 2010) が存在し、それらの症例では CD4 数の回復が不十分でした (BMC Infect Dis. 2019)。抗 HIV 薬の副作用の課題も残されています。ドルテグラビルの神経精神系有害事象は血中濃度や UGT1A1 遺伝子多型と関連すること (BMC Infect Dis. 2017) をはじめ、様々な報告 (J Infect Chemother. 2012, J Infect Chemother. 2014, J Infect Chemother. 2018) を行いました。

薬剤耐性や薬物動態も HIV 感染者の治療では重要になってきます。当研究室ではこれらに関する研究も行っております (Antiviral Res. 2010, J Infect Chemother. 2015, Inter Med. 2016, J Infect Chemother. 2023, J Antimicrob Chemother. 2023, J Int AIDS Soc. 2023, J Pharm Health Care Sci. 2024)。また、急性 HIV 感染症 (AIDS Res Ther. 2015)、ヒトヘルペスウイルス 8 型感染症 (Inter Med. 2014, J Infect Chemother. 2017, J Med Virol. 2023)、水痘・帯状疱疹ウイルス感染症 (J Med Virol. 2013) A 型急性肝炎 (Hepatol Res. 2019)、悪性リンパ腫 (J Clin Immunol. 2018)、市中感染型 MRSA 感染 (J Infect Chemother. 2020)、脳構造への影響 (J Neurovirol. 2020, J Neurovirol. 2022) などの研究にも取り組んでいます。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Kushida H, Hirota K, Nishida Y, Yoshino M, Uehira T, Shirasaka T : Association between tenofovir plasma trough concentrations in the early stage of administration and discontinuation of up to five years tenofovir disoproxil fumarate due to renal function-related adverse events in Japanese HIV-1 infected patients. 「J Pharm Health Care Sci」 10(1) : 20、2024 年 5 月 10 日

Koga M, Fukuda A, Nojima M, Ishizaka A, Itoh T, Eguchi S, Endo T, Kakinuma A, Kinai E, Goto T, Takahashi S, Takeda H, Tanaka T, Teruya K, Hanai J, Fujii T, Fujitani J,

Hosaka T, Mita E, Minami R, Moro H, Yokomaku Y, Watanabe D, Watanabe T, Yotsuyanagi H : Non-acquired immunodeficiency syndrome defining malignancies in people living with haemophilia and human immunodeficiency virus after the direct-acting antivirals era for hepatitis C virus: A nationwide questionnaire survey in Japan. 「Glob Health Med」 6(5) : P316-323、2024 年 10 月 31 日

A-1

渡邊 大 : HIV 感染症治療薬。「Pocket Drugs 2025」福井次矢監修、小松康宏・渡邊裕司編集、P826-841、医学書院、東京、2025 年 1 月 1 日発行

A-2

渡邊 大、上平朝子 : HIV 感染の基礎知識。「必ず役立つ！肝炎診療バイブル改定 6 版」、三田英治、平松直樹編集、P142-158、メディカ出版、大阪、2024 年 10 月 1 日発行

A-3

椎野禎一郎、潟永博之、今橋真弓、渡邊 大、南 留美、蜂谷敦子、西澤雅子、林田庸総、吉田 繁、豊嶋崇徳、伊藤俊広、古賀道子、貞升健志、佐野貴子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、阪野文哉、川畑拓也、藤井輝久、高田清式、中村麻子、仲村秀太、松下修三、吉村和久、杉浦 互、菊地 正、薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク：国内 HIV-1 伝播クラスターの 2022 年の動向：薬剤耐性 HIV 調査ネットワークによる SPHNCS 年報。日本エイズ学会誌。

A-4

山本俊祐、渡邊 大、眞能正幸、長谷川裕子、阪森亮太郎、三田英治：カポジ肉腫 (HHV-8 関連)「消化器内視鏡」36(4) : 506-507、東京医学社、東京、2024 年 4 月 16 日

渡邊 大 : Q&A 形式 Case Study。CKD および HBV 感染を合併した症例の ART 選択について「HIV 感染症と AIDS の治療」15(1) : 35-37、メディカルレビュー社、大阪、2024 年 12 月 15 日

A-5

渡邊 大 : 近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 6 年度研究報告書、2025 年 3 月 31 日

B-2

Benoit Trottier, Fabrice Bonnet, Miguel Garcia-Deltoro, Massimo Andreoni, Marta Boffito, Berend J. van Welzen, Dan Turner, Sam McConkey, Watanabe D, Po-Liang Lu, Alper Gündüz, Jason Brunetta, David Thorpe, Michelle L. D’Antoni, Tali Cassidy, Andrea Marongiu, Amy R. Weinberg, Richard Haubrich, Stefan Scholten. Real-World

Effectiveness and Tolerability of Bictegravir/Emtricitabine/Tenofovir Alafenamide (B/F/TAF) in Treatment-Experienced People With HIV and a History of Antiretroviral Drug Resistance Mutations. 33rd Annual Canadian Conference on HIV/AIDS Research. Apr 25th, Ontario, Canada、2024 年 4 月

Benoit Trottier, Fabrice Bonnet, Miguel Garcia-Deltoro, Massimo Andreoni, Marta Boffito, Berend J. van Welzen, Dan Turner, Sam McConkey, Watanabe D, Po-Liang Lu, Alper Gündüz, David Thorpe, Michelle L. D'Antoni, Tali Cassidy, Andrea Marongiu, Amy R. Weinberg, Cathy Chien, Richard Haubrich, Stefan Scholten. Real-World Effectiveness And Tolerability of Bictegravir/Emtricitabine/Tenofovir Alafenamide (B/F/TAF) In Treatment-Experienced People With HIV And a History of Antiretroviral Drug Resistance. American Conference for the Treatment of HIV (ACTHIV), Atlanta, GA、2024 年 5 月 2 日

Kikuchi T, Gatanaga H, Imahashi M, Watanabe D, Minami R, Yoshida S, Hayashida T, Shiino T, Nishizawa M, Hachiya A, Yoshimura K, Sugiura W : Japanese Drug Resistance HIV-1 Surveillance Network. Surveillance of HIV-1 transmitted drug resistance in Japan, 2020-2022. Asia-Pacific HIV Research Forum 2024. Taipei, Taiwan、2024 年 5 月 18 日

Yasuda K, Misawa N, Ono H, Watanabe D, Shirakawa K, Sato K, Saito H, Kondo A T, Koyanagi Y, Takeuchi O : MEX3B, an RNA-binding protein, strongly suppresses HIV-1 viral replication depending on its RNA-binding ability. 3rd France – Japan symposium on HIV/AIDS & infectious diseases basic research, Paris, France, 2024 年 10 月 29 日

Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Hirota K, Matsumura T, Ueji T, Nishida Y, Yoshino M, Uehira T, Shirasaka T. Association of ABCG2 genetic polymorphisms with subjective symptoms and weight gain by bictegravir administration in Japanese HIV-1-infected patients. HIV Glasgow Congress, Glasgow, UK、2024 年 11 月 10 日

B-4

藤見洋佑、浅井克則、井筒伸之、川端修平、黒田秀樹、宇野貴宏、小林弘治、木田将義、金地真生、松本貴晶、西嶋吉継、渡辺 大、上平朝子、金村米博、藤中俊之：当院における HIV 感染症に合併した脳病変に対する手術経験。日本脳神経外科学会第 83 回学術総会、横浜、2024 年 10 月 16 日

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大：HIV 陽性者の受診中断・再開・継続理由とその心理的背景に関する研究。第 78 回国立病院総合医学会、大阪、2024 年 10 月 19 日

藤見洋佑、浅井克則、井筒伸之、川端修平、黒田秀樹、宇野貴宏、小林弘治、金地真生、西嶋吉継、松本貴晶、渡邊 大、上平朝子、金村米博、中島 伸、藤中俊之：Brain lesions associated with HIV infection: A single-center surgical experience。第 78 回国立病院総合医学会、大阪、2024 年 10 月 18 日

白阪琢磨、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本 学、潟永博之、日笠聡、八橋 弘、渡邊 大：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 1 報 健康状態と生活状況の概要。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

川戸美由紀、三重野牧子、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡本 学、潟永博之、日笠 聡、八橋 弘、渡邊 大、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 2 報 不健康割合の推移。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

三重野牧子、川戸美由紀、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡本 学、潟永博之、日笠 聡、八橋 弘、渡邊 大、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 3 報 悩みやストレスとこころの状態の関連。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

中内崇夫、矢倉裕輝、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：ドラビリンヘスウィッチした症例における 96 週までの糖代謝に及ぼす影響に関する調査。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

矢倉裕輝、中内崇夫、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：カボテグラビル・リルピビリンの持効性注射剤の血中濃度に関する検討 第 2 報。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

久利歩、矢倉裕輝、藤原綾乃、駒野淳、渡邊 大：CYP3A5 および UGT1A1 の遺伝子多型がビクテグラビルの薬物動態および血清クレアチニンに及ぼす影響。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

渡邊 大、西田恭治、矢倉裕輝、藤原綾乃、武山雅博、矢田弘史、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、上平朝子、白阪琢磨：包括的凝固機能検査による HIV 感染者の凝固機能に関する検討。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、Lucky Runtwene、椎野禎一郎、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、潟永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、佐野貴子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、川畑拓也、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、松下修三、仲村秀太、吉村和久、杉浦 互。2023 年の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

廣田和之、松村拓朗、上地隆史、上平朝子、西田恭治、渡邊 大、白阪琢磨：HIV 感染者に合併した非結核性抗酸菌症の症例。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

B-5

渡邊 大：HIV 診療の現状と HIV 感染者の透析医療の課題。第 101 回大阪透析研究会教育企画委員会セミナー、第 101 回大阪透析研究会、大阪、2024 年 9 月 15 日

B-6

渡邊 大、矢倉裕輝、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：HIV の PR 領域と RT 領域のアミノ酸残基におけるアミノ酸の時間変化に関する検討。第 37 回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2024 年 6 月 15 日

久利 歩、矢倉裕輝、藤原綾乃、駒野 淳、渡邊 大：日本人 HIV-1 感染者における CYP3A5 および UGT1A1 の遺伝子多型とビクテグラビル血漿トラフ濃度の関連。第 37 回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2024 年 6 月 15 日

矢倉裕輝、中内崇夫、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：CYP3A5 および UGT1A1 の遺伝子多型が血漿中ビクテグラビル濃度に及ぼす影響。第 32 回抗ウイルス療法学会学術集会・総会、熊本、2024 年 8 月 29 日

B-7

渡邊 大：抗 HIV 療法の変遷と持効性注射剤が HIV 陽性者にもたらすもの。HIV Forum 2024 in Osaka、大阪、2024 年 4 月 25 日

渡邊 大：HIV 感染症における薬剤耐性のこれまでとこれから。Expert seminar on PLWH/H、WEB 開催、2024 年 7 月 31 日

B-8

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知 HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。2024 年度 HIV/AIDS 看護師研修基礎コース、大阪、2024 年 9 月 9 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 6 年度 HIV 感染症研修会/HIV 感染症医師実地研修会（3 週間コース）、大阪、2024 年 9 月 30 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 6 年度 HIV 感染症研修会/HIV 感染症医師実地研修会（3 週間コース）、大阪、2024 年 9 月 30 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 5 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2024 年 10 月 3 日

渡邊 大：HIV 急性感染。令和 5 年度 HIV 感染症医師実地研修会（3 週間コース）、大阪、2024 年 10 月 10 日

渡邊 大：新規抗 HIV 薬。令和 5 年度 HIV 感染症医師実地研修会（3 週間コース）、大阪、2024 年 10 月 7 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識 HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。2024 年度 HIV/AIDS 看護師研修基礎コース、大阪、2024 年 11 月 18 日

渡邊 大：HIV/AIDS 医療の現状と当院の役割。大阪医療センター令和 6 年度新採用職員研修計画、大阪、2024 年 4 月 3 日

渡邊 大：HIV 感染症とは。大阪医療センター令和 6 年度新採用臨床研修医オリエンテーション、大阪、2024 年 4 月 10 日

渡邊 大：病理学各論Ⅳ ヒト免疫不全ウイルス（HIV）。大阪医療センター看護学校講義、2024 年 6 月 24 日

渡邊 大：病理学各論Ⅳ 自己免疫疾患。大阪医療センター看護学校講義、2024 年 7 月 22 日

渡邊 大：近畿ブロックにおける現状と課題。令和 6 年度近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、大阪、2024 年 12 月 10 日

HIV 感染制御研究室

室長 矢倉裕輝

当研究室では、HIV 感染者に対する臨床における薬物治療の諸問題に対する研究を行っております。現在の HIV 感染症治療薬は依然、潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、ほぼ生涯の薬物治療が必要です。また、HIV 感染症治療薬は国際共同第Ⅲ相臨床試験結果を根拠として申請、承認されるため、承認時点で日本人の有効性、安全性および薬物動態に関わる情報がごく限られています。更に、治療薬のその殆どが錠剤であり、粉碎、簡易懸濁等、剤型変更を行った上で投与した際の薬物動態や主薬の安定性をはじめとする製剤学的な情報等も不足しております。

そのため、薬物治療が長期にわたり有効かつ安全に実施できるよう、Pharmacokinetics(PK)、Pharmacodynamics(PD)、Pharmacogenomics (PGx) および製剤学観点から評価することが重要となります。具体的には、高速液体クロマトグラフィー (High Performance Liquid Chromatography ; HPLC) 等を用いて薬物濃度の測定法の開発を行い、実臨床における日本人の薬物動態や製剤学的安定性のデータを収集し、解析を行っています。更に、HIV 感染症治療薬の薬物動態や副作用、投与による臨床検査値の変化を規定する薬物代謝酵素および薬物トランスポーターの遺伝子多型の探索を行い、それらの保有が及ぼす影響についても検討を行っています。

これまでに、HIV インテグラーゼ阻害剤であるラルテグラビルおよびドルテグラビルの代謝に関与する UGT1A1 の遺伝子多型と薬物動態および精神神経系有害事象の関連 (J Infect Chemother. 2015, BMC Infect Dis. 2017)、非核酸系逆転写酵素阻害剤であるドラビリンの透析による薬物動態への影響 (J Infect Chemother. 2023)、核酸系逆転写酵素阻害剤であるテノホビルジソプロキシルフマル酸塩の熱安定性 (Jpn J Pharm Health Care Sci. 2014) や同薬剤の投与初期の血漿中濃度と腎障害の関連 (J Pharm Health Care Sci. 2024)、抗 HIV 薬の懸濁時における主薬の安定性に関する検討 (医療薬学. 2012) 等について報告し、現在は厚生労働省エイズ対策政策研究事業を中心に、多施設共同研究も行っています。

新規作用機序の薬剤、持効性筋注製剤等、これまでとは異なる投与経路の薬剤も近年次々と承認されています。多くの薬剤の選択肢の中から、長期にわたるウイルス抑制および QOL の維持、向上を見据え、PK/PD/PGx を駆使した最適な治療レジメンの提供の実現をメインテーマとして研究を行っています。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Kushida H, Hirota K, Nishida Y, Yoshino M, Uehira T, Shirasaka T : Association between tenofovir plasma trough concentrations in the early stage of administration and discontinuation of up to five years tenofovir disoproxil

fumarate due to renal function-related adverse events in Japanese HIV-1 infected patients.
「J Pharm Health Care Sci」 10(1) : 20, 2024 年 5 月

A-5

矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実施状況の把握と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成 厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 6 年度研究報告書、P.72-75、2025 年 3 月 31 日

B-2

Yagura H, Watanabe D, Nakauchi T, Hirota K, Nishida Y, Yoshino M, Uehira T, Shirasaka T : Association of ABCG2 genetic polymorphisms with subjective symptoms and weight gain by bictegrovir administration in Japanese HIV-1-infected patients. HIV Drug Therapy Glasgow 2024,UK,2024 年 11 月 10 日

B-3

矢倉裕輝：HIV 領域における外来診療の実際と多職種連携の重要性～薬剤師の立場から～。第 78 回国立病院総合医学会、大阪、2024 年 10 月 19 日

矢倉裕輝：長期療養時代の PLWH における腎機能管理の重要性～薬剤師の視点から～。第 38 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、2024 年 11 月 29 日

B-4

矢倉裕輝、中内崇夫、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：CYP3A5 および UGT1A1 の遺伝子多型が血漿中ビクテグラビル濃度に及ぼす影響。第 32 回日本抗ウイルス療法学会学術集会、WEB、2024 年 8 月 31 日

矢倉裕輝、阿部憲介、増田純一、長島浩二、山本文哉、松木克仁、山梨領太、野村直幸、河野泰宏、濱砂恵理香、小山朋子、山口泰弘、廣永竜太、平野 淳、中内崇夫、合原嘉寿、伊東隆宏、佐藤萌、西村康人、石垣千絵、西村富啓、平野隆司、濱岡照隆、尾崎誠一、橋本雅司、吉野宗宏、山下大輔：抗 HIV 薬の処方および採用状況等に関するアンケート調査。第 78 回国立病院総合医学会、大阪、2024 年 10 月 19 日

矢倉裕輝、中内崇夫、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：カボテグラビル・リルピビリンの持効性注射剤の血中濃度に関する検討 第 2 報。第 38 回日本エイズ学会学術集会、東京、2024 年 11 月 29 日

久利 歩、矢倉裕輝、藤原綾乃、駒野 淳、渡邊 大：CYP3A5 および UGT1A1 の遺伝子多型がビクテグラビルの薬物動態および血清クレアチニンに及ぼす影響。第 38 回日本エイズ学会学術集会、東京、2024 年 11 月 28 日

増田純一、矢倉裕輝、松木克仁、井上正朝、田澤佑基、佐藤 萌、三枝祐美、石井良、成田綾香、石井聡一郎、西 勇治、山口泰弘、菊地 正、潟永博之：HIV 診療ブロック拠点病院における HIV 感染症薬剤耐性調査。第 38 回日本エイズ学会学術集会、東京、2024 年 11 月 28 日

B-8

矢倉裕輝：薬学的観点から考える持効性注射剤の特徴と位置付け。HIV UP TO DATE seminar、WEB、2024 年 4 月 25 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。神戸薬科大学講義 先端医療論、神戸、2024 年 5 月 15 日

矢倉裕輝：長期療養を見据えた ART レジメン～3 剤？2 剤？どの薬剤？。E2 HIV Expert Forum、WEB、2024 年 8 月 27 日

矢倉裕輝：抗 HIV 療法について～服薬支援の重要性～。2024 年度 HIV/AIDS 看護師研修会基礎コース、大阪、2024 年 9 月 9 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 6 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2024 年 9 月 30 日

矢倉裕輝：処方動向、患者さんのニーズから考える ART レジメンの個別最適化。HIV Pharmacist Forum 2024、WEB、2024 年 10 月 29 日

矢倉裕輝：処方動向から考える薬剤師が行う服薬支援。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー、WEB、2024 年 12 月 5 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。兵庫医科大学薬学部講義 感染制御学、神戸、2024 年 12 月 6 日

臨床疫学研究室

室長 阪森亮太郎

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討しています。代表的な研究内容を示します。

インターフェロンフリー治療によって C 型肝炎は HCV 排除が期待できる時代になりましたが、残された少数の難治例に対する最適治療法を検討しています。インターフェロンフリー治療は非代償性肝硬変にまで適応が拡大されましたが、肝予備能が低下した症例に投薬するため、死亡例が出ています。より安全に治療できる条件とその有効性を検証しています。同じく心機能低下や腎機能低下症例に対する治療法も検討しています。HIV 感染合併例でのインターフェロンフリー治療の成績もまとめ、論文化しています。

次に B 型肝炎では、核酸アナログの長期投与成績から導かれる耐性化の問題点を検討しています。そしてラミブジン・アデホビル併用療法効果不良例に対し、アデホビルを TDF に切り替えることの有効性と安全性を明らかにしました。現在はさらに TDF から TAF への切り替えを検証しています。近年散発的に発生している B 型急性肝炎では genotype A が大半を占めますが、その特徴を解析し、慢性化への関与についても検討しています。また HIV 感染が B 型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討しています。さらに患者数が増加している脂肪性肝疾患について、全国多施設の協力を得ながら自然経過について検討しています。

肝細胞癌に対する治療では肝動注化学療法に注目し、現在症例の蓄積中です。また分子標的薬と免疫チェックポイント阻害剤との併用も治療選択肢に入りました。病状に応じた最適治療の方向性を示していけるよう検証すると同時に、特有の副反応についても検討を加えています。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Kai M, Hikita H, Kazuki M, Tahata Y, Shinkai K, Doi A, Ohkawa K, Miyazaki M, Ishida H, Matsumoto K, Nozaki Y, Yakushijin T, Sakamori R, Kaneko A, Iio S, Nawa T, Kakita N, Morishita N, Hiramatsu N, Usui T, Imanaka K, Doi Y, Sakakibara M, Yoshida Y, Oze T, Kodama T, Tatsumi T, Takehara T. Clinical factors associated with the therapeutic efficacy of atezolizumab plus bevacizumab in patients with unresectable hepatocellular carcinoma: A multicenter prospective observational study. 「PLoS One」19(1): e0294590. 2024 年 1 月 2 日

Yamamoto S, Takeuchi Y, Sakamori R, Mita E. : Underwater endoscopic mucosal resection in the reconstructed gastric conduit after esophagectomy. 「VideoGIE」 9(6) : 274-277. 2024 年 3 月 19 日

Imaoka H, Sasaki K, Machida R, Nagano H, Satoi S, Ikeda M, Kobayashi S, Yamashita

T, Okusaka T, Ido A, Hatano E, Miwa H, Ueno M, Nakao K, Shimizu S, Kuramochi H, Sakamori R, Tsumura H, Okano N, Shioji K, Shirakawa H, Akutsu N, Tsuji K, Ishii H, Umemoto K, Asagi A, Ueno M; JCOG Hepatobiliary and Pancreatic Oncology Group. : Current status of the cost burden of first-line systemic treatment for patients with advanced hepatocellular carcinoma in Japan, 2021-22. 「Jpn J Clin Oncol」 54(10) : 1071-1077. 2024 年 10 月 3 日

Sometani E, Hikita H, Murai K, Toyoda H, Tanaka S, Oze T, Sung J, Shimoda A, Fukuoka M, Shigeno S, Fukutomi K, Shirai K, Tahata Y, Saito Y, Nishio A, Furuta K, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Mita E, Umezawa A, Tanaka Y, Takehara T. : High serum growth differentiation factor 15 is a risk factor for the occurrence of hepatocellular carcinoma in chronic hepatitis B patients treated with nucleos(t)ide analogs. 「Hepatol Res」 2024 年 9 月 18 日

Koba M, Takeno A, Hasegawa H, Sakamori R, Higashiura R, Yamamoto M, Tokuyama S, Toshiyama R, Kawai K, Takahashi Y, Sakai K, Hama N, Gotoh K, Kato T, Hirose Y, Mori K, Mano M, Hirao M. : An aggressive gastric CIC-DUX4 sarcoma surgically resected with multivisceral organs : a case report. 「Surg Case Rep」 10(1) : 241. 2024 年 10 月 23 日

Tahata Y, Hikita H, Mochida S, Enomoto N, Kawada N, Ido A, Miki D, Kurosaki M, Yoshiji H, Sakamori R, Kuroda H, Yatsuhashi H, Yamashita T, Hiasa Y, Kato N, Miyaaki H, Ueno Y, Itoh Y, Matsuura K, Takami T, Asahina Y, Suda G, Akuta N, Tateishi R, Nakamoto Y, Kakazu E, Terai S, Shimizu M, Miyazaki M, Nozaki Y, Sobue S, Yano H, Miyaki T, Moriuchi A, Hori T, Shirai K, Murai K, Saito Y, Kodama T, Tatsumi T, Yamada T, Takehara T. : Factors involved in gastroesophageal varix-related events in patients with hepatitis C virus-related compensated and decompensated cirrhosis after direct-acting antiviral therapy. 「Hepatol Res」 2024 年 10 月 29 日

Phyo Z, Tanaka S, Sugiyama A, Ko K, Takahashi K, Mirzaev UK, Akuffo GA, Chhoung C, Akita T, Kozuki M, Sakamori R, Tanaka J. : Unveiling the dynamics of hepatitis C virus transmission among injection drug users and men who have sex with men : A comprehensive study in Japan. 「Hepatol Res」 2024 年 11 月 4 日

Naganuma A, Makita F, Sugimoto R, Kikuchi M, Furuta K, Iwamoto S, Sakamori R, Kouno H, Ario K, Yatsuhashi H. An open-label, randomized, controlled trial on the benefit of β -hydroxy- β -methyl butyrate, l-arginine, l-glutamine combination beverages and locomotion training as supportive care for the treatment of unresectable hepatocellular carcinoma using lenvatinib : A pilot study (HELLO study). 「Clin Nutr ESPEN」 65 : 357-364. 2025 年 2 月

Kozuki M, Tanaka S, Shirai T, Sakon N, Harada S, Kitagawa A, Matsushima K, Abe Y, Fukutake N, Hasegawa H, Yamamoto S, Sakakibara Y, Sakamori R. A case of post-

outbreak acute hepatitis a in a Japanese man who have sex with men infected with RIVM-HAV16-090 strain. 「J Infect Chemother」 27 : 31(4) : 102673. 2025 年 2 月

A-2

阪森亮太郎 (作成協力者) : 肝生検ガイドンス「日本肝臓学会編」 南江堂、2024 年 5 月 5 日

阪森亮太郎 : C 型慢性肝炎の診断と評価。改訂 6 版必ず役立つ! 「肝炎診療バイブル」、P77-82、メディカ出版、2024 年 10 月 1 日

阪森亮太郎 : 肝底護療法など。改訂 6 版必ず役立つ! 「肝炎診療バイブル」、P98-102、メディカ出版、2024 年 10 月 1 日

阪森亮太郎 : 肝癌の診断。改訂 6 版必ず役立つ! 「肝炎診療バイブル」、P273-282、メディカ出版、2024 年 10 月 1 日

A-6

阪森亮太郎 : 肝内胆管がん「最新の臨床」WEB、南江堂、2024 年 4 月 12 日

B-2

Tahata Y, Hikita H, Mochida S, Ido A, Miki D, Sakamori R, Yoshiji H, Kawada N, Enomoto N, Yamashita T, Kurosaki M, Kuroda H, Hiasa Y, Nakao K, Kato N, Suda G, Nakamoto Y, Yatsuhashi H, Matsuura K, Takami T, Kakazu E, Itoh Y, Asahina Y, Ueno Y, Tateishi R, Terai S, Shimizu M, Akuta N, Kodama T, Tatsumi T, Yamada T, Takehara T : Baseline gamma-glutamyl transpeptidase levels are associated with aggravation of esophagogastric varix after direct-acting antiviral therapy in cirrhotic patients with hepatitis C virus. EASL2024, poster, Milan, Italy, 2024 年 6 月 5-6 日

Hiraoka A, Aikata H, Moriguchi M, Ikeda M, Morimoto N, Tsuchiya K, Takehara T, Nagai H, Sakamori R, Nakamura S, Tsuji K, Kuroda H, Shimizu M, Shiina S, Yamasaki T, Kudo T, Kokudo N, Furuse J, Yamamoto K, Yamashita T : Association of skeletal muscle mass with safety and efficacy of atezolizumab (atezo) plus bevacizumab (bev) in Japanese patients (pts) with unresectable hepatocellular carcinoma (uHCC): Results from the ELIXIR study. ESMO Congress 2024, poster, Barcelona, Spain, 2024 年 9 月 16 日

Murai K, Hikita H, Sometani E, Tanaka S, Miyake T, Kuriki S, Sung J, Shimoda A, Shigeno S, Shirai K, Saito Y, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Toyoda H, Umezawa A, Takehara T : MALE SEX, HIGH β -GTP, HIGH AFP, HIGH GDF15 AND HIGH FIB-4 INDEX WERE HIGH RISK FACTORS FOR THE OCCURRENCE OF PRIMARY HCC IN CHB PATIENTS UNDER NUC TREATMENT. AASLD The Liver Meeting, San Diego, CA 2024 年 11 月 15 日-19 日

Tahata Y, Hikita H, Takaki A, Kurosaki M, Matsuura K, Yatsuhashi H, Kuroda H, Ueno

Y, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Takehara T : SUSTAINED VIROLOGIC RESPONSE AND POSTTREATMENT LIVER FUNCTION ARE ASSOCIATED WITH 5-YEAR SURVIVAL AFTER DIRECT-ACTING ANTIVIRAL TREATMENT IN DECOMPENSATED CIRRHOTIC PATIENTS WITH HEPATITIS C VIRUS: A LONG-TERM FOLLOW UP STUDY OF JAPANESE CLINICAL TRIAL COHORT. AASLD The Liver Meeting, San Diego, CA 2024 年 11 月 15 日-19 日

Tahata Y, Hikita H, Mochida S, Enomoto N, Kawada N, Ido A, Miki D, Kurosaki M, Yoshiji H, Sakamori R, Kuroda H, Yatsushashi H, Yamashita T, Hiasa Y, Kato N, Miyaaki H, Ueno Y, Itoh Y, Matsuura K, Takami T, Asahina Y, Suda G, Akuta N, Tateishi R, Nakamoto Y, Kakazu E, Terai S, Shimizu M, Kodama T, Tatsumi T, Yamada T, Takehara T : FACTORS ASSOCIATED WITH THE AGGRAVATION OF GASTROESOPHAGEAL VARIX IN COMPENSATED AND DECOMPENSATED CIRRHOTIC PATIENTS DUE TO CHRONIC HEPATITIS C VIRUS INFECTION AFTER DIRECT-ACTING ANTIVIRAL THERAPY. AASLD The Liver Meeting, San Diego, CA 2024 年 11 月 15 日-19 日

Tahata Y, Hikita H, Nozaki Y, Ishida H, Hosui A, Miyazaki M, Sakamori R, Ohkawa K, Tatsumi N, Nakanishi F, Doi Y, Yakushijin T, Sakakibara M, Imanaka K, Kakita N, Iio S, Yoshida Y, Doi A, Yamada R, Kodama T, Tatsumi T, Takehara T : FACTORS ASSOCIATED WITH LONG-TERM RISK OF LIVER-RELATED AND NON-LIVER-RELATED DEATH AFTER SUSTAINED VIROLOGIC RESPONSE IN PATIENTS WITH HEPATITIS C VIRUS TREATED WITH DIRECT-ACTING ANTIVIRAL. AASLD The Liver Meeting, Poster 2602San Diego, CA 2024 年 11 月 15 日-19 日

B-3

田畑優貴、疋田隼人、高木章乃夫、黒崎雅之、松浦健太郎、八橋 弘、黒田英克、上野義之、阪森亮太郎、竹原徹郎 : C 型非代償性肝硬変症例に対する sofosbuvir/velpatasvir ± ribavirin 治療国内第 3 相試験における長期予後の検討。第 110 回日本消化器病学会総会 パネルディスカッション 12 PD12-1、徳島、2024 年 5 月 9 日

前阪和城、疋田隼人、甲斐真知子、金子 晃、大川和良、野崎泰俊、阪森亮太郎、垣田成庸、宮崎昌典、竹原徹郎 : 切除不能肝細胞癌に対するデュルバルマブ+トレメリムマブ併用療法の初期治療成績。第 110 回日本消化器病学会総会、シンポジウム 13 S13-8、徳島、2024 年 5 月 10 日

梅村武司、阪森亮太郎 : WS7 高齢社会における肝疾患の問題点。第 60 回日本肝臓学会総会、座長、熊本、2024 年 6 月 14 日

阿部友太郎、田中聡司、阪森亮太郎 : 高齢者における初発肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法の治療効果。第 60 回日本肝臓学会総会 WS7-6、熊本、2024 年 6 月 14 日

阿部友太郎、西村佑子、渡邊和具、中尾憲史、山下勇大、北川綾香、松島健祐、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、阪森亮太郎：肝動脈化学塞栓術後の肝予備能低下への C 型肝炎 SVR の関与。第 60 回日本肝癌研究会、WS1-3、姫路、2024 年 7 月 12 日

日浅陽一、榎本大、阪森亮太郎：WS12 ウイルス肝炎診療－今後の課題－。第 28 回日本肝臓学会大会、座長、神戸、2024 年 11 月 1 日

阿部友太郎、原田理史、阪森亮太郎：ウイルス性急性肝炎に対する抗ウイルス治療の現状。JDDW2024 W12-8 ウイルス肝炎診療－今後の課題－、神戸、2024 年 11 月 1 日

榊原祐子、山本俊祐、阪森亮太郎：HIV 感染者における尖圭コンジローマおよび肛門扁平上皮性腫瘍についての検討。第 21 回日本消化管学会総会学術集会、WS6-9、東京、2025 年 2 月 21 日

B-4

田畑優貴、疋田隼人、持田智、三木大樹、井戸章雄、榎本信幸、阪森亮太郎、竹原徹郎：C 型非代償性肝硬変における抗ウイルス治療後の食道胃静脈瘤悪化に関与する因子の検討。第 121 回日本内科学会講演会（2024 年）、一般演題 113、東京、2024 年 4 月 14 日

田中大地、榊原祐子、渡邊和具、宮崎愛理、原田理史、西村佑子、東浦玲意、上月美穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、三田英治：当院における潰瘍性大腸炎に対するフィルゴチニブの治療成績。第 110 回日本消化器病学会総会、ミニオーラル 潰瘍性大腸炎 4 MO-210、徳島、2024 年 5 月 10 日

前阪和城、疋田隼人、甲斐真知子、田畑優貴、小玉尚宏、大川和良、宮崎昌典、薬師神崇行、野崎泰俊、阪森亮太郎、松本健吾、石田永、金子晃、垣田成庸、巽智秀、竹原徹郎：切除不能肝細胞癌に対するアテゾリズマブ＋ベバシズマブ併用療法の治療効果における有害事象の影響。第 30 回日本肝がん分子標的治療研究会 OS4-2、東京、2024 年 7 月 26 日

宮崎愛理、福武伸康、阿部友太郎、阪森亮太郎、三田英治：LAMS 留置後に嚢胞内感染を来した PS への交換により臨床的奏功を得た臍仮性嚢胞の一例。第 55 回日本臍臓学会大会 O57-2、宇都宮、2024 年 7 月 26 日

鈴木英祐、榊原祐子、中尾憲史、渡邊和具、山下勇大、北川絢香、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎：末梢挿入型中心静脈カテーテルを留置中、左総頸静脈から鎖骨下静脈にかけ広範囲に血栓を認めたクローン病の一症例。第 78 回国立病院総合医学会、P1-57-5、大阪、2024 年 10 月 18 日

中尾憲史、榊原祐子、渡邊和具、山下勇大、北川綾香、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎：同時・異時性に鋸歯状病変を認め、大腸全摘術を要した潰瘍性大腸炎関連大腸腫瘍の2例。第15回日本炎症性腸疾患学会学術集会、O12-1、東京、2024年11月16日

榊原祐子、渡邊和具、田中大地、原田理史、宮崎愛理、東浦玲意、上月美穂、西村佑子、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、三田英治：過去のステロイド使用が炎症性腸疾患患者の骨密度に与える影響についての検討。第66回消化器病学会大会 消 P-128、神戸、2024年10月31日

Yamamoto S, Bhandari P, Parra-Blanco A, Takeuchi Y, Kanesaka T, Mottacki N, Harada S, Kozuki M, Higashiura R, Inoue T, Sakamori R, Mita E: Acetic acid for pretreatment evaluation of colorectal neoplasms. IP-66_E, International Poster Session 12 (JDDW) Lower GI-6, 神戸、2024年11月1日

廣岡昌史、山下竜也、竹原徹郎、相方 浩、葛谷貞二、池田公史、森口理久、山本紘司、加藤直也、阪森亮太郎、土谷 薫、平岡 淳、中野聖士、谷 丈二、永井英成、本村健太、海堀昌樹、森本 学、長谷川 潔、上嶋一臣：ELIXIR study Final Analysis: Real-World Efficacy and Safety of Atezolizumab + Bevacizumab in Japanese Patients with Unresectable HCC。第31回日本肝がん分子標的治療研究会、OS9-5、岡山、2025年1月17日

B-5

山本俊祐、松島健祐、榊原祐子、阪森亮太郎、三田英治：20mm以下の大腸粘膜下層浸潤癌における内視鏡切除についての検討。シンポジウム3、S3-09 第112回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、大阪、2024年6月29日

榊原祐子、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎：クローン病患者に対する小腸内視鏡検査におけるミダゾラム持続静注と塩酸ペチジン併用の有用性と安全性。シンポジウム1、S1-6、第113回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、大阪、2024年12月7日

山本俊祐、北川綾香、松島健祐、榊原祐子、阪森亮太郎：酢酸併用 NBI を用いた JNETtype1 病変の鑑別診断。ワークショップ1、W1-14。第113回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、大阪、2024年12月7日

B-6

西村佑子、田中聡司、永富暁、松島健祐、阿部友太郎、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、阪森亮太郎：食後心窩部痛とイレウスを繰り返した慢性腸管虚血の1例。日本内科学会第244回近畿地方会、京都、2024年6月29日

渡邊和具、山本俊祐、竹内洋司、田中大地、原田理史、宮崎愛理、西村佑子、東

浦玲意、上月美穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、
榊原祐子、阪森亮太郎、三田英治：逆流性食道炎から食道狭窄をきたし endoscopic
radial incision and cutting にて治療した一例。第 112 回日本消化器内視鏡学会近畿
支部例会、大阪、2024 年 6 月 29 日

B-8

阪森亮太郎：第 37 回 OLF（Osaka Liver Forum）研究発表会 座長、大阪、2024 年
5 月 24 日

阪森亮太郎：肝疾患の最新の話題～C 型肝炎から脂肪肝まで～。大阪市中心区東
医師会・法円坂地域連携フォーラム、大阪、2024 年 5 月 25 日

阪森亮太郎：第 59 回法円坂地域医療フォーラム 座長、大阪、2024 年 7 月 6 日

阪森亮太郎：第 6 回大阪消化器診療懇話会 座長、大阪、2024 年 7 月 20 日

阪森亮太郎：第 5 回近畿門脈圧亢進症研究会 座長、奈良、2024 年 8 月 24 日

阪森亮太郎：肝疾患領域のトレンドの変化。かかりつけ医のための肝疾患オンラ
インセミナー、Web、2024 年 9 月 17 日

阪森亮太郎：ランチョンセミナー18 座長。第 78 回国立病院総合医学会、大阪、
2024 年 10 月 19 日

阪森亮太郎：肝疾患診療の話題。第 19 回大阪消化器懇話会、大阪、2024 年 12 月
12 日

阪森亮太郎：ウイルス性肝疾患の現在地と今後の展望。かかりつけ医のための肝
疾患セミナー、大阪、2024 年 12 月 19 日

阪森亮太郎：第 63 回法円坂地域医療フォーラム 座長、大阪、2025 年 2 月 8 日

阪森亮太郎：膵癌治療の最前線。第 63 回法円坂地域医療フォーラム、大阪、2025
年 2 月 8 日

阪森亮太郎：法円坂 GI カンファレンス 座長、大阪+Web、2025 年 2 月 27 日

B-9

阪森亮太郎：第 2 回「アルコールはどこまで飲んでいいの?」。国立病院機構 大
阪医療センター 消化器内科がお送りする「肝炎消化器コンテンツ セカンド・シ
ーズン」、You Tube, 2024 年 11 月 19 日

阪森亮太郎：第 3 回「肝硬変ってどんな病気?」。国立病院機構 大阪医療センタ

ー 消化器内科がお送りする「肝炎消化器コンテンツ セカンド・シーズン」、You Tube, 2024 年 11 月 19 日

阪森亮太郎：第 4 回「肝がんの原因と予防は？」。国立病院機構 大阪医療センター 消化器内科がお送りする「肝炎消化器コンテンツ セカンド・シーズン」、You Tube, 2024 年 11 月 20 日

阪森亮太郎：第 6 回「膵がんは増えているの？」。国立病院機構 大阪医療センター 消化器内科がお送りする「肝炎消化器コンテンツ セカンド・シーズン」、You Tube, 2024 年 12 月 6 日

がん療法研究開発室

室長 平尾素宏

1981 年以降がんが日本人の死因のトップとなって久しい。国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、2019 年の年間がん罹患数は 99 万人を超え、2022 年のがんによる死亡者数は約 38 万 6 千人と報告されている。最近、がん免疫治療法が脚光を浴び、臨床の場において使用され、その評価が明らかになってきたが、すべてのがんの効果があるわけではなく、がんに対する有効な治療法の開発の重要性は依然変わっていない。

免疫治療を含め従来の多くのがん治療法の有効性は、症例ごと、施設ごとの経験から得られたものであり、多施設における大規模な臨床試験による治療効果の検証が必須となっている。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められている。さらに、発がん、増殖、転移といったがん自体やそれに伴う病態に関わる遺伝子や蛋白、糖鎖といった数多くの分子の異常が報告され、これらの分子の特徴や機能が新しいがんの診断法や治療に応用され、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。実際、2019 年よりがん遺伝子パネル

検査が保険診療可能となった。

本研究室では、このような最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しい癌治療法の開発を目的として、がん細胞やがん組織を用いた基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究（橋渡し研究、トランスレーショナルリサーチ）を行っている。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Hori K, Katada C, Okada H, Katagiri A, Matsuo Y, Yokoyama T, Yano T, Suzuki H, Shimizu Y, Furue Y, Nakanishi H, Koike T, Takizawa K, Hirao M, Yoshii T, Yamanouchi T, Kawakubo H, Kobayashi N, Shimoda T, Ochiai A, Ishikawa H, Yokoyama A, Muto M : Association between continuous cessation or reduction of drinking alcohol and improvement of multiple dysplastic lesions in patients with esophageal squamous cell carcinoma after endoscopic resection . 「Esophagus」 21 (1) : P 31 – 40、2024 年 1 月

Kawazoe A, Yamamoto N, Sugimoto N, Kawakami H, Oshima T, Yamaguchi K, Hino K, Hirao M, Kurokawa Y, Kawakami T, Tsuda M, Hara H, Kaname S, Matsuoka D, Otake Y, Yasuda K, Takase T, Takashima S, Semba T, Muro K : Phase II Study of the Liposomal Formulation of Eribulin (E7389-LF) in Combination with Nivolumab : Results from the Gastric Cancer Cohort . 「Clin Cancer Res」 30 (7) : P 1264 - 1272、2024 年 4 月

Tokunaga M, Machida N, Mizusawa J, Ito S, Yabusaki H, Hirao M, Watanabe M, Imamura H, Kinoshita T, Yasuda T, Hihara J, Fukuda H, Yoshikawa T, Boku N, Terashima M : Early endpoints of a randomized phase II trial of preoperative chemotherapy with S-1/CDDP with or without trastuzumab followed by surgery for HER2-positive resectable gastric or esophagogastric junction adenocarcinoma with extensive lymph node metastasis : Japan Clinical Oncology Group study JCOG1301C (Trigger Study). 「Gastric Cancer」 27 (3) : P 580 - 589、2024 年 5 月

Oshima T, Yamamoto S, Kawakami H, Makino T, Kawazoe A, Masuishi T, Tsushima T, Hirao M, Tsuda M, Hino K, Yamamoto N, Hara H, Kaname S, Matsuoka D, Otake Y, Yasuda K, Takase T, Takashima S, Semba T, Ooki A : Phase 1 b/2 study of the liposomal formulation of eribulin (E7389-LF). in combination with nivolumab: Results from the phase 2 esophageal cancer cohort. 「BJC report」 2024 年 9 月

Makino T, Nakai S, Momose K, Yamashita K, Tanaka K, Miyata H, Yamamoto S, Motoori M, Kimura Y, Ushimaru Y, Hirao M, Matsuyama J, Akamaru Y, Kurokawa Y, Eguchi H, Doki Y : Efficacy and survival of nivolumab treatment for recurrent/unresectable esophageal squamous-cell carcinoma: real-world clinical data from a large multi-institutional cohort. 「Esophagus」 21 (3) : P 319 - 327、2024 年 7 月

Shitara K, Muro K, Watanabe J, Yamazaki K, Ohori H, Shiozawa M, Takashima A, Yokota M, Makiyama A, Akazawa N, Ojima H, Yuasa Y, Miwa K, Yasui H, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Mori I, Yamanaka K, Hihara M, Soeda J, Misumi T, Yamamoto K, Yamashita R, Akagi K, Ochiai A, Uetake H, Tsuchihara K, Yoshino T : Baseline ctDNA gene alterations as a biomarker of survival after panitumumab and chemotherapy in metastatic colorectal cancer. 「Nature medicine」 30 (3) : P 730 - 739、2024 年 3 月

Oki E, Nakanishi R, Ando K, Takemasa I, Watanabe J, Matsubayashi N, Kato T, Kagawa Y, Kotaka M, Hirata K, Sugiyama M, Kusumoto T, Miyamoto Y, Toyosaki K, Kishimoto J, Kimura Y, Yoshizumi T, Nakamura Y : Recurrence monitoring using ctDNA in patients with metastatic colorectal cancer: COSMOS-CRC-03 and AURORA studies . 「Esmo」 3 : P 1 - 6、2024 年 3 月

Iida N, Imai M, Okamoto W, Kato T, Esaki T, Kato K, Komatsu Y, Yuki S, Masuishi T, Nishina T, Ebi H, Taniguchi H, Nonomura N, Sunakawa Y, Shiozawa M, Yamazaki K, Shogen Boku, Bando H, Shiraishi Y, Kobayashi M, Goto H, Sato A, Fujii S, Yoshino T, Nakamura Y : Novel ERBB2 Variant Potentially Associated with Resistance against Anti-HER2

Monoclonal Antibody–Based Therapy in ERBB2-Amplified Metastatic Colorectal Cancer .
「Clin Cancer Res.」 30 (18) : P 4167 - 4178、2024 年 9 月

Kusunoki C, Uemura M, Osaki M, Takiguchi N, Kitakaze M, Paku M, Sekido Y, Takeda M, Hata T, Hamabe A, Ogino T, Miyoshi N, Tei M, Kagawa Y, Kato T, Eguchi H, Doki Y :
Postoperative venous thromboembolism after surgery for locally recurrent rectal cancer.
「BMC Cancer」 24 (1) : P 1027 、2024 年 8 月

Sugimoto N, Noura S, Kato T, Yoshioka S, Hata T, Naito A, Tei M, Tamagawa H, Komori T, Ide Y, Fukuzaki T, Danno K, Sawada G, Kagawa Y, Shimokawa T, Miyoshi N, Ogino T, Uemura M, Yamamoto H, Murata K, Doki Y, Eguchi H : The Efficacy of FOLFIRI Plus Ramucirumab in Recurrent Colorectal Cancer Refractory to Adjuvant Chemotherapy with Oxaliplatin/Fluoropyrimidine—Including Biomarker Analyses . 「Cancers」 17 (1) : P 91、2024 年 12 月

Takeno A, Motoori M, Kishi K, Omori T, Hirao M, Masuzawa T, Fujitani K, Yamamoto K, Kurokawa Y, Doki Y : Prognostic factors of conversion surgery for stage IV gastric cancer: A multi-institutional retrospective analysis. 「AG Surg」 8 (3) : P 431 - 442、2024 年 1 月

Saito T, Kurokawa Y, Fujitani K, Kawabata R, Takeno A, Mikami J, Endo S, Matsuyama J, Akamaru Y, Hirota M, Kishi K, Urakawa S, Yamamoto K, Tanaka K, Takahashi T, Oka M, Wada H, Eguchi H, Doki Y : Serum NY-ESO-1 antibody as a predictive biomarker for postoperative recurrence of gastric cancer : a multicenter prospective observational study . 「British Journal of Cancer」 130 (7) : P 1157 - 1165、2024 年 4 月

Sunagawa Y, Sakamoto Y, Kawabata R, Ishiguro A, Akamaru Y, Kito Y, Takahashi M, Matsuyama J, Yabusaki H, Makiyama A, Suzuki T, Tsuda M, Yasui H, Hihara J, Takeno A, Inoue E, Ichikawa W, Fujii M. : Tumor Response Predicts Survival Time of Nivolumab Monotherapy for Advanced Gastric Cancer: A Subgroup Analysis of the DELIVER Trial (JACCRO GC-08). 「Oncologist.」 29 (8) : P 997 - 1002、2024 年 8 月

Hori S, Yamasaki M, Yamamoto N, Harino T, Momose K, Yamashita K, Tanaka K, Sugimura K, Makino T, Takeno A, Shiraishi O, Motoori M, Miyata H, Kimura Y, Hirao M, Yasuda T, Yano M, Doki Y : The impact of time to postoperative recurrence on the prognosis of patients with esophageal cancer post recurrence: exploratory analysis of OGSF 1003. 「Esophagus.」 21 (4) : P 472 - 483、2024 年 10 月

Omori T, Yamamoto K, Kurokawa Y, Miyazaki Y, Fujitani K, Kawabata R, Imamura H, Takeno A, Yanagimoto Y, Takahashi T, Saito T, Eguchi H, Doki Y : Long-Term Effects of Oral Nutritional Supplements After Gastrectomy for Gastric Cancer: A Survival Analysis from a Multicenter, Open-Label, Randomized Controlled Trial. 「Ann Surg Oncol.」 31 (10) : P 6909 - 6917、2024 年 10 月

Motoori M, Kishi K, Yamamoto K, Takeno A, Hara H, Murakami K, Hamakawa T, Nakahara Y, Masuzawa T, Omori T, Kurokawa Y, Fujitani K, Doki Y : Prognostic factors and significance of postoperative adjuvant chemotherapy in patients with advanced gastric cancer undergoing neoadjuvant chemotherapy followed by gastrectomy. 「Surgery Today」 54 (11) : P 1379 - 1387、2024 年 11 月

Fujitani K, Kurokawa Y, Wada R, Takeno A, Kawabata R, Omori T, Imamura H, Hirao M, Endo S, Kawada J, Jeong Ho Moon, Takiguchi S, Mori M, Eguchi H, Doki Y : Prospective single-arm multicenter interventional study of surgical resection for liver metastasis from gastric cancer; 3-year overall and recurrence-free survival . 「European Journal of Cancer(E-Pub)」 213 (115080), 2024 年 12 月

Takahashi M, Osako T, Yasojima H, Inoue K, Kawashima M, Maeda H, Ichikawa A, Muramatsu Y, Masuda N : Overall survival in Japanese patients with ER+/HER2- advanced breast cancer treated with first-line palbociclib plus letrozole. 「Breast Cancer」 31 (1) : P 53 - 62、2024 年 1 月

Nishimura T, Ravi Velaga, Masuda N, Kawaguchi K, Kawaguchi S, Takada M, Maeshima Y, Tanaka S, Kikawa Y, Kadoya T, Bando H, Nakamura R, Yamamoto Y, Ueno T, Yasojima H, Ishiguro H, Morita S, Ohno S, Haga H, Matsuda F, Ogawa S, Toi M : Genomic and transcriptomic profiling of pre-and postneoadjuvant chemotherapy triple negative breast cancer tumors. 「Cancer Science 」 115 (12) : P 3928 - 3942、2024 年 12 月

Takano T, Masuda N, Ito M, Inoue K, Tanabe Y, Kawaguchi K, Yasojima H, Bando H, Nakamura R, Yamanaka T, Ishida K, Aruga T, Yanagita Y, Tokunaga E, Aogi K, Ohno S, Kasai H, Kataoka R.T, Morita S, Toi M : Long-term outcomes of neoadjuvant trastuzumab emtansine + pertuzumab (T-DM1 + P) and docetaxel + carboplatin + trastuzumab + pertuzumab (TCbHP) for HER2-positive primary breast cancer: results of the randomized phase 2 JBCRG20 study (Neo-peaks) . 「Breast Cancer Res Treat」 207 (1) : P 33 - 48、2024 年 8 月

Yoshinami T, Nagai S, Hattori M, Okamura T, Watanabe K, Nakayama T, Masuda H, Tsuneizumi M, Takabatake D, Harao M, Yoshino H, Mori N, Yasojima H, Oshiro C, Iwase M, Yamaguchi M, Sangai T, Kosaka N, Tajima K, Masuda N : Real-world progression-free survival and overall survival of palbociclib plus endocrine therapy (ET) in Japanese patients with hormone receptor-positive/human epidermal growth factor receptor 2-negative advanced breast cancer in the first-line or second-line setting: an observational study. 「Breast Cancer」 31 (4) : P 621 - 632、2024 年 7 月

Noguchi E, Yamanaka T, Mukai H, Yamamoto N, Chi-Feng Chung, Yen-Shen Lu, Dwan-Ying Chang, Joohyuk Sohn, GunMinKim, Kyung-Hun Lee, Soo-Chin Lee, Iwasa T, Iwata H, Watanabe K, Kyung Hae Jung, Tanabe Y, Seok Yun Kang, Yasojima H, Aogi K, Tokunaga E, Sung Hoon Sim, Yoon Sim Yap, Matsumoto K, Ling-Ming Tseng, Umeyama Y, Sudo K,

Kojima Y, Hata T, Kuchiba A, Shibata T, Nakamura K, Fujiwara Y, Tamura K, Yonemori K : A phase 3 study (PATHWAY) of palbociclib plus tamoxifen in patients with HRpositive/HER2-negative advanced breast cancer. 「NPJ breast cancer」 10 (1) : P 76、2024 年 8 月

Fujiyoshi K, Sudo T, Fujita F, Tanihara S, Ishida H, Shichijo S, Chino A, Nagasaski T, Takao A, Sasaki K, Akagi K, Matsubara T, Ueno H, Hirata K, Miyakura Y, Ishikawa T, Sunami E, Takahashi Y, Yamaguchi T, Tanakaya K, Tomita N, Ajioka Y : Marital status after colorectal surgery in familial adenomatous polyposis: a nationwide multicenter study in Japan . 「Int J Clin Oncol」 29 (9) : P 1274 - 1283、2024 年 9 月

Nakamura Y, Tsukada Y, Matsushashi N, Murano T, Shiozawa M, Takahashi Y, Oki E, Goto M, Kagawa Y, Kanazawa A, Ohta T, Ouchi A, Bando H, Uchigata H, Notake C, Ikematsu H, Yoshino T : Colorectal Cancer Recurrence Prediction Using a Tissue-Free Epigenomic Minimal Residual Disease Assay. 「Clin Cancer Res」 30 (19) : P 4377 - 4387、2024 年 10 月

Yamamoto M, Takeno A, Hamakawa T, Tokuyama S, Toshiyama R, Kawai K, Takahashi Y, Sakai K, Hama N, Gotoh K, Kato T, Hirao M : Distal gastrectomy and Roux-en-Y reconstruction for refractory reflux esophagitis after proximal gastrectomy and esophagogastric anastomosis reconstruction. 「Surgery Today」 54 (11) : P 1414 - 1416、2024 年 11 月

Yamamoto M, Omori T, Masuike Y, Shinno N, Hara H, Sugase T, Kanemura T, Takeno A, Hirao M, Miyata H : Minimally invasive surgery versus open gastrectomy for older patients with gastric cancer: A propensity score-matching analysis. 「Ann Gastroenterol Surg」 9 (1) : P 69 - 78、2024 年 7 月

Yamamoto M, Takeno A, Toshiyama R, Tokuyama S, Kawai K, Takahashi Y, Sakai K, Hama N, Kato T, Hirao M : Laparoscopic transabdominal preperitoneal repair for a patient with Laugier's and inguinal hernia. 「Surgical Case Reports」 10 (1) : P 215 、2024 年 9 月

Matsui Y, Kanou T, Fukui E, Kimura T, Ose N, Funaki S, Shintani Y: Association of the psoas muscle index with the survival of patients on a waiting list for lung transplantation: a Japanese single-institution study. 「Surgery Today」 54 (6) : P 574 - 580、2024 年 6 月

Matsui Y, Takami K, Mori K, Hirose Y : The diagnosis of pulmonary carcinoid using intraoperative fine-needle aspiration cytology : A case report . 「Int J Surg Case Rep」 P Nov:124 : 110428、2024 年 10 月(Epub)

Matsui Y, Takami K: Lung cancer associated with partial anomalous pulmonary venous connection in the non-resected lobe: A case report.「Int J Surg Case Rep」 P Nov:124:110454、2024 年 10 月(Epub)

Koba M, Takeno A, Hasegawa H, Sakamori R, Higashiura R, Yamamoto M, Tokuyama S, Toshiyama R, Kawai K, Takahashi Y, Sakai K, Hama N, Gotoh K, Kato T, Hirose Y, Mori K, Mano M, Hirao M : An aggressive gastric CIC-DUX4 sarcoma surgically resected with multivisceral organs:a case report . 「Surgical Case Reports」 10 (1) : P 241、2024 年 10 月

A-2

加藤健志 : II各論 M 抗 VEGF 抗体薬併用療法「大腸癌薬物療法ハンドブック」 : P. 115 - 124、南江堂、2024 年 12 月 20 日

加藤健志 : 第II章レジメン別プロのコツ 2 大腸がん 一〜二次治療 ⑦FOLFOXIRI or CAPOXIRI + BEV「消化器がん薬物療法副作用マネジメント」 P. 107 -112、メディカルビュー社、2025 年 1 月

A-3

平尾素宏 : 医療安全の文化醸成のための当院の取り組み「医療」79 (2) : P. 19 - 23、2025 年 2 月

安井翔之介、浜川卓也、河部彩香、関舞、宮城正和、梅津匡宏、竹野 淳、荒川和子、和田紋佳、石田みどり、大土彩子、山本真弓、内川巖志、内藤裕子、石田永、平尾素宏 : 癌患者に対する NST 早期介入の意義に関する検討「癌と化学療法」51 (7) : P. 775 - 778、2024 年 7 月

関根知嘉子、長谷川友美、相木佐代、巽 啓司、平尾素宏 : 終末期がん患者の療養場所移行調整の現状と調整中止となる要因に関する後方視的検討 第 30 回日本がんチーム医療研究会「癌と化学療法」51 (9) : P. 919 - 923、2024 年 9 月

加藤健志 : 大腸癌治療ガイドライン 2024 術後補助化学療法 (stage II,III)「臨床外科」79 (9) : P. 980 - 985、2024 年 9 月

竹野 淳、山本昌明、平尾素宏 : 腹部救急疾患への対応 : 診断と治療の実際 1. 食道破裂「外科」87 (3) : P. 201 - 205、2025 年 3 月

八十島宏行 : 断端評価基準とその臨床的意義〜病変 mapping の有用性「日本臨牀増刊号乳癌学 2024 上」82 (6) : P. 197 - 201、2024 年 8 月

浜川卓也、西田謙太郎、赤丸祐介、竹野 淳、平尾素宏 : 手術手技 困難症例 (肥満症例、進行胃癌) に対する腹腔鏡下胃切除術におけるガーゼテーピング法 「手術」78 (3) : P. 371 - 375、2024 年 12 月

豊後雅史、高橋佑典、森 清、徳山信嗣、河合賢二、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志 : 非代償性肝硬変を合併する大腸癌症例に対して腹

腔鏡下大腸手術を行った 2 例 「日本消化器外科学会雑誌」 58 (1) : P. 65 -74、
2025 年 12 月

萩原佳菜、河合賢二、徳山信嗣、山本昌明、酒井健司、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健
志：下行結腸穿孔をきたした血管型 Ehlers-Danlos 症候群の 1 例「日本腹部救急医学
会雑誌」 44 (1) : P. 61 - 64、2024 年 12 月

宮崎道彦、山田真美、田中玲子：慢性便秘症（便排出障害）に対する排便造影検査に
-おける形態異常の検討「日本大腸肛門病会」 77 : P. 22 - 29、2024 年 4 月

B-2

Nakamura Y, Wantanabe J, Hirata K, Akazawa N, Kataoka K, Yokota M, Yamazaki K, Kato
K, Kotaka M, Kagawa Y, Kun-Huei Yeh, Vasily N. Aushev, Adham A Jurdi, Kotani D, Bando
H, Taniguchi H, Takemasa I, Kato T, Oki E, Yoshino T : Prognostic and predictive value of
ctDNA-based MRD and actionable biomarkers in patients with resectable colorectal cancer:
CIRCULATE-Japan GALAXY . ASCO2024 , Chicago USA , 2024 年 6 月 1 日

Hashimoto T, Nakamura Y, Yan Yang, Francesca Battaglin, Federico Innocenti, Alan P.
Venook, Makiyama A, Boku S, Machida N, Takahashi N, Kadowaki S, Komatsu Y, Kudo T,
Oki E, Kato T, Kagawa Y, Fujisawa T, Bando H, Heinz-Josef Lenz, Yoshino T : Prognostic
impact of HER family expressions for metastatic colorectal cancer (mCRC) : SCRUM-Japan
MONSTAR-SCREEN-2 and CALGB/SWOG 80405 trial (Alliance) international
collaboration. ASCO2024 , Chicago USA , 2024 年 6 月 1 日

Miyagaki H, Goto M, Endo S, Tanaka R, Omori T, Kawada J, Takahashi N, Masuzawa T,
Furukawa H, Sato Y, Kato T, Fujitani K, Kawakami H, Sakai D, Kurokawa Y, Tsujinaka T,
Shimokawa T, Satoh T : Neoadjuvant docetaxel, oxaliplatin, and S-1 plus surgery followed
by adjuvant docetaxel and S-1 for patients with large type 3 or type 4 gastric cancer: Short-
term outcomes of the phase II OGSG1902 trial . ASCO2024 , Chicago USA , 2024 年 6 月 1
日

Uetake H, Yamashita R, Shitara K, Yoshino T, Watanabe J, Yasui H, Ohori H, Shiozawa M,
Muro K, Yamazaki K, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Soeda J, Yamamoto K,
Akagi K, Ochiai A, Tsuchihara K : Acquired gene alteration patterns and post-progression
survival: PARADIGM study analysis. ASCO2024 , Chicago USA , 2024 年 6 月 1 日

Imai M, Jinyeong Lim, Iida N, Ebi H, Okamoto W, Kato T, Esaki T, Kato K, Komatsu Y,
Yuki S, Masuishi T, Nishina T, Sato A, Yamashita R, Fujii S, Yoshino T, Woong-Yang Park,
Nakamura Y : Deciphering tumor microenvironment dynamics in HER2-amplified refractory
metastatic colorectal cancer in the TRIUMPH trial. ASCO2024 , Chicago USA , 2024 年 6
月 1 日

Kagawa Y, Kato T, Shiozawa M, Yamaguchi K, Gotoh M, Yasui H, Hamaguchi T, Hara H, Yoshino T : Safety, efficacy, and biomarkers of ONO-4578, an EP4 antagonist, in combination with nivolumab and chemotherapy in treatment-naïve and proficient mismatch repair (pMMR)/microsatellite stable (MSS) metastatic colorectal cancer (mCRC). ESMO-GI2024 , Munich,Germany , 2024 年 6 月 1 日

Imai M, Bando H, Tsukada Y, Inamori K, Kato T, Komatsu Y, Uemura M, Yuki S, Taketomi A, Fujisawa T, Nakamura Y, Kojima M, Koyama S, Sanghoon Song , Chan-Young Ock , Nishikawa H, Ito M, Yoshino T : Correlation of enriched specific subset of immune cells nearby tumor associated macrophage (TAM)with pathologic complete response (pCR) of concurrent chemoradiotherapy followed by nivolumab inlocally advanced rectal cancer (LARC). 2024 ASCO Breakthrough , Yokohama , 2024 年 8 月 8 日

Ando K, Watanabe J, Kagawa Y, Bando H, Kotani D, Suwa Y, Nishizawa Y, Takahashi Y, Matsushashi N, Suwa H, Sugiyama M, Kanemitsu Y, Oki E, Uemura M, Yokota M, Tsuboyama T, Oba K, Yoshino T, Kato T : Protocol amendment for ENSEMBLE study: A multicenter, randomized, phase III trial to test thesuperiority of consolidation irinotecan, capecitabine and oxaliplatin vs capecitabine and oxaliplatinfollowing short course radiotherapy as total neoadjuvant therapy in patients with locally advancedrectal cancer— Changing the irinotecan dosage . 2024 ASCO Breakthrough , Yokohama , 2024 年 8 月 8 日

Nagata J, Nakamura Y, Watanabe J, Akazawa N, Ikeda M, Yokota M, Kato K, Kotaka M, Yamazaki K, Kagawa Y, K. Yeh, G. Lalotis, A. Jurdi, Kotani D, Bando H, Taniguchi H, Takemasa I, Kato T, Yoshino T, Oki E Author : Association of ctDNA-based MRD detection and MRD clearance with short-term overall survival in patients with resectable colorectal cancer: Updated analysis of CIRCULATE-Japan GALAXY . ESMO Congress2024 , Barcelona,Spain , 2024 年 9 月 14 日

Nakamura Y, Kildal W, Misumi T, M. Pradhan , Watanabe J, Skrede O. Kotani D, S.D. Raedt , Bando H, J. Kalsnes , Taniguchi H, K. Liestøl , Takemasa I, T.S. Hveem , Kato T, M. Novelli , Oki E, D.J. Kerr, Yoshino T, A. Kleppe : Novel clinical decision support (CDS) system optimizing adjuvant chemotherapy (ACT) for colorectal cancer (CRC) by integrating deep learning and circulating tumor DNA (ctDNA) molecular residual disease (MRD):GALAXY histotyping . ESMO Congress2024 , Barcelona,Spain , 2024 年 9 月 14 日

Harima T, Yamashita R, Nakamura Y, Sakai S, Nomura R, Saori M, Kotani D, Taniguchi H, Watanabe J, Takemasa I, Kato T, Oki E, Yoshizumi T, Yoshino T : Association between copy number aberration and ctDNA MRD in colorectal cancer: CIRCULATE-Japan GALAXY . ESMO Congress2024 , Barcelona,Spain , 2024 年 9 月 14 日

Kataoka K, Mori K, Nakamura Y, Watanabe J, Hirata K, Akazawa N, Yokota M, Kato K, Kotaka M, Yamazaki K, Kagawa Y, Sharma S, A. Jurdi , Kotani D, Bando H, TaniguchiH, Takemasa I, Kato T, Yoshino T, Oki E : Survival benefit of adjuvant

chemotherapy based on molecular residual disease detection in resected colorectal liver metastases: Subgroup analysis from CIRCULATEJapan GALAXY . ESMO Congress2024 , Barcelona,Spain , 2024 年 9 月 14 日

B-3

本告正明、田中晃司、宮田博志、白石 治、山崎 誠、杉村啓二郎、竹野 淳、木村 豊、菅生貴仁、金村剛志、平尾素宏、山下公太郎、百瀬洸太、牧野知紀、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎、百瀬洸太：術前治療で Grade 3 の病理組織学的効果の得られた食道癌症例の予後因子解析。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

白石 治、萩 隆臣、牧野知紀、田中晃司、宮田博志、菅生貴仁、本告正明、山崎 誠、杉村啓二郎、竹野 淳、平尾素宏、木村 豊、矢野雅彦、土岐祐一郎、安田卓司：術前化学療法之恩恵：NAC 後の ypN0 と手術先行の pN0 は同じですか？。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 19 日

藤谷和正、黒川幸典、竹野 淳、川端良平、大森 健、今村博司、平尾素宏、遠藤俊治、和田遼平、土岐祐一郎：胃癌肝転移に対する外科切除に関する前向き多施設臨床試験：3 年全生存割合と無再発生存割合。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

加藤健志：PARADIGM 試験 Up-to-date。第 124 回日本外科学会定期学術集会モーニングセミナー1、常滑市、2024 年 4 月 19 日

小林 信、高本健史、塩見明生、高橋 遍、塩澤 学、清水泰博、賀川義規、信岡大輔、山内淳一郎、加藤健志、沖 英次、武富紹信、高橋 祐、夏目壮一郎、仁熊健文、中村能章：Survival and benefit of adjuvant chemotherapy (ACT) by circulating tumor DNA (ctDNA) -based genomicprofile and molecular residual disease (MRD) in resectable colorectal liver-limited metastases (CRLM) : PRECISION study。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

賀川義規、渡邊 純、安藤幸滋、植村 守、伊藤雅昭、上原 圭、小谷大輔、坂東英明、大庭幸治、加藤健志、竹政伊知朗、沖 英次、吉野孝之：局所進行直腸癌に対する TNT の効果予測 AI モデルの構築によるプレシジョン医療への展望。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

楠 誓子、植村 守、竹田充伸、関戸悠紀、波多 豪、浜部敦史、荻野崇之、三吉範克、加藤健志、江口英利、土岐祐一郎：進行・再発直腸癌に対する骨盤内拡大手術におけるロボット手術の現状。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 20 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、徳山信嗣、松井優紀、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：胆嚢癌の進行度に応じた腹腔鏡下根

治切除の適応について。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 20 日

Gotoh K, Sakai K, Toshiyama R: Treatment strategies for elderly pancreatic cancer patients。第 36 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、広島、2024 年 6 月 28 日

竹野 淳、木村 豊、杉本直俊、遠藤俊治、川端良平、松山 仁、今野元博、田村茂行、中村将人、竹下宏樹、朴 将源、坂井大介、川上尚人、黒川幸典、下川敏雄、佐藤太郎：高度リンパ節転移を伴う進行胃癌に対する周術期カペシタビン＋オキサリプラチン（CapeOx）療法の第 II 相試験（OGSG1701）。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 20 日

本告正明、田中晃司、宮田博志、白石 治、山崎 誠、杉村啓二郎、竹野 淳、木村 豊、菅生貴仁、金村剛志、平尾素宏、山下公太郎、百瀬洗太、牧野知紀、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎、百瀬洗太：術前治療で Grade 3 の病理組織学的効果の得られた食道癌症例の予後因子解析。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

白石 治、萩 隆臣、牧野知紀、田中晃司、宮田博志、菅生貴仁、本告正明、山崎誠、杉村啓二郎、竹野 淳、平尾素宏、木村 豊、矢野雅彦、土岐祐一郎、安田卓司：術前化学療法之恩恵：NAC 後の ypN0 と手術先行の pN0 は同じですか？。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 19 日

白石 治、杉村啓二郎、牧野知紀、宮田博志、竹野 淳、本告正明、山崎 誠、平尾素宏、矢野雅彦、土岐祐一郎、安田卓司：cT4b 食道癌に対する初期治療は？ CRT or DCF ～多施設ランダム化臨床試験～。第 78 回日本食道学会学術集会、東京、2024 年 7 月 5 日

竹野 淳、山本昌明、平尾素宏、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志：進行胃癌に対するロボット支援下手術の短期成績。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 19 日

藤谷和正、黒川幸典、竹野 淳、川端良平、大森 健、今村博司、平尾素宏、遠藤俊治、和田遼平、土岐祐一郎：胃癌肝転移に対する外科切除に関する前向き多施設臨床試験：3 年全生存割合と無再発生存割合。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

八十島宏行、増田慎三、大佐古智文、井上賢一、川島雅央、前田豪樹、伊藤充矢、相良安昭、米盛 勸、服部正也、山本尚人、松井暁子、村松泰明、高橋将人：HR+/HER2- 進行乳癌一次治療におけるパルボシクリブの国内第 2 相追跡試験。第 62 回日本癌治療学会学術集会、福岡、2024 年 10 月 25 日

植村 守、波多 豪、諏訪雄亮、沼田正勝、西沢佑次郎、井上 彬、塚田祐一郎、伊藤雅昭、高橋佑典、松橋延壽、諏訪宏和、安藤幸滋、賀川義規、渡邊 純、加藤健志：日本における局所進行直腸癌に対する TNT を検証する第 III 相試験 ENSEMBLE 試験。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 5 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、赤澤 香、松井優紀、俊山礼志、河合賢二、岡田公美子、高橋佑典、酒井健司、八十島宏行、後藤邦仁、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：高齢者胃癌患者の術後合併症リスク因子についての検討。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：HIV 陽性急性虫垂炎に対する緊急手術の短期成績についての検討。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 20 日

B-4

高見康二、松井優紀：胸腺上皮性腫瘍に対する当院の治療戦略と成績。第 41 回日本呼吸器外科学会学術集会、軽井沢、2024 年 6 月 1 日

山本和義、大森 健、黒川幸典、宮崎安弘、藤谷和正、川端良平、今村博司、平尾素宏、西塔拓郎、高橋 剛、牧野知紀、田中晃司、山下公太郎、百瀬洸太、江口英利、土岐祐一郎：胃癌術後 ONS 投与のランダム化比較試験予後解析。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

牧野知紀、杉村啓二郎、百瀬洸太、山下公太郎、田中晃司、白石 治、本告正明、山崎誠、宮田博志、平尾素宏、安田卓司、矢野雅彦、江口英利、土岐祐一郎：われわれの考える cT3br, T4 食道癌の至適導入療法および予後予測因子。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 19 日

本告正明、青山修宇、山崎誠、平尾素宏、宮田博志、白石 治、牧野知紀、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎：食道癌術前化学療法中の体重減少が術後感染性合併症と予後におよぼす影響について。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

加藤健志、山口研成、杉原健一、坂田英典、桑原美怜、飯田 修、山中彩菜、井上智晶、吉野孝之：BRAFV600E 変異切除不能大腸癌に対する NCO/BINI/CET の特定使用成績調査：中間報告。第 62 回日本癌治療学会学術集会、福岡、2024 年 10 月 18 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、徳山信嗣、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：局所進行膵癌に対する動門脈合併膵切除術において如何に臓器の虚血性障害を回避するか？。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 18 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志：切除不能局所進行膵癌に対する conversion surgery の検討。第 55 回日本膵臓学会大会、宇都宮、2024 年 7 月 25 日

西川和宏、川端良平、西川和宏、川瀬朋乃、川田純司、木村 豊、鹿島康薫、上田修吾、竹野 淳、下村一景、今村博司：がん悪液質を伴う進行再発胃癌の一次化学療法に対する エイコサペンタエン酸強化経口栄養剤補助の有用性に関する第 II 相試験。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 20 日

田澤宏文、羽藤慎二、大塚眞哉、竹野 淳、豊田和広、森谷宏光、野崎功雄、田中屋宏爾、内山秀昭、斎藤彰久、倉岡和矢、加藤健志、吉野茂文、鈴木崇久、田代裕尊：胃がん術後の予後因子の解析：Transmembrane protease serine 4 (TMPRSS4) のバイオマーカーとしての有用性の検証（多施設共同研究）。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

竹野 淳、平尾素宏、山本昌明、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志：食道癌術後再発症例に対する治療成績。第 78 回日本食道学会学術集会、東京、2024 年 7 月 4 日

竹野 淳、山本昌明、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：胃癌 1 次治療におけるニボルマブ併用化学療法の効果に関する因子の検討。第 62 回日本癌治療学会学術集会、福岡、2024 年 10 月 25 日

本居正明、杉村啓二郎、宮田博志、山崎誠、牧野知紀、白石 治、平尾素宏、竹野 淳、田中晃司、山下公太郎、百瀬洸太、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎：食道癌におけるコンバージョン手術～隣接臓器浸潤と遠隔転移～。第 62 回日本癌治療学会学術集会、福岡、2024 年 10 月 24 日

竹野 淳、徳永正則、町田 望、梶川莉玖、三留典子、會澤雅樹、佐藤真輔、木下敬弘、安田篤、川瀬朋乃、加納幹浩、黒川幸典、朴 成和、吉川貴己、寺島雅典：高度リンパ節転移を有する HER2 陽性胃癌に対する術前 trastuzumab 併用療法の第 II 相試験（JCOG1301C）。第 97 回日本胃癌学会総会、名古屋、2025 年 3 月 13 日

安福 至、寺島雅典、高橋直樹、朴 成和、黒川幸典、藤林勢世、松橋延壽、大森 健、伊藤友一、石田道弘、山形幸徳、山田貴允、西塔拓郎、竹野 淳、佐藤 渉、杉村啓二郎、吉川貴己：診断時切除不能胃癌に対する conversion surgery の治療成績に関する多施設共同観察研究。第 97 回日本胃癌学会総会、名古屋、2025 年 3 月 13 日

西川和宏、川端良平、川瀬朋乃、川田純司、木村 豊、鹿島康薫、上田修吾、竹野 淳、下村一景、今村博司：胃癌一次化学療法症例においてエイコサペンタエン酸強化栄養剤補助により栄養指標やがん悪液質は改善するか。第 97 回日本胃癌学会総会 名古屋、2025 年 3 月 13 日

松山 仁、柳本喜智、辻仲利政、益澤 徹、本告正明、今村博司、井上健太郎、上田修吾、出村公一、竹野 淳、高山治、永井健一、足立真一、大森 健、川端良平、川田純司、西川和宏、黒川幸典、下川敏雄、佐藤太郎：胃癌術後 S-1 補助化療患者に対する成分栄養剤のアドヒアランスと予後との関連－OGSG1108 追加観察研究。第 97 回日本胃癌学会総会、名古屋、2025 年 3 月 13 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、今西涼華、徳山信嗣、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：当院における急性胆管炎併存胆嚢炎に対する早期胆嚢摘出術。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：閉塞性膵炎を合併した膵管内乳頭粘液性腺癌に対して根治切除を施行した 1 例。第 46 回日本癌局所療法研究会、長浜、2024 年 6 月 21 日

Sakai K, Gotoh K, Imanishi S, Toshiyama R：Surgical outcomes of Resected cases of Primary Duodenal cancer at Our Hospital。第 36 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、広島、2024 年 6 月 20 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：当院における局所進行直腸癌に対する術前治療および手術療法の短期成績。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 19 日

横田 満、坪山尚寛、井上明星、渡邊 純、賀川義規、沖田憲司、高橋佑典、小倉淳司、安藤幸滋、中西良太、沼田正勝、波多 豪、三代雅明、吉野孝之、加藤健志：TNT 後の効果判定の標準化に向けた取り組み -ENSEMBLE 試験-。第 86 回日本臨床外科学会学術集会、宇都宮、2024 年 11 月 21 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：ロボット支援腹腔鏡下 S 状結腸切除/前方切除術におけるハーモニック ACE インストゥルメントおよび腹腔鏡手術用ステイプラーの有用性。第 79 回日本大腸肛門病学会学術集会、横浜、2024 年 11 月 29 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：当院での大腸癌手術における安全性に留意したエネルギーデバイス選択。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 5 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：当院における術前治療後直腸癌に対する手術の工夫と短期成績。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 6 日

河合賢二、徳山信嗣、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：脾彎曲部結腸癌に対するロボット支援下手術。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

河合賢二、徳山信嗣、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：cT4b 結腸癌に対するロボット支援腹腔鏡下手術の短期成績。第 79 回日本大腸肛門病学会学術集会、横浜、2024 年 11 月 29 日

河合賢二、徳山信嗣、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：ロボット支援下手術を行った回結腸静脈が空腸動脈に流入する解剖学的変異を伴う上行結腸癌の 1 例。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 6 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：食道胃接合部癌に対する至適縦隔リンパ節郭清についての検討。第 78 回日本食道学会学術集会、東京、2024 年 7 月 5 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：実臨床における胃がんに対する DS 療法の完遂率に影響を及ぼす因子。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 18 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、松井優紀、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱 直樹、加藤健志、高見康二、平尾素宏：日常生活自立度を用いた高齢胃がん患者の新たな予後予測の有用性。第 62 回日本癌治療学会学術集会、福岡、2024 年 10 月 25 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、松井優紀、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱 直樹、加藤健志、高見康二、平尾素宏：特発性食道破裂に対する胸腔鏡下食道破裂部閉鎖についての検討。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 12 日

山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：胃癌術後晩期再発の検討。第 97 回日本胃癌学会総会、名古屋、2025 年 3 月 14 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、徳山信嗣、松井優紀、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：85 歳以上の超高齢者急性胆嚢炎に対する緊急腹腔鏡下胆嚢摘出術症例の検討。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 18 日

Toshiyama R, Sakai K, Gotoh K : A case of anomaly of middle hepatic artery in laparoscopic cholecystectomy. 第 36 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、広島、2024 年 6 月 29 日

俊山礼志、濱 直樹、酒井健司、徳山信嗣、松井優紀、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：plug 除去後に腹腔鏡下ヘルニア修復術(TAPP)を施行した大腿ヘルニアの 1 例。第 37 回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024 年 12 月 6 日

松井優紀、高見康二、森 清：肺大細胞神経内分泌癌 (LCNEC) 切除症例の臨床的検討。第 41 回日本呼吸器外科学会学術集会、軽井沢、2024 年 6 月 1 日

松井優紀、高見康二：栄養指標や肺年齢を含めた術前因子による高齢者肺癌外科切除例の術後合併症発生と予後予測の検討。第 65 回日本肺癌学会学術集会、横浜、2024 年 10 月 31 日

徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：当院における MSI-H/dMMR 大腸癌の臨床病理学的特徴。第 101 回大腸癌研究会学術集会、名古屋、2024 年 7 月 12 日

徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：複雑性虫垂炎に対する緊急手術における術後合併症リスク因子の検討。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：免疫チェックポイント阻害剤にて臨床的完全奏功を得られた MSI-high 大腸癌巨大腹壁再発の一例。第 79 回日本大腸肛門病学会学術集会、横浜、2024 年 11 月 30 日

徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：局所進行直腸癌における RAS 遺伝子変異と術前治療効果および予後との関連性の検討。第 102 回大腸癌研究会学術集会、別府、2025 年 1 月 30 日

阿部 優、高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、松井優紀、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：虫垂が絞扼帯となり生じた絞扼性腸閉塞の 1 例。第 124 回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024 年 4 月 19 日

阿部 優、高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、松井優紀、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：肛門外脱出嵌頓を伴う直腸 S 状部癌重積症に対し反転法にて切除した 1 例。第 46 回日本癌局所療法研究会、長浜、2024 年 6 月 21 日

阿部 優、俊山礼志、酒井健司、濱 直樹、徳山信嗣、松井優紀、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、宮崎道彦、高見康二、加藤健志、平尾素宏：単径部に膿瘍形成

を伴った魚骨穿通・急性虫垂炎の1例。第86回日本臨床外科学会学術集会、宇都宮、2024年11月21日

阿部 優、高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、松井優紀、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：肛門外脱出嵌頓を伴う直腸S状部癌重積症に対し反転法を併用し根治切除した1例。第37回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024年12月7日

今西涼華、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、松井優紀、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：当院における高齢者肝癌症例に対する腹腔鏡下肝切除術の短期治療成績について。第124回日本外科学会定期学術集会、常滑市、2024年4月20日

今西涼華、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：腎機能障害併存膵癌症例の周術期成績と予後の検討。第79回日本消化器外科学会総会、下関、2024年7月17日

今西涼華、高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、平尾素宏、加藤健志：臀部皮下から骨盤内に及ぶepidermal cystに対して腹腔鏡を併用し経仙骨的に切除した1例。第37回近畿内視鏡外科研究会、大阪、2024年9月28日

今西涼華、松井優紀、高見康二、徳山信嗣、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：CO2気胸と肋骨床剥離を用いて良好な視野で適切な切除範囲を決定し得た卵巣癌の右胸壁転移の1例。第37回日本内視鏡外科学会総会、福岡、2024年12月5日

今西涼華、山本昌明、竹野 淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：重度肝硬変を伴う臍ヘルニア嵌頓に対し局所陰圧閉鎖療法を用いた1例。第61回日本腹部救急医学会総会、名古屋、2025年3月20日

豊後雅史、後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、松井優紀、徳山信嗣、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：先天性肝外門脈体循環短絡症に合併した若年性多発巨大肝細胞癌の1例。第46回日本癌局所療法研究会、長浜、2024年6月21日

木場瑞貴、河合賢二、徳山信嗣、高橋佑典、松井優紀、俊山礼志、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、高見康二、加藤健志：直腸癌術後にHem-o-lokクリップを核として生じた癒痕化組織の一例。第46回日本癌局所療法研究会、長浜、2024年6月21日

木場瑞貴、高橋佑典、加藤健志：直腸静脈瘤および骨盤内静脈瘤を伴う直腸癌に対しロボット支援腹腔鏡下に根治切除した一例。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 17 日

木場瑞貴、高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、山本昌明、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、平尾素宏、加藤健志：直腸静脈瘤および骨盤内静脈瘤を伴う直腸癌に対しロボット支援腹腔鏡下に切除した一例。第 37 回近畿内視鏡外科研究会、大阪、2024 年 9 月 28 日

木場瑞貴、竹野淳、山本昌明、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、濱直樹、加藤健志、森 清、平尾素宏：胃多発神経内分泌腫瘍に対し、腹腔鏡下胃全摘術を施行した一例。第 97 回日本胃癌学会総会、名古屋、2025 年 3 月 14 日

上村 廉、山本昌明、浜川卓也、竹野 淳、徳山信嗣、松井優紀、赤澤 香、俊山礼志、河合賢二、岡田公美子、高橋佑典、酒井健司、八十島宏行、後藤邦仁、高見康二、加藤健志、平尾素宏：食道胃接合部癌に対する縦隔内吻合術後の逆流性食道炎に難渋した一例。第 46 回日本癌局所療法研究会、長浜、2024 年 6 月 21 日

上村 廉、酒井健司、後藤邦仁：肝細胞癌胸壁播種に対して術中 ICG 蛍光観察を用いて切除を施行した 1 例。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 18 日

上村 廉、松井優紀、高見康二、徳山信嗣、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：肺原発滑膜肉腫完全切除例に術後補助化学療法を施行するも術後 4 年で肺内転移を認めた一例。第 86 回日本臨床外科学会学術集会、宇都宮、2024 年 11 月 21 日

西岡裕未、赤澤 香、櫻井義正、八十島宏行：乳癌肺転移治療中に薬剤性間質性肺炎と癌性リンパ管症の鑑別に苦慮した一例。第 22 回日本乳癌学会近畿地方会、大阪、2024 年 11 月 23 日

奥村由紀、松井優紀、高見康二：非切除予定肺葉に部分肺静脈還流異常を認めた右下葉肺癌の一切除例。第 41 回日本呼吸器外科学会学術集会、軽井沢、2024 年 6 月 1 日

佐藤直也、酒井健司、後藤邦仁、豊後雅史、俊山礼志、山本昌明、高橋佑典、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：FOLFIRINOX 療法が奏効し根治切除を施行し得た膵腺扁平上皮癌と原発性肺扁平上皮癌の重複癌の一例。第 79 回日本消化器外科学会総会、下関、2024 年 7 月 19 日

宮崎道彦、山田真美、田中玲子、高橋佑典、河合賢二、徳山信嗣、加藤健志、平尾素宏：肛門外科領域のインシデント/アクシデントの検討。第 79 回日本大腸肛門病学会学術集会、横浜、2024 年 11 月 29 日

山田真美、宮崎道彦、田中玲子、高橋佑典、河合賢二、徳山信嗣、加藤健志、平尾素宏：当院における臀部慢性膿皮症症例の検討。第 79 回日本大腸肛門病学会学術集会、横浜、2024 年 11 月 30 日

B-5

加藤健志：外科の立場から考える周術期治療 GL 改訂ポイント。第 11 回平成大腸癌カンファレンス、神戸、2024 年 6 月 11 日

加藤健志：大腸がん薬物療法 Update。くしろ ICI セミナー、釧路、2024 年 6 月 14 日

加藤健志：大腸癌薬物療法のトピックスと技術認定医取得のコツ。大腸癌治療カンファレンス、金沢、2024 年 9 月 6 日

加藤健志：知っておきたい大腸がんのこと。2024 年度第 2 回森ノ宮医療大学市民公開講座、大阪、2024 年 10 月 29 日

加藤健志：大腸癌集学的治療。CRC conference in 高知 2025、高知、2025 年 2 月 21 日

竹野 淳：近年のがん治療における免疫チェックポイント阻害薬。第 10 回ブロック病診連携研修会 irAE をめぐる諸問題について～かかりつけ医が知っておくべきこと～、大阪、2025 年 3 月 15 日

B-6

竹野 淳：当院における irAE 対策チームの設立と取組み。第 61 回法円坂地域医療フォーラム、大阪、2024 年 7 月 6 日

八十島宏行：BRCA 遺伝子変異陽性 mbc 治療の新しい PARP 阻害剤ターゼナの特性。乳腺クリニック懇話会～BRCA 遺伝子変異陽性 mbc 治療における新しい選択肢～、大阪、2024 年 6 月 22 日

八十島宏行：エリブリン 13 年の歴史・レビュー。Meet the expert Web Forum、大阪、2024 年 8 月 20 日

八十島宏行：当院での ICI の使用法。3Q 中外 e セミナー on Breast Cancer、大阪、2024 年 9 月 27 日

八十島宏行：外科治療＋ラジオ波焼灼療法。乳がん最前線 2024、大阪、2024 年 10 月 27 日

八十島宏行：副作用マネジメントについて。ターゼナ AE マネジメント Internet Symposium Breast Cancer 2024、大阪、2024 年 11 月 12 日

八十島宏行：再発高リスク monarch E の適格基準について考える。Lilly Early Breast Cancer Web Seminar、大阪、2024 年 11 月 28 日

八十島宏行：EBC 術後薬物療法のエビデンスと再発高リスク患者さんへのアプローチ。Lilly Breast Cancer Web Seminar、大阪、2025 年 3 月 5 日

八十島宏行：今どこまでわかっているのか？CIPN の最新事情。プロジェクト Breast Cancer ～円滑な連携のために～、大阪、2025 年 3 月 13 日

酒井健司：肝胆膵領域におけるがん診療「膵癌手術の現況」。第 63 回法円坂地域医療フォーラム、大阪、2025 年 2 月 8 日

櫻井義正、八十島宏行、徳山信嗣、赤澤 香、松井優紀、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏、高見康二：ドセタキセル投与後に非閉塞性腸管虚血と肺血栓塞栓症から急速な転帰をたどった一例。第 655 回大阪外科集談会、大阪、2024 年 11 月 9 日

上村 廉、松井優紀、高見康二、徳山信嗣、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、竹野 淳、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：横隔膜内膿瘍の一例。第 654 回大阪外科集談会、大阪、2024 年 7 月 27 日

西岡裕未、櫻井義正、増山美里、赤澤 香、八十島宏行：より良い終末期医療の提供を目指して-病棟体制の変化-。第 151 回阪神乳腺疾患患談話会、大阪、2024 年 9 月 6 日

松本浩太郎、上村 廉、松井優紀、高見康二、増山美里、徳山信嗣、赤澤 香、俊山礼志、山本昌明、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、八十島宏行、竹野 淳、濱 直樹、加藤健志、平尾素宏：画像検査で胸水貯留以外に異常を認めず、外科的生検までの方針決定に難渋した肉腫型悪性胸膜中皮腫の一例。第 656 回大阪外科集談会、大阪、2025 年 1 月 18 日

B-8

竹野 淳：胃がんの切除不能進行・再発治療。第 3 回保険薬局 Oncology Seminar・胃がんシリーズ研修、大阪、2024 年 10 月 30 日

B-9

濱 直樹：DOCTOR's FRAP。FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2025 年 2 月 6 日

高度医療技術開発室

室長 上田恭敬
室員 安部晴彦

近年における医療を取り巻く情報処理や画像処理の技術革新により、診断、治療における医用画像診断装置の利用範囲は拡大しており、著しいイノベーションを引き起こしている。昨年より新型コロナウイルスの世界的パンデミックによって我々の生活や産業構造は大きな変革を余儀なくされた。そのような変革の中で画像が果たす役割は大きくなってきている。遠隔モニタを用いた遠隔診療などはさらに推進されていくであろう。診断技術に関しても AI などのサポートを受けながら今まで以上に向上していくものと考えられる。本研究室では新しい医療技術開発の基盤を構築していく。

平成 24 年度より循環器系研究室員を配置し、医用画像診断装置の技術開発を大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座とともに推進した。

平成 27 年度より、院内臨床症例（特に心房細動症例、大動脈弁狭窄症症例）の心臓超音波画像解析も並行して推進した。

平成 29 年度は、僧帽弁輪石灰化、大動脈弁石灰化を CT 画像から解析し、心臓超音波画像と組み合わせた解析によって、冠動脈石灰化のリスク層別化が可能であること。また心エコー検査と生体インピーダンス分析の併用によって心不全患者の再入院リスク層別化が可能であることを報告した。（AHA2017、ACC2018）

平成 30 年度は、昨年の CT 画像検査、心エコー検査に関する研究を進め、それぞれ報告を行った。（AHA2018）この研究が、心エコー図学会に認められ海外発表優秀論文賞を受賞した。

平成 31 年度（令和元年）は、大阪大学大学院医学系研究科循環器内科学において多施設で実施している心不全レジストリ登録を行っているデータから、心エコーによるうっ血の指標をスコア化し、層別化することによって心不全患者の予後を予測することを報告した。（AHA2019）。

令和 2 年度は、心臓リハビリテーションにおいて、心不全患者の栄養状態と身体活動性が生命予後に影響していることを報告した（ESC Heart Fail 2020;7:1801-1808）。

令和 3 年度は、COVID-19 パンデミックの影響もあったが、心エコー検査の指標を用いて、収縮の保たれた心不全患者の予後予測が可能であることを報告した（JACC Asia 2022;1:73-84）。

令和 4 年度は、COVID-19 ワクチン関連劇症型心筋炎の報告（EHJ Case Reports 2022 doi:10.1093/ehjcr/ytac290.）を行った。

令和 5 年度は、心不全早期診断・早期介入のための運動負荷心エコー検査の件数を増やし（前年比 135%）、シンポジウムでの報告（2023 年日本心エコー図学会）も行った。また、学会主催の運動負荷心エコー検査に関する多施設共同研究にも参加し本邦での心不全早期診断のエビデンス創出を進めていく。

令和 6 年度は、昨年度に引き続き運動負荷心エコー検査に関する研究報告（2024 年日本心エコー図学会）で行い、多施設共同研究へのレジストリを進めた。また腫瘍循環器関連に関する報告（JC Cases 2024;31:57-60）を行いつつ、後半は、人工知能（AI）による心エコー画像自動解析システムによる検査業務の効率化、改善化に関する研究を行い、学会発表、論文報告を進めていく。

【2024 年度 研究発表業績】

A-0

Ikeoka K, Nishi H, Ueda Y, Yamane H, Matsumura Y : Hybrid endovascular treatment for complicated aortic dissection concomitant with true lumen obliteration: a case report. 「European Heart Journal Case Reports」8(2) : ytae068.doi: 10.1093/ehjcr/ytae068. PMID: 38344418; PMCID: PMC10858675、2024 年 1 月 30 日

Takeuchi T, Kosugi S, Ueda Y, Ikeoka K, Yamane H, Takayasu K, Ohashi T, Fukushima T, Horiuchi k, Iehara T, Sakamoto M, Ukai K, Minami S, Mizumori Y, Muraoka N, Nakamura M, Ozaki T, Mishima T, Abe H, Inoue K, Matsumura Y : Impact of a Cancer History on Cardiovascular Events Among Patients with Myocardial Infarction Who Received Revascularization. 「Circulation Journal」 88(2) : 207-214、日本循環器学会、2024 年 1 月 25 日

Ikeoka K, Nishi H, Ueda Y, Yamane H, Matsumura Y : Hybrid endovascular treatment for complicated aortic dissection concomitant with true lumen obliteration : a case report. 「European Heart Journal Case Reports」 8(2) : ytae068、Oxford University Press、2024 年 1 月 31 日

Ueda Y : Slow-Flow Phenomenon Caused by Distal Embolization Should Be Predicted and Prevented to Maximize the Efficacy of Coronary Intervention. 「Circ J」 88(6) : 980-981、2024 年 5 月 24 日

Takeuchi T, Ueda Y, Kosugi S, Ikeoka K, Yamane H, Ohashi T, Iehara T, Ukai K, Oozato K, Oosaki S, Nakamura M, Ozaki T, Mishima T, Abe H, Inoue K, Matsumura Y : The Impact of Door to Extracorporeal Cardiopulmonary Resuscitation Time on Mortality and Neurological Outcomes among Out-of-hospital Cardiac Arrest Acute Myocardial Infarction Patients Treated by Primary Percutaneous Coronary Intervention. 「American Heart Journal Plus: Cardiology Research and Practice」 100473、2024 年 10 月 14 日

Yamane H, Ueda Y, Ikeoka K, Abe H, Inoue K, Matsumura Y : The Vascular Response After Balloon Angioplasty of Infrapopliteal Intermediate Stenosis Evaluated by Optical Frequency Domain Imaging. 「Catheter Cardiovasc Interv」 105(1) : 200-210、2024 年 10 月 19 日

Ueda Y : Vulnerable and Disrupted Plaques Detected by Angioscopy as Yellow Plaque with or without Thrombus. 「Circ J」 88(11) : 1768-1769、2024 年 10 月 25 日

Kobata R, Abe H, Yamane H, Nakamura M, Mori K, Mishima T, Ikeoka K, Inoue K, Ueda Y, Matsumura Y. A breast cancer patient with chemotherapy-induced chronic lymphocytic myocarditis successfully treated with steroid therapy. 「JC Cases」 Vol31, Issue3, p57-60 Published online、2024 年 12 月 6 日

Inoue K, Osaki S, Ueda Y. : Pulsed Field Ablation for Atrial Fibrillation: Meta-Analysis Confirms Expected Initial Outcomes. 「JACC Asia」 31 : 5(1) : 158?159、2024 年 12 月 31 日

A-4

上田恭敬 : イメージングガイド PCI の有用性と今後の展望「CLEAR!ジャーナル 四天王」、<https://www.carenet.com/news/clear/journal/58939>、2024 年 7 月 22 日

B-2

Ikeoka K, Nishi H, Ueda Y, Yamane H, Matsumura Y : Hybrid endovascular treatment for complicated aortic dissection concomitant with true lumen obliteration. ACC 2024, Atlanta, 2024 年 4 月 8 日

B-3

山根治野、上田恭敬 : 血管内イメージングから考察する、膝下動脈病変の Etiology. 第 17 回 Trans Catheter Imaging Forum 2024、大阪、2024 年 5 月 18 日

Inoue K, Osaki S, Ohashi T, Mishima T, Ozaki T, Ikeoka K, Abe H, Ueda Y, Matsumura Y : Initial Experience of PFA in Japan. Chinese Society of Cardiology-Japanese Society of Cardiology Joint Symposium, “Pulse Field Ablation for Atrial Fibrillation”. 第 89 回 循環器学会学術集会、横浜、2025 年 3 月 29 日

B-4

高野萌子、柳 善樹、安部晴彦、中村雅之、福島貴嗣、家原卓史、鵜飼一穂、近藤信吾、吉龍正雄、大崎 慧、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、眞能正幸、松村泰志 : 冠静脈洞口部閉鎖の診断に経胸壁心エコー図検査が有用であった一例。日本心エコー図学会第 35 回学術集会、姫路、2024 年 4 月 20 日

中川紗希、中村雅之、安部晴彦、柳 善樹、赤嶺和昭、近藤信吾、福島貴嗣、家原卓史、鵜飼一穂、吉龍正雄、山根治野、尾崎立尚、向井 隆、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、眞能正幸、松村泰志 : 運動負荷中に E 波 A 波が癒合して計測困難となる症例の安静時データの特徴。日本心エコー図学会第 35 回学術集会、姫路、2024 年 4 月 20 日

柳 善樹、中村雅之、安部晴彦、福島貴嗣、家原卓史、鵜飼一穂、中川紗希、赤

嶺和昭、近藤信吾、吉龍正雄、山根治野、尾崎立尚、向井 隆、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、眞能正幸、松村泰志：左室駆出率の保たれた心不全（HFpEF）診断における 25w 運動負荷時の E/e' の有用性。日本心エコー図学会 第 35 回学術集会、姫路、2024 年 4 月 20 日

山根治野、上田恭敬：血管内イメージングから考察する、膝下動脈病変の Etiology。第 17 回 Trans Catheter Imaging Forum 2024、大阪、2024 年 5 月 18 日

鵜飼一穂、安部晴彦、中村雅之、福島貴嗣、家原卓史、柳 善樹、山根治野、向井 隆、上田恭敬、松村泰志：右心室の収縮遅延による左室中隔圧排像を認めた Ebstein 奇形術後の一例。日本超音波医学会 第 97 回学術集会、横浜、2024 年 6 月 1 日

福島貴嗣、安部晴彦、中村雅之、家原卓史、鵜飼一穂、柳 善樹、山根治野、向井 隆、上田恭敬、松村泰志：関連大動脈周囲炎に合併した心臓腫瘍がステロイドにより縮小した一例。日本超音波医学会 第 97 回学術集会、横浜、2024 年 6 月 1 日

福島貴嗣、安部晴彦、中村雅之、家原卓史、鵜飼一穂、柳 善樹、山根治野、向井 隆、上田恭敬、松村泰志：重度大動脈弁閉鎖不全症を合併した僧帽弁大動脈弁間膜線維症偽動脈瘤の一例。日本超音波医学会 第 97 回学術集会、横浜、2024 年 6 月 2 日

Ozaki T、Ohashi T、Mishima T、Ikeoka K、Ueda Y：UTILITY OF NT-proBNP IN IDENTIFYING UNRECOGNIZED QOL DECLINE IN ASYMPTOMATIC ATRIAL FIBRILLATION PATIENTS。第 70 回日本不整脈心電学会学術集会、石川、2024 年 7 月 20 日

越智公一、池岡邦泰、竹内太郎、玉城勇樹、小畑理沙子、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、向井 隆、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：ダブルガイドエクステンションによる新しいガイドカテーテルサポート法。第 32 回 日本心血管インターベンション治療学会学術集会、札幌、2024 年 7 月 26 日

池岡邦泰、竹内太郎、玉城勇樹、小畑理沙子、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、向井 隆、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：ダブルガイドエクステンションによる新しいガイドカテーテルサポート法。第 32 回 日本心血管インターベンション治療学会学術集会、札幌、2024 年 7 月 26 日

村里嘉信、中島均、杉野 浩、有川雅也、森 文章、上田恭敬、松村圭祐、阿部充、小泉智三、下村光洋、藤本和輝、佐伯隆広、今川正吾、竹中 孝、森田有紀子、鹿島克郎、高見 徹、小野裕二郎、深江貴芸：左冠動脈主幹部インターベンシヨ

ンの国立病院機構多施設レジストリーにおける one-および two-stent の比較。第 32 回 日本心血管インターベンション治療学会学術集会、札幌、2024 年 7 月 27 日

大崎 慧、池岡邦泰、大里和樹、鶴飼一穂、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志、是恒之宏：パルスフィールドアブレーション（VARIPULSE）による肺静脈隔離術後の心筋障害（本邦初症例の検討）。第 72 回 日本心臓病学会学術集会、仙台、2024 年 9 月 27 日

Murasato Y, Nakashima M, Sugino H, Arikawa M, Mori F, Ueda Y, Matsumura K, Abe M, Koizumi T, Shimomura M, Fujimoto K, Saeki T, Imagawa S, Takenaka T, Morita Y, Kashima K, Takami A, Ono Y, Fukae A & Yoshida H : Long-term Outcome of Routine intracoronary imaging-guided left main coronary intervention. 第 89 回 日本循環器学会学術集会、横浜、2025 年 3 月 28 日

Matuoka Y, Seo M, Abe H, Nakagawa Y, Masaki T, Suna S, Akazawa Y, Nakamoto K, Mano T, Yokoi T, Nakano M, Sunaga A, Okada K, Nakatani D, Yamada T, Yamada T, Yasumura Y, Hikoso S, Satomi Y, Sakata Y : MONACO Trial; Randomized Clinical Trial using Pimobendan Targeted on Heart Failure and . 第 89 回 日本循環器学会学術集会、横浜、2025 年 3 月 28 日

Murasato Y, Higashi K, Sugino H, Arikawa M, Mori F, Ueda Y, Matsumura K, Abe M, Koizumi T, Shimomura M, Tayama S, Saeki T, Imagawa S, Takenaka T, Morita Y, Kashima K, Takami A, Ono Y, Fukae A : Impact of Chronic Kidney Disease Stage on Clinical Outcome of Left Main Coronary Intervention in Japanese National Hospital Organization Registry. 第 89 回 日本循環器学会学術集会、横浜、2025 年 3 月 28 日

B-6

羽白 亮、尾崎立尚、大崎 慧、鶴飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、山根治野、向井 隆、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：心房自動閾値測定テストにより心房頻拍が誘発された ICD 植え込み後のブルガダ症候群の一例。第 137 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 5 月 25 日

工藤あや、大里和樹、三嶋 剛、竹内太郎、玉城勇樹、小畑理沙子、大崎 慧、越智公一、鶴飼一穂、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、向井 隆、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：僧帽弁置換術および両心室ペースメーカー植え込み術後の難治性菌血症に対してリファンピシンが著効した 1 例。第 137 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 5 月 25 日

木村健太郎、尾崎立尚、大崎 慧、鶴飼一穂、大里和樹、家原卓史、中村雅之、

大橋拓也、山根治野、大橋拓也、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：広範な心筋障害で回路の同定に苦慮した心房頻拍に対し、電位早期性を元に通電を行い頻拍停止に成功した一例。第 137 回日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 5 月 25 日

鵜飼一穂、池岡邦泰、余田拓海、兵庫隆司、高木宏太、村岡直哉、水森祐樹、大里和樹、家原卓史、中村雅之、山根治野、井上耕一、上田恭敬：Leriche 症候群に対し血管内治療後の急性大動脈／下肢動脈閉塞に Fogarty バルーンを用いて経皮的血栓除去術を行った 1 例。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

高木宏太、池岡邦泰、余田拓海、兵庫隆司、水森祐樹、村岡直哉、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：緊急 CABG 術後早期のグラフト吻合部遠位閉塞に対して PCI での血行再建に難渋した一例。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

水森祐樹、家原卓史、池岡邦泰、村岡直哉、大里和樹、鵜飼一穂、中村雅之、山根治野、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：Long inflation balloon angioplasty によりステントレス治療が可能であった 左前下行入口部閉塞の急性心筋梗塞の一例。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

村岡直哉、池岡邦泰、水森祐樹、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、山根治野、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：冠動脈 CT を用いた冠血流予備能比測定 (FFRct) と血管造影を用いた FFRangio システムによる心筋虚血評価の比較検討。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

大里和樹、家原卓史、池岡邦泰、余田拓海、兵庫隆司、高木宏太、水森祐樹、村岡直哉、鵜飼一穂、山根治野、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：スコアリングバルーンでの前拡張後に IVL を行いバルーン破裂に伴う type F の冠動脈解離を来した 1 例。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

藤澤朋代、池岡邦泰、村岡直哉、水森祐樹、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、山根治野、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：ImpellaCP 挿入困難であった左主幹部梗塞に対し ECMO/Impella5.5 サポートにて救命し得た一例。第 46 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

兵庫隆司、山根治野、余田拓海、高木宏太、水森祐樹、村岡直哉、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏：下肢急性動脈閉塞症 (ALI)

における血行再建のゴールデンタイムについての検討。第 46 回 日本心血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

余田拓海、家原卓史、池岡邦泰、水森祐樹、村岡直哉、大里和樹、鵜飼一穂、中村雅之、山根治野、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：心原性ショックを合併した LMT 入口部高度石灰化病変の急性心筋梗塞に対して、Rotatripsy が有効であった 1 例。第 46 回日本心血管インターベンション治療学会近畿地方会、大阪、2024 年 10 月 19 日

安部晴彦、中村雅之、家原卓史、鵜飼一穂、村岡直哉、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大崎慧、大里和樹、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：運動負荷エコー検査で E/e 上昇を認めなかったが 1 年後に症候性心不全を発症した一例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

鵜飼一穂、池岡邦泰、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、村岡直哉、大里和樹、大崎慧、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、三嶋剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：血管内治療後の急性大動脈/下肢動脈閉塞に Fogarty バルーンを用いて経皮的血栓除去術を行った 1 例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

奥村由紀、村岡直哉、安部晴彦、中村雅之、西村健作、三嶋剛、家原卓史、鵜飼一穂、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大崎慧、大里和樹、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：去勢抵抗性前立腺癌に対する Abiraterone の内服開始を契機に急性心不全を発症した虚血性心筋症の 2 例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

高木宏太、井上耕一、安部晴彦、中村雅之、村岡直哉、余田拓海、兵庫隆司、水森祐樹、大崎慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋剛、池岡邦泰、上田恭敬、松村泰志：サイズ選択に苦慮した経皮的左心耳閉鎖デバイス留置困難症例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

水森祐樹、池岡邦泰、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、村岡直哉、大崎慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、三嶋剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：Transankle Intervention (TAI)における血管内治療の有効性と安全性について。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

村岡直哉、池岡邦泰、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大崎慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：CTを用いた冠血流予備能比測

定 (FFR_{ct})と血管造影を用いたFFR_{angio}システムによる心筋虚血評価の比較検討。
第138回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024年12月7日

村岡直哉、中村雅之、安部晴彦、家原卓史、鵜飼一穂、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大崎 慧、大里和樹、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：運動負荷心エコー検査で診断した左室駆出率の保たれた心不全 (HFpEF) に対して SGLT2 阻害薬が奏功した一例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

大崎 慧、井上耕一、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋 剛、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、村岡直哉、水森祐樹、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、山根治野、池岡邦泰、安部晴彦、上田恭敬、松村泰志：パルスフィールドアブレーションおよびクライオアブレーションにおける心筋障害と術後炎症の検討。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

大崎 慧、井上耕一、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋 剛、余田拓海、兵庫隆司、高木宏太、村岡直哉、水森祐樹、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、山根治野、池岡邦泰、安部晴彦、上田恭敬、松村泰志：後壁より分枝する下肺静脈に対してパルスフィールドアブレーションを施行した発作性心房細動の症例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

大里和樹、安部晴彦、齊藤哲也、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、村岡直哉、水森祐樹、大崎 慧、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、山根治野、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、西宏之、上田恭敬、松村泰志：僧帽弁および三尖弁閉鎖不全症の術後に壁運動異常の改善を認めないたこつぽ型心筋症を発症した一例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

中村雅之、安部晴彦、村岡直哉、余田拓海、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：運動負荷心エコーで心拍応答不全を伴う収縮の保たれた心不全 (HFpEF) と診断し、 β 遮断薬中止で軽快した 1 例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

兵庫隆司、山根治野、余田拓海、高木宏太、水森祐樹、村岡直哉、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：下肢急性動脈閉塞症(ALI)における血行再建のゴールデンタイムについての検討。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

兵庫隆司、尾崎立尚、依田 巧、高木宏太、水森祐樹、村岡直哉、大崎 慧、大里和樹、鵜飼一穂、家原卓史、中村雅之、大橋拓也、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：Maze 術後の巨大左房症例に発症した心房頻拍に対してアブレーションを施行した一例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、

2024 年 12 月 7 日

余田拓海、安部晴彦、三嶋 剛、中村雅之、鵜飼一穂、村岡直哉、高木宏太、兵庫隆司、水森祐樹、大里和樹、大崎 慧、家原卓史、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：ブルトン型チロシンキナーゼ（BTK）阻害薬による心房細動及び心不全をきたした腫瘍循環器領域の一例。第 138 回 日本循環器学会近畿地方会、大阪、2024 年 12 月 7 日

羽白 亮、村岡直哉、中村雅之、山根治野、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬：難治性心室細動、胸骨圧迫に伴う両側内胸動脈損傷を合併した急性心筋梗塞に対して ECPELLA を用いて救命し得た一例。日本血管インターベンション治療学会、大阪、2025 年 3 月 1 日

B-8

安部晴彦：血圧管理と心不全。第 17 回 Trans Catheter Imaging Forum 2024、ファイアサイドセミナー、WEB、2024 年 5 月 17 日

安部晴彦：心不全治療における SGLT2 阻害薬、ARNI の使い方のコツと注意点。循環器病談話会、大阪、2024 年 7 月 20 日

安部晴彦：心不全の原因精査、～心アミロイドーシス早期診断のポイント～ 。心不全地域連携セミナー、大阪、2024 年 10 月 31 日

B-9

上田恭敬：DOCTOR ‘ S FLAP、FM 大阪『LOVE FLAP』、大阪、2024 年 12 月 19 日

医療情報研究室

室長 松村泰志

電子カルテデータは、臨床研究に活用できる可能性を秘めている。特に薬の安全性評価には多くの特定薬剤を投与された患者のデータが必要であり、電子カルテに蓄積された Real World Data の活用に適したテーマである。令和 6 年度は、薬剤性間質性肺炎に焦点を当て、医事会計データを解析する方法で、どの程度の精度で薬剤性間質性肺炎を含む間質性肺疾患が検出できるかの検討を行った。

電子カルテが開発され、紙の診療記録の電子化により、診療情報の共有化が進み、カルテ搬送を不要とする点で効率化に寄与してきた。しかし、医療の高度化・精緻化は益々進み、医療安全策が強化されるなか、医療現場の負担は増え続けており、医療現場の負担を更に減らす仕組みが求められている。病棟業務では、多職種が連携して医療を実施する体制をとるが、そのためのコミュニケーションツールの在り方に改善の余地がある。また、患者に装着した持続点滴装置、心電図モニター、人工呼吸器から発信されるアラート、患者によるナースコールに看護師が対応する必要がある、ナースステーションと病室の往復で疲弊している実態がある。一般には、スマートフォンが広く利用されるようになったが、現状では、この病院での活用は限定的である。そこで、スマートフォンにどのような機能を持たせれば、これらの問題が解決するのかを検討し、そのモデルシステムを構築することを目指す。令和 6 年度は、この課題に関心を持つ企業と共同研究を開始した。

【2024年度 研究発表業績】

A-0

Takeuchi T, Ueda Y, Kosugi S, Ikeoka K, Yamane H, Ohashi T, Iehara T, Ukai K, Oozato K, Oosaki S, Nakamura M, Ozaki T, Mishima T, Abe H, Inoue K, Matsumura Y. : The impact of door to extracorporeal cardiopulmonary resuscitation time on mortality and neurological outcomes among out-of-hospital cardiac arrest acute myocardial infarction patients treated by primary percutaneous coronary intervention. 「Am Heart J Plus」 14:47 : 100473、2024 年 10 月

Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Okada K, Nakashima K, Matsumura Y, Takeda T. : Assessment of Follow-Up for Pulmonary Nodules from Radiology Reports with Natural Language Processing. 「Stud Health Technol Inform」 22:316 : 1795-1799、2024 年 8 月

Wada S, Takeda T, Okada K, Manabe S, Konishi S, Kamohara J, Matsumura Y, : Oversampling effect in pretraining for bidirectional encoder representations from transformers (BERT) to localize medical BERT and enhance biomedical BERT. 「Artif Intell Med」 153 : 102889、2024 年 7 月

Yusof MM, Takeda T, Shimai Y, Mihara N, Matsumura Y. : Evaluating health information systems-related errors using the human, organization, process, technology-fit (HOPT-fit) framework. 「Health Informatics J」 : 30(2)、2024 年 4 月

Mashima Y, Tanigawa M, Yokoi H. : Information heterogeneity between progress notes by physicians and nurses for inpatients with digestive system diseases. 「Scientific Reports」 1;14(1):7656、2024 年 4 月

Konishi S, Manabe S, Shimai Y, Namiuchi Y, Sugimoto K, Wada S, Okada K, Matsumura Y, Takeda T. : Implementation of a Multilingual Electronic Medical Questionnaire: For Use Inside or Outside the Hospital. 「Stud Health Technol Inform」 25:310:1360-1361、2024 年 1 月

Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Okada K, Manabe S, Matsumura Y, Takeda T. : Classification of Diagnostic Certainty in Radiology Reports with Deep Learning. 「Stud Health Technol Inform」 25:310:569-573、2024 年 1 月

Okada K, Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Manabe S, Matsumura Y, Takeda T. : Development of the Clinical Specimen Information Management System for Multicenter Clinical Studies. 「Stud Health Technol Inform」 25:310 : 119-123、2024 年 1 月

A-3

谷川雅俊、六車幸子、間島行則、横井英人：医療用医薬品の使用成績調査における収集データ項目からみた診療情報とのデータ自動連携の可能性「医薬品情報学」26(2) : P.102-110、一般社団法人日本医薬品情報学会、2024 年 4 月 30 日

A-6

松村泰志：第 78 回国立病院総合医学会の概要「医療の広場令和 7 年 1 月号」65 : 40-42 公益財団法人政策医療振興財団 2025 年 1 月 10 日

B-3

松村泰志：電子カルテに入力される臨床データを流通・活用するためのシステム。第 24 回日本糖尿病インフォマティクス学会年次学術集会、東京、2024 年 8 月 18 日

B-5

松村泰志：健康と医療の情報を自分で管理して役立てるには。第 6 回 NeXEHR シンポジウム、東京、2024 年 5 月 20 日

松村泰志：禁忌・アレルギー情報の記載・管理のあり方。医療安全全国共同行動第 18 回オンラインセミナー、Web、2025 年 2 月 18 日

主として下記の 8 項目に関する研究を行っている。

- ・ BCP を軸にした災害対応の研究（院内災害対応研究）

COVID-19 に対する対応が求められた際に病院機能を維持する観点からの対応を行なった。この感染症への対応における人的・物的・空間的な不足（需要と供給のアンバランス）がもたらす事態という意味においては“災害”と捉えることができる。しかし、一般的な自然災害とは違い、いつから災害と認識できるのか？、ライフラインは全く影響を受けていない、といった災害をイメージしにくい状況があることから、当院では事業継続計画（BCP）を軸にした対応をおこなっている。今後は、毎年、小改訂を可能とする取り組みを行なっていく予定である。

- ・ 医療・福祉・行政の連携を重視した平時から災害時を見据えた災害対応の研究（医療圏における災害対応研究）

他の災害医療における研究としては、高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研 19K10532）として行ってきた。行政と相談しながら、さまざまな高齢者施設、あるいは在宅医療を行う医療機関と連携し災害時に“災害時要配慮者”に分類される、これらの医療・介護の利用者をいかにしてアセスメントし、医療への負荷を軽減させ、生命を守るかといった課題に取り組んでいく。

- ・ 全日本病院医療支援班（AMAT：All Japan Hospital Medical Assistance Team）における災害医療講習（全国レベルでの災害対応研究）

AMAT の講習会における講義のうち“災害時要配慮者”、“災害時に留意すべき疾病”、“感染制御”の項目の講義資料の作成を行っている。本年度も講義資料のマイナー改訂を行なった。また、講習会において指導を行なった。今後は本講習を e-learning の形にしていく予定である。前述の医療・福祉・行政の連携下の災害医療対応にも関連する内容である。

- ・ 大阪・関西万博における医療救護対応に関する研究（マスギャザリング医療対応研究）

日本万国博覧会医療救護協議会の構成員として、2025 大阪・関西万博の医療救護のあり方に関して検討を行った。また、厚生労働行政推進事業の健康安全・危機管理対策総合研究事業における“大規模イベントに対する戦略的リスクアセスメント及びヘルスシステムの強化に向けた標準的枠組に関する研究（24LA2002）”での分担研究である“大阪・関西万博対策、医療救護・化学災害対策の検討”を行なった。人為的な多数傷病者事案の類型化を行い、大阪・関西万博の危機管理対策室に勤務する予定の統括医療責任者らに対する講義を行なった。

- ・ 法執行機関との医療連携のあり方に関する研究（事態対処医療に関する研究）

法執行機関との医療連携に関して長年検討してきた。その一つに、臨床救急

医学会の“法執行機関との医療連携のありかたに関する検討委員会”による事態対処救護ガイドブックの発行（2019年）と、事態対処救護の講習会の開催と開催であった。2024年度は海上保安庁職員及び警察職員に対して合計4回のコース開催を行なった。また、大阪府警と連携した“立てこもり事案”での負傷者対応に関して、大阪府のDMATが出動できるシステムを構築した。同システムは2025年1月20日より運用開始となった。

さらに、プレホスピタルでの止血帯を用いた止血処置は2019年より消防職員が、その後、警察や海上保安庁職員も可能となったが、効果的に訓練するための機器開発を開始した。これは“我が国初の本格的「救急止血法の訓練モデル」の開発”として成長型中小企業等研究開発支援事業（Go-Tech事業）に採択された。2026年には上市できるように開発を進めている。

- ・ プレホスピタルとの連携を重視したイベント・教育資料開発（病院前救護活動・教育）

大阪市消防の有志とともに20年前より勉強会を合計100回程度開いてきたが、その一環として“ベーシックラリー”を2024年6月22日に開催した。さまざまなシナリオをもとに多職種からなる当院職員と、大阪市消防や警察、海上保安庁、自衛隊等の連携を図った。今後は当院が後援する形で、さらに救急隊などと連携していく。また、プレホスピタル分野における教育資料開発としては、事故災害現場でのさまざまな状況変化に応じた多職種の活動を学ぶためのボードゲームの開発を開始した。2026年には上市できる予定である。

- ・ 化学テロや爆傷などへの対応に関する国際的な動向の把握（特殊災害対応研究）

厚生労働科学研究の健康安全・危機管理対策総合研究事業における“CBRNEテロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究（22LA1012）”での分担研究である“化学テロ危機管理に関する研究”を行なった。本年度が最終年度であり、令和4年度は化学テロの覚知に関して、令和5年度は世界健康安全保障行動グループ（GHSAG：Global Health Security Action Group）の下部組織である化学イベントワーキンググループ（CEWG：Chemical Event Working Group）における各国の活動および連携（特にウクライナ対応での連携、緊急招集会合）、ローンオフエンダーによる化学テロの可能性の検討、令和6年度は過去の本邦および各国の化学物質が関連した事故や災害事例への対応及び、その際の公衆衛生や中毒情報センターの連携のあり方に関する検討を行なった。今後も研究が継続されることが決まっており、化学物質による意図的な事案および爆発による生体への影響の研究を行っていく。（爆発による生体への影響の研究は、“衝撃波（第一次爆傷）による長期脳損傷のメカニズムの解明と治療法の開発（21K09019）として大阪大学で研究を行っている。）

本分野では、救急科領域講習として第38回日本外傷学会においてオンデマンドで“爆傷事案から考える爆傷の実際と衝撃波外傷の性質”を講演、また外

傷学会評議員セミナーとして 2024 年 4 月 25 日に“出血や外傷（衝撃波外傷を含む）に伴う循環動態の変化と中枢神経の役割”として講演、救急科領域講習として第 46 回日本中毒学会において 2024 年 7 月 24 日に“災害と中毒ー化学災害を中心にー”として講演した。また、東京大学大学院公共健康医学において 2024 年 5 月 13 日に“化学物質の対応・危機管理”の講義を関連省庁職員等に対するセミナーである NBC ネットワーク専門家会合において 2024 年 8 月 1 日に“化学テロに関する海外の解毒薬等の情報”を講義した。

- ・ 2026 年の日本中毒学会総会・学術集会に関する準備（**Health Security に関する研究**）

第 48 回日本中毒学会総会を担当することとなり、Health Security をテーマに学会の準備を始めた。Health Security という用語自体は、健康危機管理を考える際にしばしば使われる用語であるが、定義ははっきりしていない。概ね、“原因が自然発生的であろうと人為的であろうと、健康に対するあらゆる脅威に対応するための予防・準備、覚知・分析、対応・復旧、事後検証などの一連の取り組み”、といった概念になる。この概念をテーマに取り上げ、中毒事案において Health Security という視点から考えてみることにした。グローバルなハザード対策において使われることが多い用語ではあり、必ず多機関・多職種で対応する必要がある。中毒を考慮するような医療安全といったミクロな点から、公衆衛生との連携を念頭に置いた Public Health Security といった視点、化学物質が関連する災害・事故、薬物濫用や Medical Child Abuse など、中毒が関係するさまざまな事案に対して議論する予定である。

【2024 年度 研究発表業績】

A-3

布施明、大西光雄、宮内雅人、落合秀信、布施理美、小山博史：南海トラフ地震における急性期災害医療のシミュレーションを用いた“未治療死”の検討「日本災害医学会雑誌」29(3)：213-219、2024年10月25日

A-5

大西光雄：化学テロ危機管理に関する研究 厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「CBRNEテロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究」令和5年分担研究報告書、P.52-62、2024年10月2日

大西光雄：化学テロ危機管理厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「CBRNEテロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究」令和4年分担研究報告書、P.49-56、2024年4月1日

大西光雄、嶋津岳士、奥村 徹、吉岡敏治、遠藤容子、若井聡智：化学テロ危機管理厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「CBRNE

テロリズム等の健康危機事態における対応能力の向上及び人材強化に関わる研究」
令和3年分担研究報告書、P.52-63、2024年8月28日

B-3

大西光雄：2025大阪・関西万博医療対応をより強靱にするために—過去の人為的な多数傷病者事案を参考にした想定にどう対応するか。第30回日本災害医学会総会・学術集会、名古屋、2025年3月6日

大西光雄：過去の化学物質関連事案と最近のテロ攻撃を勘案した今後の化学イベントへの備えと対策。第30回日本災害医学会総会・学術集会、名古屋、2025年3月8日

大西光雄：爆傷事案から考える爆傷の実際と衝撃波外傷の性質。第38回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2025年4月25日収録（オンデマンドにて5月1日から5月31日まで配信）

大西光雄：災害と中毒 化学災害を中心に。第46回日本中毒学会総会・学術集会、神戸、2024年7月24日

田尻昌士、石田健一郎、中村さやか、樋口栄二、藤井順也、東 俊樹、野邊亮丞、小島将裕、曾我部 拓、大西光雄：多職種連携による集中治療部門の災害対応：課題の共有と事業継続計画改訂へのアプローチ。第52回日本集中治療医学会学術集会、福岡、2025年3月14日

戸上由貴、廣瀬智也、竹川良介、服部雄司、大西光雄：多職種で考える！病院前中毒診療の課題とその解決に向けて。第46回日本中毒学会総会・学術集会、神戸、2024年7月24日

B-4

太田裕子、石田健一郎、平島園子、吉田佳弘、平井亜里砂、若井聡智、大西光雄：都市部の防災計画における災害時要配慮者に関わる組織連携(その1) 合議体形成までの道のり。第27回日本臨床救急医学会総会・学術集会、鹿児島、2024年7月19日

石田健一郎、太田裕子、平島園子、吉田佳弘、平井亜里砂、若井聡智、大西光雄：都市部の防災計画における災害時要配慮者に関わる組織連携(その2) 意見交換会を開催して。第27回日本臨床救急医学会総会・学術集会、鹿児島、2024年7月19日

B-8

大西光雄：出血や外傷（衝撃波外傷を含む）に伴う循環動態の変化と中枢神経の役割。第38回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2024年4月25日

大西光雄：化学物質の対応・危機管理。東京大学大学院公共健康医学講義、東京、2024年5月13日

大西光雄：化学テロに関する海外の解毒薬等の情報。NBCネットワーク専門家会合における講演、東京、2024年8月1日

大西光雄：全日本病院医療支援班（AMAT）隊員養成研修 講義研修。“災害時要配慮者” “災害時に留意すべき疾病” “感染対策” 東京（WEB配信）、2024年9月15日

大西光雄：全日本病医療支援班（AMAT）隊員要請研修。実習研修、大阪、2025年1月19日

大西光雄：事態対処救護コース開催（責任者）。2024年7月18日（鹿児島）、2024年10月12日（仙台）、2025年2月13日（大阪）、2025年2月27日（大阪）

石田健一郎：大阪市中心区東医師会 三師会共催 救急医療講習会。「災害に備えるー保健・医療・福祉の連携による地域防災計画の強靱化ー」、大阪、2024年9月19日

臨床研究推進室

室長 森下典子

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理および支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中にそれぞれ「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

臨床研究推進室の構成員は、部長1名、室長1名、臨床研究コーディネーター（CRC）8名、治験・臨床研究事務局6名、データマネジャー1名、事務取扱主任1名、事務補助2名、研究員1名である（2025年3月末現在）。

臨床研究推進室は、CRCや治験事務局が治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している。また受託研究審査委員会第1委員会事務局機能も併せ持っている。

臨床研究法や各種臨床研究関連指針が適応される自主研究支援では、CRCが限定的ではあるが臨床研究支援を行っている他、受託研究審査委員会第2委員会事務局が毎月の円滑な審議のため、研究者等と調整を行っている。他にも研究責任者からの依頼に応じて他施設共同研究における契約対応や、研究実施に関連する様々な相談にも対応している。

治験実績（受託研究費請求額）では、今年度は国立病院機構内施設で全国4位から6位の成績で概ね推移していた。新規受託件数23件、総件数107件、研究請求金額総額は2025年3月時点で2億円を超えて、目標を達成することができた。新規受託件数23件のうち、当院に直接依頼があった課題は13件（うち、医師主導治験3件）、国立病院機構本部からの紹介課題2件、SMO（Site Management Organization）からの紹介課題8件と、年々SMOを通じた治験紹介が増加傾向にあり、治験依頼者の施設選定方法が変化してきているため、今後も治験依頼者やSMOと積極的にコミュニケーションをとり、新規治験獲得に向け努力していきたい。

また、治験や臨床研究に関連した文書では、それぞれに電磁化を図り、順調に運営できている。今後も2つの研究事務局と研究者、治験依頼者の効率性が高まるようにさらに体制を整えていきたい。

自主研究の支援では先進医療Bを2件、新型コロナワクチンコホート調査、国立病院機構院長協議会依頼の多施設共同研究の支援を実施した他、新たに特定臨床研究を1件支援している。また、質の高い臨床研究の実施を進めるために、研究機関の長が行う点検（自己点検）を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。

また、大阪府内16医療機関で形成する「治験ネットおおさか」の活動にも参加している他、教育・学術活動では、学会・研究会で発表を行い、国立病院機構本部主催の初級者CRC養成研修や実務者研修では講師を務めた。

院内教育および啓発活動としては、従来通り「治験セミナー」、「臨床研究セミナー」を開催した他、「臨床研究推進室ニュース」を年3回の紙面発行から、毎月1回

メールで送信する形に変更し、職員に最新ニュースを届けている。

【2024 年度 研究発表業績】

B-3

森下典子: シンポジウム 23 GCP 違反はなぜ生じるか? GCP 違反を防ぐために! 「CRC の立場から GCP 違反について考える」。第 45 回日本臨床薬理学会学術総会、埼玉、2024 年 12 月 14 日

B-4

千賀明日香、名畑優保、福岡利恵、森下典子、金村米博: RCA 分析を用いた逸脱管理の向上。第 24 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2024 in Sapporo、札幌、現地・web 開催、2024 年 9 月 15 日～9 月 16 日

三井知子、小林恭子、松尾友香、濱 充代、森下典子、金村米博: 治験実施状況の評価ー10 年間で A 病院の間で治験実施状況は治験手続き、組み入れスピードはどのように変化したのかー。第 24 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2024 in Sapporo、札幌、現地・web 開催、2024 年 9 月 15 日～9 月 16 日

柚本育世、羽田かおる、森下典子、金村米博、瀬戸口 由、津谷 寛、井上睦実、上野智子、石山 薫、物部加容子、齊藤祐介、綱本郷子、刈崎恵美子、吉川実希、北地祐子、大倉久敬、森下原久美子、寺川伸江、八丸香南子、田中将晴、森 英人、根上直樹、清水宏太郎、松村なるみ: 近畿グループ内における治験・臨床研究の実施・管理の均質化、適正化の取り組み。第 78 回 国立病院総合医学会、大阪、2024 年 10 月 18 日～10 月 19 日

B-8

森下典子: CRC 実務者の方へ。国立病院機構本部主催令和 6 年度 臨床研究コーディネーター実務者研修、Web 開催、2024 年 6 月 28 日

羽田かおる: がん領域における CRC 業務の実際。がん CRC 学会第 4 回学術集会、Web 開催、2024 年 7 月 14 日

松尾友香: 「電磁化がもたらす未来～導入は Goal じゃない! その先にある未来～」医療機関における電磁化がもたらしたもの。国立病院機構近畿グループ主催令和 6 年度 臨床研究・治験研修、Web 開催、2024 年 8 月 9 日

千賀明日香: CRC の役割と倫理的態度。国立病院機構本部主催令和 6 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修、Web 開催、2024 年 9 月 3 日

森下典子: 治験依頼者に選ばれる施設を目指して。国立病院機構中国四国グループ主催 令和 6 年度中国四国グループ内治験・臨床研究研修会、Web 開催、2025 年 1 月 27 日

レギュラトリーサイエンス研究室

室長 松村 泰志

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づく的確な予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。的確な予測、評価、判断によって①限りなく進歩する科学技術を正しく生かして有効に利用する最善の道を見出すことと、②人間の願望から出発した科学技術が、社会や人間を無視して発達することによってもたらされる深刻な影響を未然に防ぐこと、の二つの大きな目的/役割を担っている。当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成 23 年 4 月に設立された。

令和 3 年度に室長が交代し、電子カルテデータを Real World Data のソースとして活用する臨床研究のあり方に焦点を当てた研究を行っている。多施設の電子カルテをネットワークで結び、共通するテンプレートで入力を誘導して電子症例報告書のファイルでセンターに集める仕組みについて研究し、大阪大学との共同で OCR-net の臨床研究基盤システムにおいて実現させ、これを活用した多施設共同研究を実施してきた。また、三井住友銀行との共同で Personal Health Record のシステムの開発を進め、個人が施設をまたがって診療を受けている場合でも、個人の疾患に関する重要な診療データが構造化されて集積することで、予後追跡が可能となり長期のアウトカムによる評価を可能とし、患者の QOL を測定し、費用効果分析の基盤を構築することを目指す。評価し、する仕組みについて研究開発してきた。令和 6 年度は、これまでの研究を継続させ、各方面からの依頼を受けて講演を行った。

【2024年度 研究発表業績】

A-0

Takeuchi T, Ueda Y, Kosugi S, Ikeoka K, Yamane H, Ohashi T, Iehara T, Ukai K, Oozato K, Oosaki S, Nakamura M, Ozaki T, Mishima T, Abe H, Inoue K, Matsumura Y. : The impact of door to extracorporeal cardiopulmonary resuscitation time on mortality and neurological outcomes among out-of-hospital cardiac arrest acute myocardial infarction patients treated by primary percutaneous coronary intervention. 「Am Heart J Plus」 47 : 100473、2024 年 10 月 14 日

Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Okada K, Nakashima K, Matsumura Y, Takeda T. : Assessment of Follow-Up for Pulmonary Nodules from Radiology Reports with Natural Language Processing. 「Stud Health Technol Inform」 316 : 1795-1799、2024 年 8 月 22 日

Wada S, Takeda T, Okada K, Manabe S, Konishi S, Kamohara J. Matsumura Y, :

Oversampling effect in pretraining for bidirectional encoder representations from transformers (BERT) to localize medical BERT and enhance biomedical BERT. 「Artif Intell Med」 153 : 102889、2024 年 7 月

Hiasa K, Kaku H, Inoue H, Yamashita T, Akao M, Atarashi H, Ikeda T, Koretsune Y, Okumura K, Shimizu W, Suzuki S, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Morishima Y, Takita A, Tsutsui H. : Echocardiographic Parameters of Left Atrial Structure and Function and Clinical Outcomes at 2 Years in Elderly Patients With Atrial Fibrillation — The ANAFIE Echocardiographic Substudy —. 「Circulation Journal」 25 : 88(7) : 1155-1164、2024 年 6 月

Suzuki S, Yamashita T, Akao M, Atarashi H, Ikeda T, Okumura K, Koretsune Y, u Shimizu W, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Morishima Y, Fukuzawa M, Takita A, Inoue H. : Patient Outcomes in Very Elderly Patients With Non-Valvular Atrial Fibrillation — ANAFIE Registry —. 「Circulation Reports」 23 : 6(8) : 283-293、2024 年 7 月

Yusof MM, Takeda T, Shimai Y, Mihara N, Matsumura Y. : Evaluating health information systems-related errors using the human, organization, process, technology-fit (HOPT-fit) framework. 「Health Informatics J」 30(2)、2024 年 4 月-6 月

Yamamoto T, Mizokami Y, Yamashita T, Akao M, Atarashi H, Ikeda T, Koretsune Y, Okumura K, Shimizu W, Suzuki S, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Morishima Y, Takita A, Hiroshi Inoue H. : Gastrointestinal bleeding in elderly patients with atrial fibrillation: prespecified All Nippon Atrial Fibrillation in the Elderly (ANAFIE) Registry subgroup analysis. 「Scientific Reports」 27 : 14(1) : 9688、2024 年 4 月

Nakamura M, Inoue H, Yamashita T, Akao M, Atarashi H, Ikeda T, Koretsune Y, Okumura K, Shimizu W, Suzuki S, Tsutsui H, Toyoda K, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Morishima Y, Fukuzawa M, Takita A, Hirayama A. : Coronary events in elderly patients with non-valvular atrial fibrillation: a prespecified sub-analysis of the ANAFIE registry. 「Cardiovasc Interv Ther」 39(2) : 145-155、2024 年 4 月

Konishi S, Manabe S, Shimai Y, Namiuchi Y, Sugimoto K, Wada S, Okada K, Matsumura Y, Takeda T. : Implementation of a Multilingual Electronic Medical Questionnaire: For Use Inside or Outside the Hospital. 「Stud Health Technol Inform」 : 310 : 1360-1361、2024 年 1 月 25 日

Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Okada K, Manabe S, Matsumura Y, Takeda T. : Classification of Diagnostic Certainty in Radiology Reports with Deep Learning. 「Stud Health Technol Inform」 25 : 310 : 569-573、2024 年 1 月 25 日

Okada K, Sugimoto K, Wada S, Konishi S, Manabe S, Matsumura Y, Takeda T. :
Development of the Clinical Specimen Information Management System for Multicenter
Clinical Studies. 「Stud Health Technol Inform」 310 : 119-123、2024 年 1 月 25 日

A-6

松村泰志:第 78 回国立病院総合医学会の概要「医療の広場令和 7 年 1 月号」65;P40-
42、公益財団法人政策医療振興財団、2025 年 1 月 10 日

B-3

松村泰志:電子カルテに入力される臨床データを流通・活用するためのシステム。
第 24 回日本糖尿病インフォマティクス学会年次学術集会、東京、2024 年 8 月 18
日

B-5

松村泰志 : 健康と医療の情報を自分で管理して役立てるには。第 6 回 NeXEHR
シンポジウム、東京、2024 年 5 月 20 日

松村泰志 : 禁忌・アレルギー情報の記載・管理のあり方。医療安全全国共同行動
第 18 回オンラインセミナー、Web、2025 年 2 月 18 日

—研究助成一覽—

令和6年度 研究助成一覧

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	微小流路を連結した灌流培養系によるα-シヌクレイン線維化条件の探索(22K07530)	福角 勇人	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	主任	継続	補助金(研究費)	110 万円	0 万円	33 万円	143 万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	治療・臨床研究にかかわる看護師の道徳的苦悩	森下 典子	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	10 万円	3 万円	13 万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	重症二次性三尖弁逆流に対するスパイラル・サスペンション法の有効性に関する臨床研究	西 宏之	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0 万円	1 万円	0 万円	1 万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	hiPSC幹細胞コンバージョン治療による損傷神経回路網再建機序と至適条件の解明	金村 米博	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	10 万円	3 万円	13 万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	可視化・定量化・ウイルス解析によるサージカルスモークの多角的解析研究	高橋 佑典	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	27 万円	8 万円	35 万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	定量的MRIによる神経腫瘍の分子診断と可視化技術の開発	金村 米博	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0 万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑥厚生労働科学研究費	様々な状況での肝炎ウイルス感染予防・重症化・再活性化予防の方策に資する研究	田中 聡司	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	40 万円	0 万円	40 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	主任	新規	補助金(研究費)	555 万円	0 万円	850 万円	1,405 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究	武山 雅博	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	950 万円	万円	950 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究	安尾 利彦	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	30 万円	0 万円	30 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究	矢倉 裕輝	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	200 万円	0 万円	200 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究	東 政美	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	30 万円	0 万円	30 万円
⑥厚生労働科学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染者に合併する悪性腫瘍の制御を目指した研究	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	30 万円	0 万円	30 万円
⑥厚生労働科学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染者に合併する悪性腫瘍の制御を目指した研究	阪森 亮太郎	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	30 万円	0 万円	30 万円
⑥厚生労働科学研究費	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者に対する外科治療の標準化に関する研究	上平 朝子	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	10 万円	0 万円	10 万円
⑥厚生労働科学研究費	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者に対する外科治療の標準化に関する研究	阪森 亮太郎	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	10 万円	0 万円	10 万円
⑥厚生労働科学研究費	大規模イベントに対する戦略的リスクアセスメント及びヘルスシステムの強化に向けた標準的枠組みに関する研究	大西 光雄	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	120 万円	0 万円	120 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV陽性者に対する精神・心理的支援方策の開発、及びHIV医療と精神科医療の連携体制構築に資する研究	白飯 琢磨	厚生労働科学研究費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	150 万円	0 万円	150 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0 万円	500 万円	0 万円	500 万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究	矢倉 裕輝	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0 万円	300 万円	0 万円	300 万円
⑩その他財団等からの研究費	エイズ発症予防に資するための血液製剤によるHIV感染者の調査研究	白飯 琢磨	友愛福祉財団研究助成金	主任	継続	補助金(研究費)	740 万円	0 万円	0 万円	740 万円
⑩その他財団等からの研究費	我が国初の本格的「救急止血法の訓練モデル」の開発	大西 光雄	中小企業政策推進事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0 万円	101 万円	30 万円	131 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	国内流行HIV及びその薬剤耐性株の長期的動向把握に関する研究	渡邊 大	エイズ対策実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	60 万円	18 万円	78 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	慢性期脳梗塞に対するIPS細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療開発	金村 米博	再生医療等実用化研究事業	主任	継続	委託研究費	2,450 万円	0 万円	740 万円	3,190 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	エイズウイルス完全排除を目指すワクチン開発に関する研究	渡邊 大	エイズ対策実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	225 万円	68 万円	293 万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑨日本医療研究開発機構研究費	切除可能な高頻度マイクロサテライト不安定性結腸直腸癌に対して免疫チェックポイント阻害薬を用いた根治治療の有効性・安全性を検討する研究	加藤 健志	臨床研究・治験推進事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	300 万円	90 万円	390 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	高齢者初発膵芽腫に対する分子分類に応じたテモゾロミド併用寡分分割放射線治療の最適化に関する研究開発	金村 米博	革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	100 万円	30 万円	130 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	可及的摘出術が行われた初発膵芽腫に対するカルムスチン脳内留置用剤を用いた標準治療確立に関する研究	金村 米博	革新的先端研究開発支援事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	髄芽腫、非定型奇形腫様ラブドイド腫瘍、上衣腫に対する標準治療開発を目的とした多施設共同研究	金村 米博	革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	250 万円	75 万円	325 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	進行胃癌を対象とした大網切除に対する大網温存の単劣性を検証するランダム化比較第Ⅲ相試験	平尾 素宏	革新的がん医療実用化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	遺伝子導入神経幹細胞を用いた脊髄機能再生に関する基礎研究	金村 米博	再生・細胞医療・遺伝子治療実現加速化プログラム	分担	継続	委託研究費	0 万円	1,000 万円	300 万円	1,300 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	エピゲノムの理解に基づく小児脳腫瘍の新規治療標的の同定を目指した研究開発	金村 米博	次世代がん医療加速化研究事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	100 万円	30 万円	130 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	BRAF V600E変異型切除可能大腸癌遠隔転移に対する個別化周術期治療の医師主導治験の実施	加藤 健志	臨床研究・治験推進事業	分担	継続	委託研究費	0 万円	5 万円	2 万円	7 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	進行食道胃接合部腺癌に対する標準的な周術期治療の開発研究	平尾 素宏	革新的がん医療実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	0 万円	5 万円	2 万円	7 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	血友病合併HIV/HCV重複感染に起因する肝硬変に対する抗線維化治療薬の開発	阪森 亮太郎	エイズ対策実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	0 万円	200 万円	60 万円	260 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	肝硬変患者の重症度別のQOLと長期経過、予後及びその改善に関する研究	阪森 亮太郎	肝炎等克服実用化研究事業 肝炎等克服緊急対策研究事業	分担	新規	委託研究費	0 万円	20 万円	6 万円	26 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	東アジア特異的RNFP213 p.R4810K バリエーションの迅速判定に基づく多血管疾患のリスク評価法の確立とその血管領域特異性を規定する要因の探索	岡崎 周平	循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	0 万円	50 万円	15 万円	65 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	全医療職/全医療部門が参画する先進的医療製品・システム開発を担う人材育成リスキング拠点(Bi-AMPS BASE)	金村 米博	優れた医療機器の創出に係る産業振興拠点強化事業	主任	新規	委託研究費	1,423 万円	0 万円	427 万円	1,850 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	胃癌食道癌術後患者に対するアナモレリンの臨床効果に関するランダム化比較試験	平尾 素宏	革新的がん医療実用化研究事業	分担	新規	委託研究費	0 万円	80 万円	24 万円	104 万円
⑪民間セクターからの寄附金	心臓血管外科手術における長時間人工心肺後凝固異常に対する薬物療法の検討	西 宏之	株式会社メディコスヒラタ	主任	新規	委託研究費	80 万円	0 万円	0 万円	80 万円
⑪民間セクターからの寄附金	心臓血管外科手術における長時間人工心肺後凝固異常に対する薬物療法の検討	西 宏之	株式会社バイタル	主任	新規	委託研究費	15 万円	0 万円	0 万円	15 万円
⑪民間セクターからの寄附金	血管内視鏡を用いた冠動脈疾患等動脈硬化性疾患患者の予後予測に関する観察研究他	上田 恭敬	日本ライフライン株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑪民間セクターからの寄附金	腰椎変性疾患による下垂足の手術成績 術前下腿周径からの予測	石黒 博之	京セラ株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑪民間セクターからの寄附金	DES留置後のDES Failure予防のために強化LDLコレステロール低下療法が有効か検討する単施設無作為化試験	上田 恭敬	アポットメディカルジャパン合同会社	主任	新規	委託研究費	300 万円	0 万円	0 万円	300 万円
⑪民間セクターからの寄附金	ポリ-L乳酸(PLLA)製の胸骨ピン又はPLLAとハイドロキシアパタイト(HA)粒子の複合体プレートを用いた閉胸法の検討	西 宏之	日本ライフライン株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑩その他財団等からの研究費	慢性期脳梗塞、脳出血及び外傷性中枢神経損傷を対象とするヒトiPS細胞を活用した新規再生医療等製品開発研究	金村 米博	株式会社ケイファーマ	主任	新規	共同研究費	5,217 万円	0 万円	783 万円	6,000 万円
⑩その他財団等からの研究費	無線通信機能搭載輸液ポンプを用いた病院業務の安全性向上と業務効率化システムの構築	松村 泰志	ニプロ株式会社	主任	新規	共同研究費	174 万円	0 万円	26 万円	200 万円
⑩その他財団等からの研究費	「抜針防止カバー」の開発	丸宮 和也	株式会社旭ボリスライダー	主任	新規	共同研究費	70 万円	0 万円	10 万円	80 万円
⑩その他財団等からの研究費	開発した神経分化誘導培地を使用した際の iPS 細胞由来神経細胞の興奮性/抑制性神経細胞の比率の同定	金村 米博	倉敷紡績株式会社	主任	新規	共同研究費	87 万円	0 万円	13 万円	100 万円
⑩その他財団等からの研究費	術者鉗子もしくは手術工程に連動する子宮マニピュレーターロボットの実現可能性の検討	飛梅 孝子	朝日サージカルロボティクス株式会社	主任	新規	共同研究費	9 万円	0 万円	1 万円	10 万円

—臨床研究センターの研究業績の
区分分類と業績件数の総括表—

臨床研究センターの研究業績

研究室名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
臨床研究センター																	
幹細胞医療研究室	1	1															
再生医療研究室	11	6							1		3	1					
分子医療研究室	26	5		1	1	1			1	1	3	11		1		1	
エイズ先端医療開発室	43	2	1	1	1	2	1			5		12	1	3	2	12	
HIV 感染制御研究室	18	1					1			1	2	5				8	
臨床疫学研究室	58	9		4				1		6	8	9	3	2		12	4
がん療法研究開発室	158	31		2	10					12	19	62	6	14		1	1
高度医療技術開発室	58	9				1				1	2	15		26		3	1
医療情報研究室	13	8			1			1			1		2				
災害医療研究室	19				1		3				6	2					7
臨床研究推進室	9																
レギュラトリーサイエンス研究室	15	11						1			1		2				
小計	429	83	1	8	14	4	5	3	2	26	46	120	14	46	2	42	13

研究業績の分類基準と記号

著 述 発 表 業 績 区 分						口 演 発 表 業 績 区 分									
A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
	単独執筆 編集者 監修者	共同執筆 (含連名)	原著	総説			シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)			
英文 著述	単行書		邦文著述 (学会誌・学術専門誌)		学術医学研究班報告書 講演発表論文	その他	国際学会		国内学会の全国年次学会		国内学会の地方会 及び分科会研究会		乗効調査 研究会発表	文化講演 教育講演等	TV 出演 ラジオ 放送出演

独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター
臨床研究センター
研究業績年報 2024 年

発行者 独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター 院長 松村泰志

編集 臨床研究センター
〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2 丁目 1 番 14 号
電話 (06) 6942-1331

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号
電話 (06) 6976-8761